
久 喜 市

栗 橋 関 所 番 士 屋 敷 跡

首都圏氾濫区域堤防強化対策における
埋蔵文化財発掘調査報告

2018

国土交通省 関東地方整備局
公益財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団

序

埼玉県の北東部の県境を流れる利根川は、坂東太郎の異名を持つ日本最大級の河川です。「刀祢河泊」として万葉集にも登場することからもわかるように、川と人との関わりは古く、交通路として、また、農業・生活・工業用水の供給源として、かぎりない恵みをもたらしてきました。

その一方、利根川は過去たびたび恐ろしい水害を引き起こしてきました。国土交通省ではこうした災害を未然に防ぐため、様々な対策を講じています。首都圏氾濫区域堤防強化対策事業もその一環です。

本事業地のある加須・羽生・久喜地区には、周知の埋蔵文化財包蔵地が多数存在しています。今回、発掘調査を行った久喜市の栗橋関所番士屋敷跡もその一つです。発掘調査は同事業に伴う事前調査であり、国土交通省関東地方整備局の委託を受け、当事業団が実施いたしました。

江戸時代の五街道の一つである日光道中の宿場であった栗橋は、利根川を渡る房川渡しに栗橋関所が置かれていました。栗橋関所番士屋敷跡は、関所を通る人や荷物を改める仕事をしていた「番士」と呼ばれる武士の屋敷跡です。今回の調査では、番士たちの生活にまつわる遺構や当時使われていた多くの遺物が発見されました。

また、番士を務めた足立家や島田家に伝わる古文書には、洪水による度重なる屋敷の損壊と再建が記されており、発掘調査によってもこのことが裏付けられました。

本書は、これらの発掘調査成果をまとめたものです。埋蔵文化財の保護並びに普及・啓発の資料として、また学術研究の基礎資料として、多くの方々に活用していただければ幸いです。

最後に、本書の刊行にあたり、発掘調査の諸調整にご尽力いただきました埼玉県教育局市町村支援部生涯学習文化財課をはじめ、国土交通省関東地方整備局、久喜市教育委員会並びに地元関係者の皆様に深く感謝申し上げます。

平成30年2月

公益財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団
理事長 塩野谷孝志

例 言

1. 本書は久喜市に所在する栗橋関所番土屋敷跡の発掘調査報告書である。

2. 遺跡名と代表地番、発掘調査届に対する指示通知は、以下のとおりである。

栗橋関所番土屋敷跡 (No86-009)

久喜市栗橋北2丁目3394-2他

平成24年5月9日付け教生文第2-4号

3. 発掘調査は、首都圏氾濫区域堤防強化対策に先立つ埋蔵文化財記録保存のための事前調査である。埼玉県教育局市町村支援部生涯学習文化財課が調整し、国土交通省関東地方整備局利根川上流事務所の委託を受け、公益財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団が実施した。

4. 各事業の委託事業名は、下記のとおりである。発掘調査事業（平成24年度）

「首都圏氾濫区域堤防強化対策（加須・羽生・久喜地区）における平成24年度埋蔵文化財発掘調査」

整理・報告書作成事業（平成29年度）

「首都圏氾濫区域堤防強化対策における平成29年度埋蔵文化財発掘調査（整理）（栗橋関所番土屋敷跡）」

5. 発掘調査・整理報告書作成事業はI-3に示した組織により実施した。

発掘調査は、平成24年4月6日から平成24年10月31日まで実施し、木戸泰夫、林雅恵が担当

した。

整理・報告書作成事業は、平成29年6月1日から平成29年12月31日まで実施し、福田聖が担当した。報告書は、平成30年2月22日に埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第436集として印刷・刊行した。

6. 発掘調査における基準点測量は日東サーベイ株式会社に委託した。

7. 発掘調査における空中写真は（株）シン技術コンサルに委託した。

8. 発掘調査における写真撮影は木戸、林が行い、出土遺物の写真撮影は福田が行った。

9. 出土品の整理・図版作成は福田が行った。

10. 本書の執筆は、I-1を埼玉県教育局市町村支援部生涯学習文化財課、その他を福田が行った。

11. 本書の編集は福田が行った。

12. 本書にかかる諸資料は平成30年3月以降、埼玉県教育委員会が管理・保管する。

13. 発掘調査や本書の作成にあたり、下記の方々、関係機関の皆様からご教示・ご協力を賜った。記して感謝いたします（敬称略五十音順）。

久喜市教育員会、池尻 篤、小西雅徳、
島村範久、鈴木伸哉、中村和夫、堀内謙一、
堀内秀樹、巻島千明、峯田元治、山崎吉弘

凡 例

1. 遺跡全体における X・Y の数値は、世界測地系、国家標準平面直角座標第Ⅱ系（原点北緯 36° 00' 00"、東経 139° 50' 00"）に基づく座標値を示す。また、各挿図に記した方位は全て座標北を指す。

B 3-D 8 グリッド北西杭の座標は、X = 15870000m、Y = -12000000m、北緯 36° 08' 34.6697"、東経 139° 41' 58.7556" である。

2. 調査に際して使用したグリッド名称は、事業地内の全体を覆うように設定した。座標値 X = 16000000m、Y = -12300000m を北西の原点 (A 1-A 1 グリッド) とし、100×100m の大グリッドを設定し、さらにその中を 10×10m の中グリッドに細分した。

3. 大グリッドの名称は、北西原点を基点に北から南にアルファベット (A・B・C…)、西から東に数字 (1・2・3…) を付し、アルファベットと数字を組み合わせた。同様に、中グリッドは各大グリッドの北西隅を基点に、北から南に a～j、西から東に 1～10 とし、大グリッド内を 100 に区分した。

これらを合わせた呼称は、ハイフオン (ー) をはさみ、大グリッドを左に、中グリッドを右に表記した。(大グリッド) - (中グリッド)

4. 各屋敷跡の呼称は、栗橋関所番士足立家・島田家・加藤家屋敷跡である。本書では、足立家・島田家・加藤家各家屋敷跡と略して表記する。
5. 本書の本文・挿図・表・写真図版に記した遺構の略号は、以下のとおりである。

S B…建物跡 S K…土壌 S E…井戸跡
S P…焼土遺構 P…ピット・柱穴

6. 本書における挿図は、一部の例外を除き以下の縮尺を原則とした。

全体図 1/800 遺構配置図 1/300
遺構図 1/100・1/80・1/60

遺物実測図・拓影図・合成図 1/3・1/4・1/2

7. 遺物実測図の表記方法は以下のとおりである。
施釉陶器は釉の範囲を一点鎖線、▼で示した。
8. 遺構断面図に表記した水準数値は、全て海拔標高 (単位 m) を表す。
9. 遺物観察表の表記方法は以下のとおりである。
・器種は陶器、磁器、炆器、土器、かわかけと表記した。
・遺物計測値は陶磁器、土器等を cm、石製品・銭貨を mm、重さを g 単位とした。
・土器計測値の () は復元推定値、[] は現存値を示す。
・胎土は特徴的な鉱物等を記号で示した。
A : 雲母 B : 片岩 C : 角閃石 D : 長石
E : 石英 F : 軽石 G : 砂粒子 H : 赤色粒子 I : 白色粒子 J : 針状物質 K : 黒色粒子 L : その他 M : チャート
・焼成は良好・普通・不良の 3 段階に分けて示した。
・残存率は図示した器形に対する大まかな遺存程度を % で示した。
・備考には出土位置、注記 No、煤の付着、生産窯、文様 (外面、見込み、底面の順)、年代、分類等を記した。
・瓦当文様の分類は、金子 1994 による。
10. 瓦計測表の瓦の分類は、以下のとおりである。
平瓦…棧瓦・平瓦 軒瓦…軒丸瓦・軒棧瓦・軒平瓦 道具瓦…冠瓦・伏間瓦・熨斗瓦
11. 本書に掲載した地形図類は国土地理院発行の 1/50000 地形図、久喜市発行の 1/2500 都市計画図を編集のうえ、使用した。
12. 文中の引用文献等は、(著者 発行年) の順で表記し、その他の参考文献とともに巻末に掲載した。

目次

序

例言

凡例

目次

I 発掘調査の概要	1	(5) 足立家屋敷跡出土の遺物	30
1. 発掘調査に至る経過	1	2. 島田家屋敷跡	46
2. 発掘調査・報告書作成の経過	2	(1) 盛土	46
3. 発掘調査・報告書作成の組織	2	(2) 島田家屋敷跡出土の遺物	46
II 遺跡の立地と環境	3	3. 加藤家屋敷跡	56
1. 地理的環境	3	(1) 建物跡	56
2. 歴史的環境	5	(2) 盛土	64
III 遺跡の概要	13	(3) 土壌	65
IV 検出された遺構と遺物	19	(4) 井戸跡	67
1. 足立家屋敷跡	19	(5) 加藤家屋敷跡出土の遺物	67
(1) 建物跡	19	V 調査のまとめ	130
(2) 盛土	25		
(3) 石垣	25		
(4) 焼土遺構	25		

写真図版

挿図目次

第1図 埼玉県の地形	3	第13図 第2号建物跡(2)	24
第2図 周辺の地形	4	第14図 盛土	26
第3図 周辺の遺跡(中世)	6	第15図 盛土・石垣(1)	27
第4図 周辺の遺跡(近世)	7	第16図 盛土・石垣(2)	28
第5図 都市計画図・番土屋敷跡全体図	14	第17図 第1～10号焼土遺構	29
第6図 番土屋敷跡全体図	15	第18図 第1号建物跡出土遺物	31
第7図 分割図(1)	16	第19図 第1・2号建物跡・ 焼土遺構出土遺物	32
第8図 分割図(2)	17	第20図 盛土出土遺物(1)	33
第9図 分割図(3)	18	第21図 盛土出土遺物(2)	34
足立家屋敷跡		第22図 第1号建物跡出土瓦(1)	37
第10図 第1号建物跡(1)	20	第23図 第1号建物跡出土瓦(2)	38
第11図 第1号建物跡(2)	21	第24図 盛土出土瓦	39
第12図 第2号建物跡(1)	23		

第25図	木製品 (1)	41
第26図	木製品 (2)	42
第27図	鉄製品	43
第28図	古銭	44
第29図	石製品	45

島田家屋敷跡

第30図	盛土	47
第31図	盛土出土遺物 (1)	48
第32図	盛土出土遺物 (2)	49
第33図	表探遺物	50
第34図	土製品	52
第35図	瓦	53
第36図	盛土出土鉄製品	54
第37図	古銭	54
第38図	石製品	55

加藤家屋敷跡

第39図	第1a号建物跡	57
第40図	第1b号建物跡	58
第41図	第1b号建物跡瓦散布状況	59
第42図	第2号建物跡 (1)	60
第43図	第2号建物跡 (2)	61
第44図	第3号建物跡	61
第45図	第3号建物跡周辺礫分布図	62
第46図	盛土 (1)	63
第47図	盛土 (2)	64
第48図	土壌	66
第49図	井戸跡	68
第50図	第1号建物跡出土遺物 (1)	69
第51図	第1号建物跡出土遺物 (2)	70
第52図	第1号建物跡出土遺物 (3)	71
第53図	第2号建物跡出土遺物	72
第54図	第2・3号建物跡出土遺物	73
第55図	盛土出土遺物 (1)	74
第56図	盛土出土遺物 (2)	75
第57図	盛土出土遺物 (3)	76
第58図	盛土出土遺物 (4)	77

第59図	盛土出土遺物 (5)	78
第60図	盛土出土遺物 (6)	79
第61図	土壌出土遺物 (1)	80
第62図	土壌出土遺物 (2)	81
第63図	土壌出土遺物 (3)	82
第64図	土壌出土遺物 (4)	83
第65図	土壌出土遺物 (5)	84
第66図	井戸跡出土遺物 (1)	85
第67図	井戸跡出土遺物 (2)	86
第68図	井戸跡出土遺物 (3)	87
第69図	ガラス製品	100
第70図	土製品	101
第71図	建物跡出土瓦 (1)	102
第72図	建物跡出土瓦 (2)	103
第73図	建物跡出土瓦 (3)	104
第74図	建物跡出土瓦 (4)	105
第75図	建物跡出土瓦 (5)	106
第76図	土壌出土瓦 (1)	107
第77図	土壌出土瓦 (2)	108
第78図	土壌出土瓦 (3)	109
第79図	井戸跡出土瓦	109
第80図	木製品 (1)	113
第81図	木製品 (2)	114
第82図	鉄製品 (1)	116
第83図	鉄製品 (2)	117
第84図	鉄製品 (3)	118
第85図	鉄製品 (4)	119
第86図	鉄製品 (5)	120
第87図	古銭	123
第88図	石製品 (1)	125
第89図	石製品 (2)	126
第90図	石製品 (3)	127
第91図	石製品 (4)	128
第92図	各屋敷跡盛土形成模式図	134
第93図	栗橋宿跡・番士屋敷跡関係図	136

表目次

第1表 周辺の遺跡一覧	8	第18表 石製品観察表	55
足立家屋敷跡		加藤家屋敷跡	
第2表 遺構出土遺物観察表	35	第19表 第1号建物跡出土遺物観察表	88
第3表 盛土出土遺物観察表	35	第20表 第2・3号建物跡出土遺物観察表	89
第4表 第1号建物跡出土瓦観察表	40	第21表 盛土出土遺物観察表	91
第5表 盛土出土瓦観察表	40	第22表 土壌出土遺物観察表	93
第6表 瓦計測表	40	第23表 井戸跡出土遺物観察表	95
第7表 木製品観察表	43	第24表 ガラス製品観察表	96
第8表 鉄製品観察表	44	第25表 土製品観察表	96
第9表 古銭観察表	44	第26表 建物跡出土瓦観察表	110
第10表 石製品観察表	46	第27表 土壌出土瓦観察表	111
島田家屋敷跡		第28表 井戸跡出土瓦観察表	112
第11表 盛土出土遺物観察表	51	第29表 瓦計測表	112
第12表 表採遺物観察表	52	第30表 木製品観察表	115
第13表 土製品観察表	52	第31表 鉄製品観察表	120
第14表 瓦観察表	53	第32表 古銭観察表	124
第15表 瓦計測表	54	第33表 石製品観察表	129
第16表 盛土出土鉄製品観察表	54	第34表 加藤家屋敷跡陶磁器出土状況	132
第17表 古銭観察表	55	第35表 栗橋関係調査一覧	135

写真図版目次

図版1	1 調査区全景	島田家・加藤家屋敷跡	
	2 調査区全景（南西から）	図版5	1 島田家屋敷跡盛土
	3 調査区全景（北東から）		2 加藤家第1a号建物跡
足立家屋敷跡			3 加藤家第1b号建物跡
図版2	1 第1号建物跡（1）	加藤家屋敷跡	
	2 第1号建物跡（2）	図版6	1 第2号建物跡（1）
	3 第1号建物跡（3）		2 第2号建物跡（2）
図版3	1 第2号建物跡		3 第3号建物跡
	2 第2号建物跡カマド	図版7	1 第1号土壌
	3 盛土（1）		2 第1号土壌断面
図版4	1 盛土（2）		3 第1号土壌遺物出土状況
	2 盛土（3）		4 第3・4号土壌
	3 石垣		5 第5号土壌

- 6 第1号井戸跡
- 7 第2号井戸跡
- 8 足立家焼土遺構群

足立家屋敷跡

- 図版8 1 第1号建物跡(第18図1)
- 2 第1号建物跡(第18図2)
- 3 第1号建物跡(第19図10)
- 4 第1号建物跡(第19図11)
- 5 第1号建物跡(10・11組合せ)

- 図版9 1 第1号建物跡(第19図3)
- 2 盛土(第20図1)
- 3 盛土(第20図5)
- 4 盛土(第20図7)
- 5 盛土(第20図8)
- 6 盛土(第20図9)
- 7 盛土(第20図10)
- 8 盛土(第20図11)
- 9 盛土(第20図12)
- 10 盛土(第21図18)
- 11 盛土(第21図20)
- 12 盛土(第21図22)
- 13 盛土(第21図24)
- 14 盛土(第21図25)

- 図版10 1 盛土(第21図27)
- 2 盛土(第21図28)
- 3 盛土(第21図30)
- 4 盛土(第21図31)
- 5 土製品(第21図32)
- 6 土製品(第21図33)
- 7 盛土(第24図5)
- 8 第1号建物跡(第23図17)
- 9 盛土(第24図1)
- 10 木製品(第25図1)

- 図版11 1 木製品(第25図2)
- 2 木製品(第25図3)
- 3 木製品(第25図4)
- 4 木製品(第25図5)

- 5 木製品(第25図6)
- 6 木製品(第25図11)
- 7 木製品(第25図12)
- 8 木製品(第25図13)
- 9 木製品(第25図14)
- 10 木製品(第26図15)

- 図版12 1 木製品(第25図7)
- 2 木製品(第25図8)
- 3 木製品(第25図9)
- 4 木製品(第25図10)
- 5 木製品(第26図16)
- 6 木製品(第26図17)
- 7 木製品(第26図)
- 8 鉄製品(第27図3)

- 図版13 1 鉄製品(第27図)
- 2 古銭(第28図1)
- 3 古銭(第28図2)
- 4 古銭(第28図3)
- 5 古銭(第28図5)
- 6 石製品(第29図)
- 7 石製品(第29図8)

- 1 鉄製品(第27図)
- 2 古銭(第28図1)
- 3 古銭(第28図2)
- 4 古銭(第28図3)
- 5 古銭(第28図5)
- 6 石製品(第29図)
- 7 石製品(第29図8)

島田家屋敷跡

- 図版14 1 盛土(第31図1)
- 2 盛土(第31図2)
- 3 盛土(第31図3)
- 4 盛土(第31図4)
- 5 盛土(第31図5)
- 6 盛土(第31図12)
- 7 盛土(第31図13)
- 8 盛土(第32図29)
- 9 盛土(第32図30)
- 10 盛土(第32図31)
- 11 表探(第33図4)
- 12 表探(第33図10)
- 13 表探(第33図11)
- 14 古銭(第37図1)
- 15 石製品(第38図1)

図版15	1	表採 (第33図)	15	盛土 (第56図16)
	2	土製品 (第34図1)	図版18	1 盛土 (第56図18)
	3	土製品 (第34図2)		2 盛土 (第56図20)
	4	土製品 (第34図3)		3 盛土 (第56図21)
	5	瓦 (1) (第35図)		4 盛土 (第56図23)
	6	瓦 (2) (第35図)		5 盛土 (第57図24)
	7	鉄製品 (第36図)		6 盛土 (第57図25)
				7 盛土 (第57図26)
				8 盛土 (第57図28)
				9 盛土 (第57図29)
				10 盛土 (第57図30)
				11 盛土 (第57図33)
				12 盛土 (第57図34)
				13 盛土 (第57図35)
			図版19	1 盛土 (第57図37)
				2 盛土 (第58図42)
				3 盛土 (第58図43)
				4 盛土 (第58図44)
				5 盛土 (第58図45)
				6 盛土 (第58図47)
				7 盛土 (第58図49)
				8 盛土 (第58図51)
				9 盛土 (第58図52)
				10 盛土 (第59図60)
				11 盛土 (第59図64)
				12 盛土 (第59図66)
				13 盛土 (第60図67)
			図版20	1 盛土 (第60図68)
				2 盛土 (第60図70)
				3 盛土 (第60図71)
				4 盛土 (第60図72)
				5 盛土 (第60図73)
				6 盛土 (第60図74)
				7 盛土 (第60図75)
				8 盛土 (第60図76)
				9 盛土 (第60図77)
				10 盛土 (第60図78)

加藤家屋敷跡

図版16	1	第1号建物跡 (第50図1)
	2	第1号建物跡 (第50図6)
	3	第1号建物跡 (第50図18)
	4	第1号建物跡 (第50図21)
	5	第1号建物跡 (第52図46)
	6	第1号建物跡 (第52図56)
	7	第2号建物跡 (第53図2)
	8	第2号建物跡 (第53図4)
	9	第2号建物跡 (第53図5)
	10	第2号建物跡 (第53図12)
	11	第2号建物跡 (第53図14)
	12	第2号建物跡 (第53図20)
	13	第2号建物跡 (第54図26)
	14	第2号建物跡 (第54図28)
	15	第2号建物跡 (第54図29)
図版17	1	第2号建物跡 (第54図30)
	2	第2号建物跡 (第54図36)
	3	第2号建物跡 (第54図44)
	4	盛土 (第55図1)
	5	盛土 (第55図2)
	6	盛土 (第55図3)
	7	盛土 (第55図4)
	8	盛土 (第55図5)
	9	盛土 (第55図6)
	10	盛土 (第55図9)
	11	盛土 (第56図10)
	12	盛土 (第56図13)
	13	盛土 (第56図14)
	14	盛土 (第56図15)

	11 盛土 (第60図79)		14 第5号土壙 (第65図85)
	12 盛土 (第60図80)		15 第5号土壙 (第65図86)
	13 盛土 (第60図82)	図版23	1 第5号土壙 (第65図87)
図版21	1 第1号土壙 (第61図2)		2 第5号土壙 (第65図88)
	2 第1号土壙 (第61図7)		3 第5号土壙 (第65図91)
	3 第1号土壙 (第61図8)		4 第5号土壙 (第65図92)
	4 第1号土壙 (第62図9)		5 第2号井戸跡 (第66図3)
	5 第1号土壙 (第62図10)		6 第2号井戸跡 (第66図9)
	6 第1号土壙 (第62図16)		7 第2号井戸跡 (第66図10)
	7 第1号土壙 (第62図20)		8 第2号井戸跡 (第67図17)
	8 第1号土壙 (第62図22)		9 第2号井戸跡 (第67図19)
	9 第1号土壙 (第62図23)		10 第2号井戸跡 (第67図23)
	10 第1号土壙 (第62図24)		11 第2号井戸跡 (第67図25)
	11 第1号土壙 (第62図25)		12 第2号井戸跡 (第67図28)
	12 第1号土壙 (第62図26)		13 第2号井戸跡 (第68図30)
	13 第1号土壙 (第62図27)		14 第2号井戸跡 (第68図31)
	14 第1号土壙 (第62図28)		15 第3号井戸跡 (第68図37)
	15 第1号土壙 (第63図34)	図版24	1 土製品 (第70図2)
図版22	1 第2号土壙 (第63図39)		2 土製品 (第70図9)
	2 第3号土壙 (第63図40)		3 土製品 (第70図10)
	3 第3号土壙 (第63図49)		4 土製品 (第70図15)
	4 第3号土壙 (第64図53)		5 土製品 (第70図20)
	5 第2号土壙 (第64図59)		6 土製品 (第70図21)
	6 第3号土壙 (第64図61)		7 土製品 (第70図)
	7 第3号土壙 (第64図62)		8 ガラス製品 (第69図1)
	8 第3号土壙 (第64図65)		9 第1号建物跡 (第71図1)
	9 第3号土壙 (第64図67)		10 第1号建物跡 (第72図2)
	10 第3号土壙 (第64図68)		11 第1号建物跡 (第72図4)
	11 第3号土壙 (第65図73)	図版25	1 鉄製品 (1) (第84図)
	12 第5号土壙 (第65図80)		2 鉄製品 (2) (第85図)
	13 第5号土壙 (第65図84)	図版26	1 鉄製品 (3) (第86図1)

I 発掘調査の概要

1. 発掘調査に至る経過

国土交通省関東地方整備局利根川上流河川事務所では「利根川水系利根川・江戸川河川整備計画【大臣管理区間】」に基づき、首都圏氾濫区域堤防強化対策事業として、利根川右岸の堤防を拡幅し、強化する事業を進めている。

埼玉県教育局市町村支援部生涯学習文化財課では、国が実施するこうした公共開発事業に係る埋蔵文化財の保護について、従前より関係部局と事前協議を重ね、調整を図ってきたところである。

首都圏氾濫区域堤防強化対策事業に係る埋蔵文化財の所在及び取り扱いについては、利根川上流河川事務所長から平成17年1月20日付け利上沿第18号で、埼玉県教育委員会教育長あて、埋蔵文化財の所在及びその取扱いについて照会がなされた。

事業予定区域内には埼玉県指定旧跡や周知の埋蔵文化財包蔵地が所在すること、埋蔵文化財の詳細な状況等を把握するための確認調査を実施する必要がある旨を、平成17年3月17日付け教生文第1780号で回答した。

なお当該箇所は、平成17年度に久喜市教育委員会（当時は栗橋町教育委員会）により新たな栗橋宿絵図が発見されたことにより、遺構の所在する可能性が高いと判断し、「栗橋関所番土屋敷跡」として埋蔵文化財包蔵地に登載した。

平成23年12月に本遺跡を対象とした確認調査を実施した。その結果、土坑、ピットが検出され、近世の陶磁器類も出土した。

上記の埋蔵文化財の所在が明確になったことがあ

ら、利根川上流河川事務所長あてに、計画上やむを得ず現状を変更する場合は、記録保存のための発掘調査の実施が必要な旨を回答し、取り扱いについて協議を重ねたが、現状保存が困難であることから記録保存の措置を講ずることとなった。

調査に際し、発掘調査実施機関である公益財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団と、国土交通省関東地方整備局利根川上流河川事務所、生涯学習文化財課の三者で、工事日程、調査計画、調査期間などについて定期的に会議を開催し、各種の調整を行った。

文化財保護法第94条の規定による埋蔵文化財発掘通知が利根川上流河川事務所長から平成24年2月9日付け国関整利上沿第27号で、埼玉県教育委員会教育長あて提出された。それに対する埼玉県教育委員会教育長からの勧告は下記のとおりである。

平成24年2月9日付け教生文第4-1337号

また同法第92条の規定による発掘調査届が公益財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団理事長から提出され、それに対する埼玉県教育委員会教育長からの指示通知は下記のとおりである。

平成24年5月9日付け教生文第2-4号

(埼玉県教育局市町村支援部生涯学習文化財課)

2. 発掘調査・報告書作成の経過

(1) 発掘調査

栗橋岡所番土屋敷跡の調査は首都圏氾濫区域堤防強化対策工事に先立ち、平成24年度に実施した。調査面積は3,523.22㎡である。

調査は平成24年4月6日から平成24年10月31日まで実施した。

事前準備として、4月9日から4月11日に開欄、4月13日に発掘事務所の設置を行った。

重機による表土除去作業は、4月11日から6月5日にかけて実施した。4月25日からは補助員による作業を開始し、遺構確認作業を行った。

遺構測量用の基準点測量及びグリッド杭打設作業は、6月7日から6月15日に実施した。

確認作業の結果、足立家では盛土、石垣、建物跡が、加藤家では盛土、建物跡が、島田家では盛土が検出された。精査後、盛土の除去を行った。加藤家の盛土内からは建物跡、土壇が、盛土下から、建物跡、井戸跡が検出された。順次遺構断面図、平面図、写真撮影等の記録作成作業を行った。

9月26日に遺物、器材を撤収して現地調査を終

了した。その後10月9日から31日に重機により危険箇所を埋め戻し、現地調査を終了した。

(2) 整理報告書作成

整理報告書の作成作業は、平成29年6月1日から平成29年12月31日まで実施した。

作業は出土遺物の水洗・注記から開始し、直ちに接合復元に着手した。復元を終えた遺物は順次実測、トレース、採拓を経て印刷用の挿図を作成した。11月には図版用の遺物写真を撮影した。

同時に、発掘調査で記録した遺構の断面図や平面図等を照合し、修正を加えてスキャナでコンピュータに取り込んだ。その後、画像編集ソフトを用いて遺構ごとにトレースし、土層説明等を組み込んで、印刷用の版下とした。

11月までに原稿執筆を終え、報告書の編集を行った。入稿後、3回の校正を経て、平成30年2月22日に報告書（本書）を刊行した。

なお、図面や写真などの記録類や遺物は、平成29年12月に整理分類のうえ、埼玉県文化財収蔵施設の収蔵庫へ仮収納した。

3. 発掘調査・報告書作成の組織

平成24年度（発掘調査）

理 事 長	中 村 英 樹
常務理事兼総務部長	根 本 勝
総務部	
総 務 部 副 部 長	富 田 和 夫
総 務 課 長	矢 島 将 和

調査部	
調 査 部 長	昼 間 孝 志
調 査 部 副 部 長	鯉 持 和 夫
調 査 第 二 課 長	黒 坂 慎 二
主 査	木 戸 春 夫
主 事	林 雅 恵

平成29年度（報告書作成）

理 事 長	塩野谷 孝 志
常務理事兼総務部長	川 目 晴 久
総務部	
総 務 部 副 部 長	黒 坂 慎 二
総 務 課 長	曾 川 浩 二

調査部	
調 査 部 長	赤 熊 浩 一
調査部副部長兼整理第二課長	吉 田 稔
主 査	福 田 聖

Ⅱ 遺跡の立地と環境

1. 地理的環境

栗橋関所番士屋敷跡は、久喜市栗橋北2丁目に所在する。J R宇都宮線、東武日光線の栗橋駅から北東0.8kmにあたる。久喜市は埼玉県の北東端に位置し、利根川を挟んで茨城県古河市、五霞町に接している。J R宇都宮線、東武日光線の県東部の主要鉄道が通り、国道4号・125号、県道3号埼玉栗橋線・12号川越栗橋線が交差する鉄路、陸路の県北東部における結節点である。

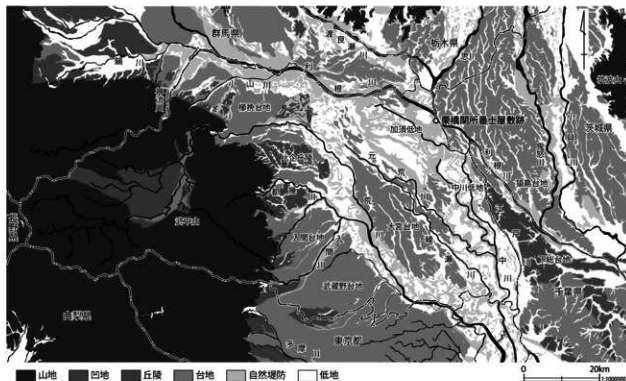
久喜市は平成22年に久喜市、栗橋町、菖蒲町、鷺宮町が合併して、新市としての久喜市となった。旧栗橋町域は現在でも栗橋地区と称されており、以下では栗橋地区の呼称を用いて記述する。

栗橋地区は、日光街道の宿場町として栄え、南流する利根川を用いた舟運と合わせて現代に至るまで大いに賑わいをみせている。

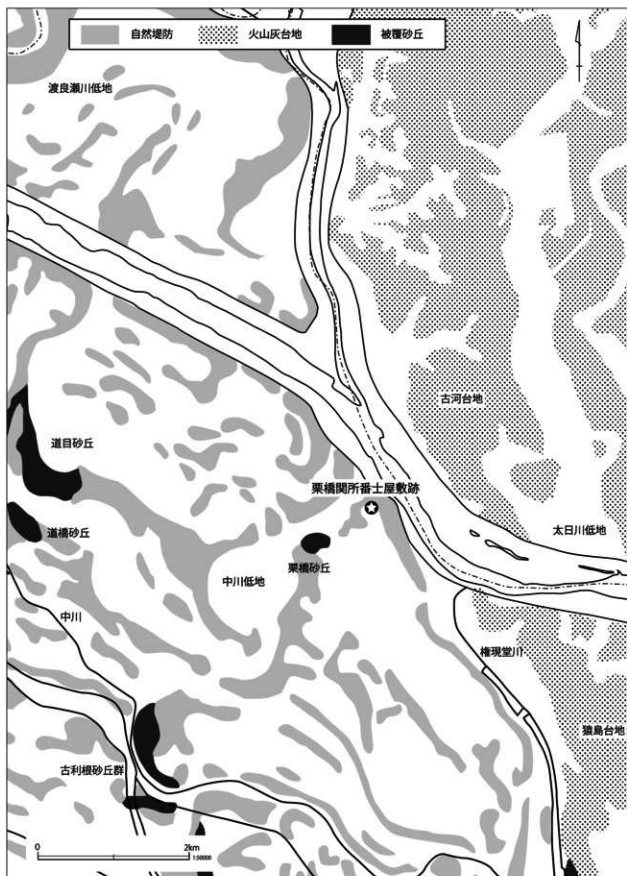
また、一度市街を離れると、水田の中に自然堤防に沿って、帯状の屋敷林が点在する景観となる。

遺跡は中川低地の北に位置している。中川低地は関東平野のほぼ中央、利根川中流域低地である加須低地の西側に当たる。南側は大宮台地、東側は利根川を越えて古河台地になる。

中川低地は、埼玉平野の北東に位置し、西側は加須低地、東側は猿島台地に接している。最終氷期に、大宮台地から館林台地にかけて連続していたローム台地である大宮-館林台地の東側、渡良瀬川によって削られた深さ30mの中川峡谷に、砂質土が堆積して形成された低地である。その結果、現在の利根川の流れに沿った、南東側に開いた低地となっている。また妻沼低地、加須低地付近は関東造盆地運動の最も沈降の度合いが強い地域として知られ、現在でも沈降が進んでいる。古墳時代後期の羽生市小松1号墳は、地下3mのローム面に構築された埋没古墳として著名である(矢口・瀧瀬1996)。沈降前の利根川は現在の荒川筋を流



第1図 埼玉県の地形



第2図 周辺の地形

れており、この造盆地運動によって現在の利根川
の方向へと東遷したとされている。しかし、その
流路は安定せず多くの蛇行する流路跡とそれに伴
う自然堤防が形成された。

近世初頭段階の本流筋としては、会の川、合の
川、利根川分流、北川辺蛇行流路、島川、渡良瀬
川、浅間川、大落古利根川、庄内古川が考えられ、
それ以外にも細かな流路が推定される。

中川低地には、こうした多くの河川の流下によ
って砂や砂礫が多く供給され、その両岸に自然
堤防が発達した。また、浅間川と会の川が大落古
利根川に合流する久喜市旧栗橋町高柳には、大

河の証しである河畔砂丘が形成され、微高地とし
て旧鷺宮町以南に連続して分布している。

栗橋宿跡は、近世初頭以前に渡良瀬川の右岸に
形成された北西-南東方向の、長さ約300m、幅
120mほどの自然堤防上に立地しているが、後述
する江戸幕府に始まる東遷事業後は遺跡の北を流
れることとなった利根川の右岸に位置することと
なり、現在では利根川の堤防に接している。遺跡
付近の標高は11~12mである。南側の後背湿地に
営まれる水田との比高差は約10mである。遺構
の覆土や地山は、砂質もしくはシルト質である。

2. 歴史的環境

(1) 中世の栗橋とその周辺

栗橋関所番土屋敷跡の所在する中川低地周辺の
地表は、地形の沈降と河川の乱流による堆積土に
厚く覆われている。そのため遺跡の分布は未だ不
明な部分が多く、本来は現在検出されているより
多くの遺跡の存在が予想される。

平安時代から中世 栗橋地区では、これまでに古
代以前に遡る遺跡は確認されていない。縄文時代
前期（約6000年前）の海進時には栃木市藤岡付近
まで海が入り込み、栗橋地区は海底であった。海
退後は河川が乱流し、付近は湿地のような状態が
長く続く。

平安時代には下総国葛飾郡新居郷に属し、12世
紀には摂津源氏源頼政の郎党下河辺氏によって下
河辺荘が開かれ、鎌倉時代中期には金沢北条実時
が地頭となる。栗橋地区に当たる狐塚、高柳の両
郷は金沢氏の支配を受けていたとされている。

栗橋地区においてようやく人の動きが窺えるよ
うになるのは、平安時代末期から鎌倉時代の初期
である。『吾妻鏡』には大河戸兄弟に関する記事
があり、三郎行元は地区内の高柳が本貫地とされ
ている。高柳から伊坂にかけては、鎌倉街道に比
定される古道が今も一部残っている。近くには静

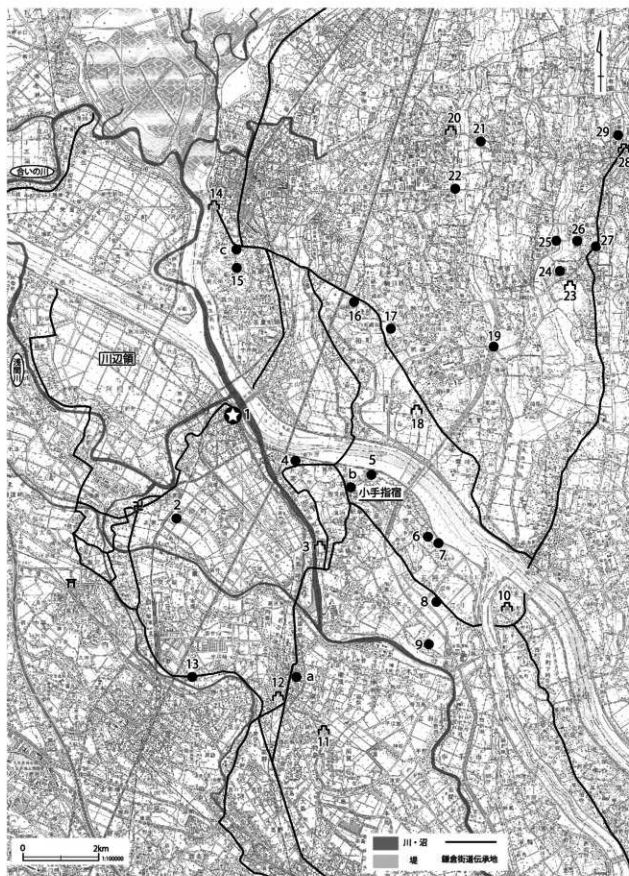
御前終焉の地も伝承されている。

旧大利根町や旧栗橋町などの地域では、現在の
ところ中世の遺跡はほとんど検出されておらず、
旧栗橋町の佐間小草原遺跡（2）が調査されてい
るのみである。工事中に発見され、板碑37基、古
瀬戸の瓶子、常滑の大甕などが出土している。板
碑の年代は、文和3年（1354）から明応7年（1498）
に及んでいる。平成17年の調査では、溝跡や土塊
などが検出され、板碑、漆塗り碗などが出土して
いる。

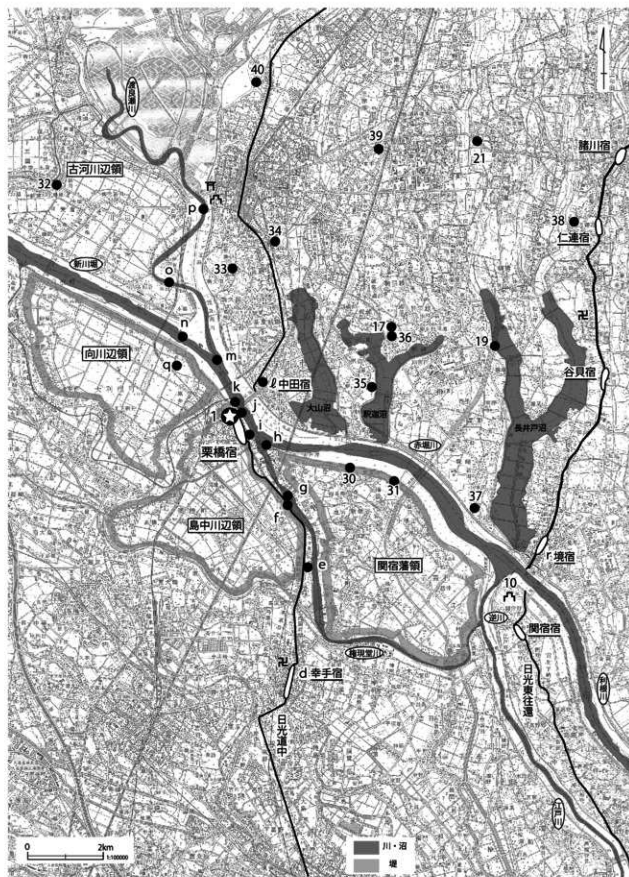
中世段階の利根川は、羽生市川俣で会の川、加
須市大越で北川辺蛇行流路跡、浅間川に分流して
いた。栗橋地区周辺では、洪水による大量の土砂
の堆積と、関東造盆地運動による地盤の沈降が進
み、遺跡の存在は定かではない。しかし、後述す
る猿島台地上の遺跡分布を勘案すると、この周辺
にも今後多くの遺跡が発見される可能性が高い。

中世城館 一方、当時渡良瀬川（太日川）の左岸、
下流の主要な流路であった権現堂川の左岸では、
栗橋城址、古河城址をはじめとする数多くの遺跡
が展開し、古河を中心とした隆盛が窺える。

近世初期までの「栗橋」といえば、現在の茨城
県猿島郡五霞町の元栗橋を指す。元栗橋には享徳



第3図 周辺の遺跡（中世）



第4図 周辺の遺跡（近世）

第1表 周辺の遺跡一覧

No	遺跡名	No	遺跡名	No	遺跡名
1	栗橋関所番土屋敷跡	21	本田山道跡	a	田宮町
2	佐間小草原道跡	22	蔵王道跡	b	小手指宿
3	栗橋城址	23	東の門西の門城址	c	徳楽院
4	宿北、宿東道跡	24	北山田北久保道跡	d	幸手宿
5	釈迦新田道跡	25	御領道跡	e	道橋
6	同所新田道跡	26	大膳屋敷跡	f	一里塚
7	新田道跡	27	関根豪族屋敷跡	g	船平の渡し
8	板井前道跡	28	諸川西門城址	h	川妻の渡し
9	瀬沼道跡	29	本田道跡	i	下河岸跡
10	関宿城址	30	上原道跡	j	栗橋河岸
11	天神島城址	31	殿山塚	k	扇川の渡し
12	幸手城址	32	筒井陣屋道跡	l	中田宿
13	渡辺氏屋敷跡	33	城地遺跡	m	本郷渡し
14	古河城址	34	石行塚道跡	n	中渡し
15	鴻巣館跡	35	羽黒道跡	o	鈴木の渡し
16	磯部館跡	36	釈迦才仏道跡	p	古河の渡し
17	香取東道跡	37	清水道跡	q	旗井小学校
18	水海城址	38	新屋敷道跡	r	城宿
19	向井B道跡	39	大塚道跡		
20	円満寺城址	40	野木宿道跡		

の乱（享徳4年、1455年）後、御座所を古河に移した鎌倉公方足利成氏が古河公方と称して以降、その支城、栗橋城（3）が置かれた。

鎌倉街道中ツ道（奥州道）の、利根川の渡河点である房川渡しがあった栗橋城は、水陸の要衝として後北条氏の関宿城（10）攻略の拠点となり、関宿城開城（天正2年、1574年）後は北関東攻略の起点であったが、豊臣秀吉の小田原攻めにより天正18年に開城する。

古河城（14）も栗橋城同様に、後北条支配下の足利氏によって戦国城郭として整えられたが、やはり小田原攻めによって破却されている。

古河城は近世以降も幕閣を含む歴代の城主によって拡張され、古河は城下町として栄えていく（西ヶ谷1985、原信田ほか2004）。

中世段階の古河城については、近世に改築が繰り返され、現在の遺構の下になっているため、その詳細は明らかでない。

古河城南の御所沼の奥に舌状に突出した台地上

には、古河公方の御所として知られる鴻巣館跡（15）がある。東西約700m、南北約100mの大規模な居館である。初代古河公方足利利氏によって、享徳四年（1455）に築造された連郭式の城郭で、最後の古河公方足利義氏の娘氏姫の居館として知られている。足利の後裔、喜連川氏の尊信が寛永7年（1630）に古河を離れた後は、時宗十念寺の寺域となった。

渡良瀬川、利根川の左岸には、現在大小の沼沢地が多く認められるが、その多くは利根川改修以後の赤堀川の開削によって形成されたもので、本来は猿島台地を開削した中小河川による支谷であった。その縁辺部に古河公方入府とともに、足利成氏の重臣たちの城や館が造られている。遺構が残るのは小堤城跡（23）、磯部館跡（16）のみで、詳細についてはほとんど明らかでない。

釈迦沼の西側には、梁田氏家臣の岩崎豊前守の居館とされる磯部館跡がある。釈迦沼の東側水海には、足利成氏の古河入府に伴った梁田政助に

よって造られ天正年間に廃城になったとされる水海城址(18)が伝えられている。長井戸沼の北奥には、やはり成氏入府に伴った諏訪三河守頼方の居城とされる小堤城址(円満寺城跡)がある。

中世の周辺遺跡 中世段階の渡瀬瀬川左岸、現在の利根川左岸となる古河市域、旧総和町域、五霞町域には、猿島台地縁辺に城や館を中心とした多くの遺跡が造られている。多くは15世紀から16世紀前半に営まれたものである。

磯部館跡に近い釈迦沼の東側にある旧総和町香取東遺跡(17、郡山ほか2001)は、溝によって区画された中世墓地である。15世紀後半から16世紀中ごろを最盛期とする164基の土壌墓、井戸跡11基、溝跡20条、欄列1条が検出されている。

その南の旧総和町羽黒遺跡(35、五十嵐ほか1999、駒澤2003)では、中近世の堀、溝、堅穴状遺構、井戸跡、土壌が調査されている。中世の遺構として特定できるのは、14世紀末から15世紀の堀、15世紀の堅穴状遺構、14世紀後半の土壌のみである。中でも堅穴状遺構からは「五百二丈 五河□」の木簡が出土し、河川改修や護岸、堤防工事などの表示札と考えられている(駒澤2003)。その他の遺構の年代は特定できないが、長方形の土壌は13～17世紀の土壌墓群と推定されている。

上記の旧総和町域の猿島台地は、本来赤堀川を隔てた五霞町側まで連続して延びていた。台地としては低平だが、縄文時代の遺跡をはじめ、古墳、奈良、平安、中世の各時代の遺跡が存在し、本来の地形を反映した分布になっている。

それに加えて、栗橋城とその城下町、奥州路の房川渡しの存在は、念頭に置かねばならない。

栗橋城の南側には、鎌倉街道中ツ道、奥州街道の渡船場、房川渡しがあったとされている。『驚宮町史』『町史五霞の生活誌』によれば、城下町は栗橋城の東側に広がり、古河方面への道と関宿方面への道が分岐していたという。遺跡は、その街道沿いと、東側の福田近辺の関宿、古河を結ぶ

と考えられる道沿いに分布している。

これまでに、五霞町域では、首都圏中央連絡自動車道や、首都圏氾濫区域の高規格堤防建設に伴う発掘調査が茨城県教育財団を中心に実施されている。両事業に伴って調査された遺跡の内、釈迦新田(5)、新田(7)、宿北、宿東(4)、同所新田(6)、瀬沼(9)、桜井前(8)の各遺跡で、中世の遺構が検出され、釈迦新田、宿北、瀬沼の各遺跡から中世の墓地在検出されている。

釈迦新田遺跡(坂本2012、大久保2017)からは13世紀後半、宿北遺跡(近江屋2014)からは15世紀後半から16世紀前半、瀬沼遺跡(本橋2009)からは15～16世紀の堅穴状遺構、火葬跡等が検出されている。

長井戸沼周辺の遺跡は、北側の小堤城を中心とした分布と、柳橋から葛生、稲尾の谷筋、大和田から柳橋、稲尾に至る谷筋の3箇所分布域が認められる。

小堤城の南、長井戸沼西岸の蔵王遺跡(22)からは、溝跡、井戸跡等が検出され、井戸跡から応仁2年(1468)の板碑が出土している。

対岸の本田山遺跡(21、佐々木2002a・b、中山・平田ほか2002)からは、調査が道路部分等に限定されているため全容は不明だが、縄文時代から古代の大規模な集落跡とともに、中近世の土壌墓、地下式墓、井戸跡から構成される墓地在検出されている。土壌墓からは長禄5年(1461)銘の板碑や15～16世紀代のかわらけ、内耳鍋、青磁碗等が出土している。

下片田から山田、谷貝を抜ける谷筋は、東側に鎌倉街道と比定されている古道が通り、それに沿って遺跡が分布している。城館跡としては関根豪族屋敷遺跡(27)、大膳屋敷遺跡(26)、東の門西の門城跡(23)が知られている。仁連宿の周辺と長井戸沼の畔に分布がまとまっている。

本田遺跡(29、宇佐美ほか2010)では15世紀代の井戸跡、溝跡、土壌が検出されている。

北山田北久保遺跡（24、岡田ほか2010）からは、現代まで信仰対象とされてきた塚が検出されている。12世紀後半に方形区画墓として築造され、供養塚、信仰対象の塚と変遷している。渥美、常滑、古瀬戸、板碑、五輪塔が出土している。

（2）近世の栗橋とその周辺

利根川の改修 古河を中心とした中世から、徳川家康の江戸入府によって、栗橋周辺の様相は一変する。

特に大きな影響を与えたのが、利根川改修事業、所謂利根川の東遷である。

徳川幕府は、家康の関東入府後早々に利根川の改修に着手した。それまでの本流であった浅間川、会の川、古利根川の川筋から、新川通、赤堀川を開削して常陸川に結び、合わせて権現堂川を介して江戸川とつなぐという大規模な流路変更で、利根川東遷事業として知られている。その目的は、江戸を水害から守るためという治水が第一義とされてきたが、最近では「内川廻し」と呼ばれる内陸航路の確保、水田開発目的とする説も有力である。また、古河城を合わせた江戸の北の防衛線とする説も知られている。

栗橋周辺では、文禄3年（1594）忍城主松平忠吉の命を受けた忍藩家老小笠原三郎左衛門が羽生市上新郷で会の川を締め切ったのに端を発する。元和7年（1621）には、利根川と常陸川を結びつける意図のもとに旧大利根町佐波から旧栗橋町中波までの新川通、五霞町川妻から境町長井戸への赤堀川が開削された。しかし、当初の赤堀川の掘削は失敗に終わり筑島郡釈迦沼にまでしか至らず、現在の五霞町域に甚大な被害をもたらした。その後、2度の拡張、増堀（二番堀、三番堀）を経て、漸く承応3年（1654）に通水に成功した。銚子へ至る新たな利根川的主流路が形成されたのである。

更に、天保9年（1838）に合の川と浅間川が完全に締め切れ、利根川の流れは新川通の流路へ

と一本化され、現在に至っている。

上述の利根川本流の開削、整備とは別に、天正4年（1576）の権現堂堤の築堤に始まる五霞町、幸手市域でも大規模な河川改修が行われている。赤堀川通水以前の利根川は、寛永18年（1641）に逆川の開削によって、寛永12年（1635）から開削が進められていた後の江戸川と、関宿の北側で常陸川に通ずることとなった。江戸川は、更に拡張工事が進められ正保元年（1644）に完成し、前述の赤堀川三番堀の完成以前は、利根川、渡良瀬川両大河の水は、一部逆川を介して常陸川に注ぐものの、ほとんどはこの江戸川を流れていた。

以上の利根川を中心とした河川改修の結果、前述の「内川廻し」の航路とともに、利根川上流域の上野、渡良瀬川上流域の下野との航路が確保され、北関東が江戸を中心とする経済圏の一部となった。

合わせて、利根川、荒川両大河の河川改修は、埼玉平野に広大な新田開発をもたらした、航路の開発とともに、その経済効果は絶大であった。

また、栗橋地区を含む島中川辺領は、外縁部に開堤が造られ河川の流路が固定されるとともに、領域全体が輪中となり、治水環境が整えられた。

房川渡しの移設と栗橋関所の開設 前述の利根川河川改修による度重なる洪水により荒廃した元栗橋の宿と房川渡しは、元和年間に新栗橋に移転したと考えられている。幕府は、日光道最大の難所と言われるこの地に関所を設けた。『新編武蔵風土記稿』に「房川渡中田御関所」と記された所謂「栗橋関所」である。

栗橋関所は寛永元年（1624）に開設され、明治2年（1869）に関所が廃止されるまで、245年間にわたり日光道中6番目の関所として機能した。

関東郡代伊奈氏の管轄のもと、当初森、佐々木、落合、富田の四家が、二人一組で番士として勤番に当たった。佐々木家、落合家はその後交代し、幕末には足立、加藤、島田、富田の四家が、番士

として語っていた。

日光道中と栗橋宿 徳川幕府は、河川改修による舟運の整備と合わせて、陸路、五街道の整備を行った。日光道中は、江戸日本橋を起点に下野国坊中までの20宿、36里11町の街道である。県内では、草加、越ヶ谷、粕壁、杉戸、幸手、栗橋の各宿が、栗橋の対岸の下総側には中田、古河があり、野木、間々田、小山、新田、小金井、石橋、雀宮、宇都宮、徳次郎、大沢、今市、鉢石を経て日光坊中に至る。

栗橋宿は江戸から14里15町、幸手から2里3町で、江戸から7番目の宿である。慶長年間に元栗橋から池田鴨之助、並木五郎平らが移住し、開宿した。対岸の中田宿^{あいにほく}と合宿で、栗橋町史に引かれている「日光道中宿村大概概」によれば、宿高は689石余、宿往還の長さ15町13間余、宿町並10町30間、宿の家数404軒、本陣・脇本陣各1軒、旅籠屋25軒、人口1741人（男性869人、女性872人）である。

栗橋宿については、平成24年度から当事業団で調査を継続中である。これまでに、本陣跡、脇本陣を含む西本陣跡に加え、宿跡を10地点にわたり調査し、調査面積は32000㎡に及ぶ。現段階では未報告であり、必ずしも様相が明らかではないが、船改めを船問屋に委託するなど、栗橋問所との密接な関係が推定される。調査の概要と番土屋敷跡との関係については、第V章で改めて述べる。

合宿としての中田宿は、宿高456石余、宿往還の長さ12町18間余、宿町並4町50間、宿の家数69軒、本陣・脇本陣各1軒、旅籠屋6軒、人口403人（男性169人、女性234人）である。

栗橋宿と舟運 鉄道開通以前、あるいはそれ以降も物資の大量輸送の主要な手段は舟運であった。栗橋周辺では、権現堂河岸と関宿河岸が古くから知られている。

栗橋河岸は、近世当初の元禄年間には年貢米を江戸へ送る「津出し湊（河岸）」ではなかったが、明和8年（1771）には中里村の、天明期（1781～

89）には加須市域の水深村の津出しが行われ、近世中・後期にはその役割があったことが分かる。

栗橋町史に『武蔵国郡村誌』から作成した栗橋町域の明治初期の船の一覧が掲載されているが、その数610艘に上り、いかに栗橋地区が水と密接にかかわる生活を送っていたかが分かる。

この内、栗橋宿が有していた舟運に関わった所謂川船は、高瀬舟10艘、小高瀬舟2艘、似轡船8艘、屋形船17艘である。

江戸へ向かう下り船は大豆に代表される農産物などを積み、空となった帰りの上り船には、塩、砂糖、干鰯、灰などの肥料、木綿、乾物、陶磁器などが積まれ、河岸で水揚げされた。河岸場は地域経済の要であったのである。今回の各地点の調査では、鮎の中骨や鮎、牡蠣、蛤、鯉などの海産物が見られ、これらも上り船によって江戸から運ばれたものであろう。

栗橋河岸には、房川渡しから堤沿いに続く舟戸町の船着き場と、やや下った利根川と権現堂川の分岐付近の下河岸があった。

栗橋問所では、船改め役を務める船問屋による船荷の改め、「船改め」が行われていた。『栗橋問所史料一』によれば、享保年間（1716～1736）に当初下河岸で行われていた船改めが、浅間山噴火（1783）の泥流の影響で、利根川の川筋が変化して下河岸に接岸できなくなり、舟渡町近辺に場所を移したとされている。従って、前述の津出し湊や、江戸との川船の往來に利用されたのは舟渡町の河岸場と推定される。

近世の栗橋村 近世初頭は、栗橋宿を含む、井坂、松長、佐間、島川、広島、河原代、狐塚、中里、小右衛門の各村は幕府の蔵入地で、代官伊奈半十郎忠治によって支配されている。伊奈氏の支配は関東諸国に及び、特に武蔵国東部の低地開発を強力に推し進めたことで知られている。その結果開発された広大な新田は、伊奈氏の支配地として引き継がれていく。利根川東遷事業による新田開発

もその一環とも言えるだろう。

元禄10年(1697)の所謂元禄の地方直しでは、高柳村、高柳新田は酒井対馬守、島平村は酒井監物、広島村は久津見齊太郎、河原代村は久津見齊太郎・榊原大膳の旗本知行へ支配替えが行われた。

加えて、松長、間鎌、間鎌新田、佐間、佐間新田、井坂の各村は、18世紀中葉の延享年間、19世紀前半から中葉の文政年間から安政年間に、徳川御三卿領への支配替えとなった。

近世の周辺遺跡 栗橋周辺の近世遺跡は、日光道と將軍の宿城である古河城を中心に展開する。

古河城(14)は、近世以降小笠原、松平、奥平、永井、土井、堀田の多くの幕閣を含む歴代の城主によって、拡張、城下町の整備が行われた。特に度々將軍の日光参詣の宿城となったため、その都度、特別な手当金が支給され整備が進んだ。

利根川の東側は、利根川の河川改修以降も、この古河城を中心として遺跡が展開している。

旧総和町香取東遺跡(17)の墓域は近世にも継続していた可能性が高く、18~19世紀の土壌(墓域)、井戸跡、溝跡が検出されている。南側に隣接する釈迦才仏遺跡(36、川津1998)には、南北114m、東西84m、高さ10mの不整隅丸方形を呈する近世後半の塚が造られている。

長井沼の奥になる本田山遺跡(21)は中世に引き続き、近世でも墓地として継続している。

栗橋城の南側となる旧総和町向坪B遺跡(19、中沢ほか1986)からは近世の土壌、溝跡が検出された。土壌には、土壌墓が含まれている。

長井沼東側の旧鎌倉街道は、栃木県多功に通ずる日光東街道として、元和年間には整備されていたとされている。街道には仁連宿、谷貝宿が設け

られた。

仁連宿の北、諸川には中世から続く本田遺跡(29、宇佐美ほか2010)があり、17世紀後半を中心とする掘立柱建物跡、堅穴状遺構、地下式坑、土壌、墓域、井戸跡、溝跡が検出されている。

(3) 栗橋関所の終焉

幕末の19世紀中葉には、天保の飢饉に端を発する打ちこわし、慶應2年(1866)から始まる武州世直し一揆、元治元年(1864)の水戸浪士による天狗党の乱など、社会情勢が不安定になる。栗橋でも、慶應4年(1868)羽生陣屋焼き払いに始まる打ちこわしが波及し、「足立家文書御関所日誌」には、9000人余りが宿内へ侵入し、名主良右衛門宅に放火し、仲町百姓弥平次宅、本陣池田由右衛門宅の打ちこわし、関所への押し入りが行われ、番士が関所から退去したとある。

その後は、天狗党の乱を受けて、江戸防衛の施設としての再認識が進み、古河藩や関宿藩による関所の警護が行われた。

しかし、諸大名による鉄砲の大量通過、幕府役人などの例外的通過も多くなり、慶應3年(1867)の関所変革令による通行の緩和、同4年には通行者監視の強化等関所の施策も混乱していく。合わせて新政府の東征軍進軍による江戸市中からの脱出や、慶應4年(1868)の下野での戊辰戦争の戦闘への官軍通過、上野戦争に伴う古河藩士と共の動番など、多くのこれまでにない事態が発生するが、年中は関所の機能は維持された。

翌明治2年2月には、葛飾県役所から関所廃止の通知が出された。番士四家は関所道具を栗橋宿へ預け、関所改めの廃止を各所に通知し、関所を引き払い、栗橋関所は245年の幕を閉じた。

Ⅲ 遺跡の概要

栗橋関所番士屋敷跡は、久喜市栗橋北2丁目に所在する。現在の利根川と直交して屋敷地が設けられており、北東側を利根川が東流している。久喜市栗橋地区はJ R宇都宮線、東武日光線、国道4号線、125号線といった県北部の主要な交通路が集まる県北東の要である。駅周辺から栗橋宿跡周辺にかけては都市化が進んでいる。市街を離れると田園風景が広がり、埋没台地、自然堤防の微高地上に屋敷林となっている。

栗橋関所は、寛永元年(1624)に開設され、明治2年(1869)に関所が廃止されるまで、245年間にわたり日光街道6番目の関所であった。

関東郡代伊奈氏の管轄のもと、当初森、佐々木、落合、富田の4家が番士として、二人一組で関所改めを行っている。森家、富田家は、寛文5年(1665)に森氏が加藤氏に改姓するものの、関所の設置から廃止まで、通して務めている。佐々木家は明暦元年(1655)に神谷家、元禄12年(1699)に長山家、寛政12年(1800)に足立家へと交代し、落合家は寛政10年(1798)に島田家に交代した。

関所の廃止時には、足立、加藤、島田、富田の4家が最後に関所を引き払っている。

その後番士屋敷跡には、現代まで4家が代々屋敷として生活していた。第5図は現在の都市計画図と調査区全体図を並べたものである。幕末の段階から、敷地内が大きく改変されているのが分かる。調査開始時にも多くの盛土が残存していた。

番士屋敷跡は、日光街道の北西側で、島中川辺の開堤と利根川の水除堤が重なる堤の南側に面して位置している。

基本土層は褐色シルトと砂の互層と考えられるが、砂の堆積が厚く、安全上の理由から上下の2層と、その下の1層を確認できたのみである。

最上層(I層)は暗褐色シルトで、これを削り込んで盛土が形成されている。II層は灰褐色砂で、

分厚く、遺物は出土していない。

更にIII層は暗褐色シルトで、加藤家屋敷跡の第3号建物跡は、このシルト上に構築されている。

I・II層には天明3年(1783)の浅間山噴火に伴う浅間A軽石が含まれており、噴火後に堆積したと考えられる。

確認面の標高はおよそ110mである。調査区全体に地形が施され、平坦に整えられている。

検出した遺構は、建物跡6棟、盛土3基、石垣1基、井戸跡3基、土壇5基、焼土遺構10基である。江戸時代中期末から幕末、明治時代初期にかけて、18世紀前半から19世紀後半に当たる。

各家の屋敷跡は江戸時代後期(19世紀前半)に盛土が施され、現代までその上に屋敷が建てられていた。

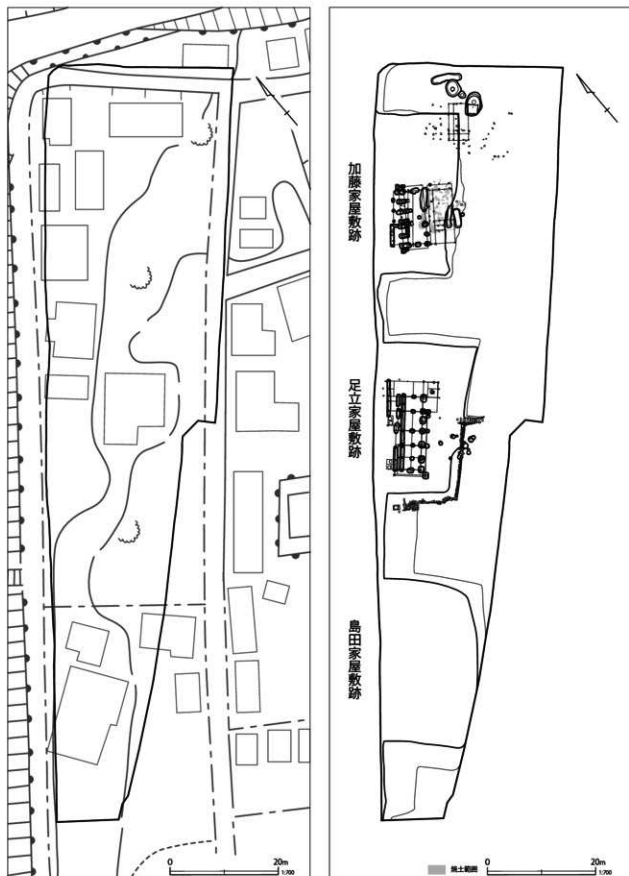
調査は盛土上から着手し、加藤家、足立家各屋敷跡の盛土上から各1棟の建物跡を検出した。

この足立家屋敷跡の第1号建物跡は、「足立家文書」の明治17年の図面とはほぼ同様の間取りである。桁行5間、梁行2間の身舎に、三方に庇が設けられ、東側には施設が付属する形であった。この直下から同一の構造の第2号建物跡を検出した。両建物跡は、掘立柱建物状の壺掘り地形が施されている。掘り方には栗石の代わりに瓦が砕いて詰め込まれ、その下位には何段にも径30cm前後の礫が根石として積まれていた。

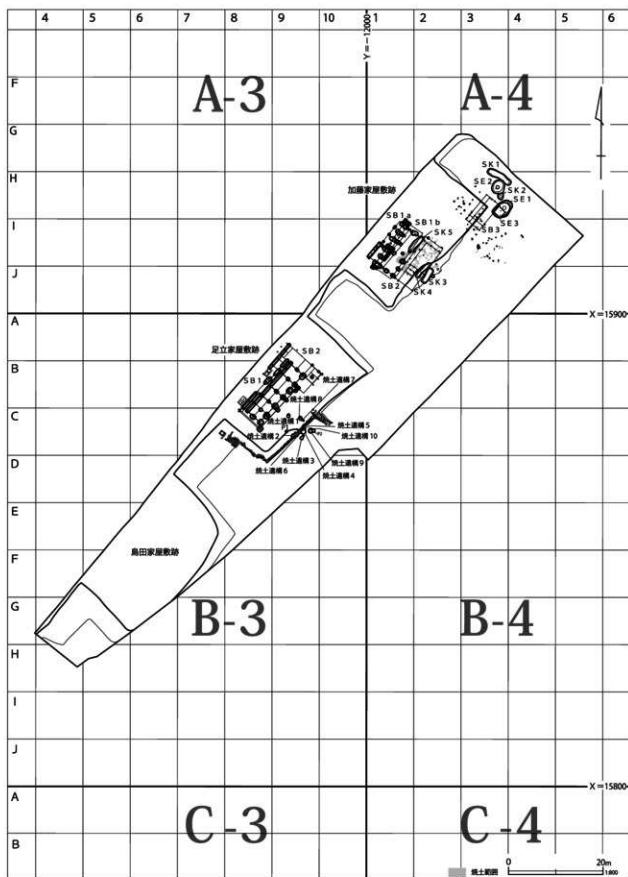
足立家屋敷跡の盛土には、角閃石安山岩を主とする野面積みの石垣が施されていた。この石垣を外し、盛土を除去した面から、焼土遺構10基を検出した。底面、壁面が焼土化した径60～70cmの円形の遺構で、性格は不明である。

島田家屋敷跡の盛土上からは遺構が検出されなかった。19世紀前半の盛土である。

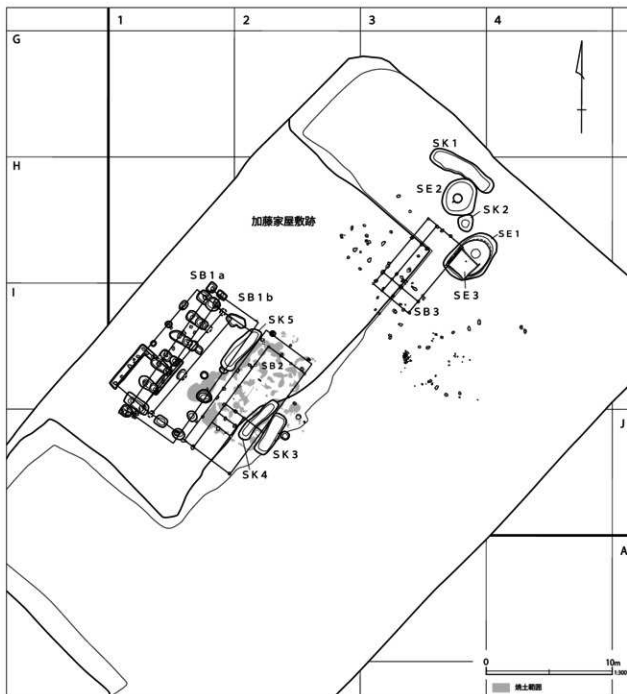
加藤家の建物跡は、盛土の上面から1棟、中位から1棟、盛土の下位から1棟、更にその下位か



第5図 都市計画図・番土屋敷跡全体図



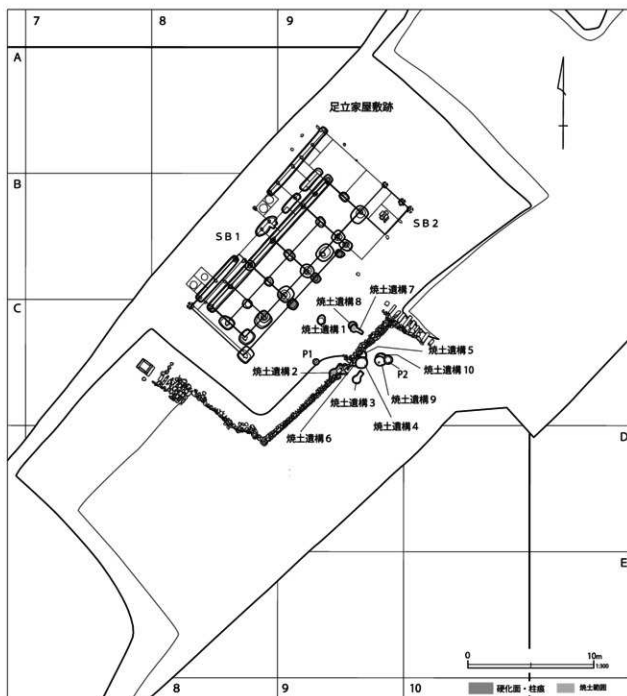
第6図 番土屋敷跡全体図



第7図 分割図(1)

ら1棟の計4棟を検出した。盛土上の第1a号建物跡は、5×2間の側柱建物跡で、南東側に庇が取り付け付く。建物の西側は、布掘り地形が行われている。掘り方内部には、瓦片・漆喰片を含む暗褐色土が充填されていた。その0.4m下、盛土中位からは第1b号建物跡を検出した。5×2間の側

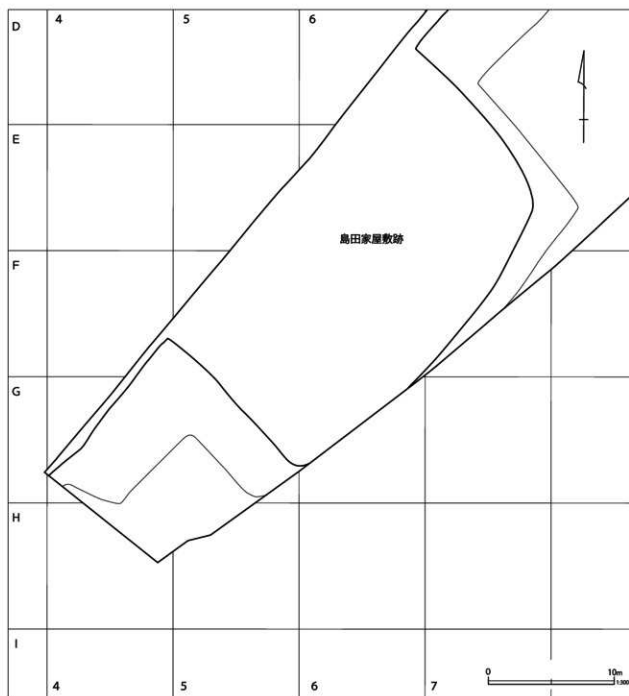
柱建物跡で、三方に庇が取り付け付く。建物全体の地行は掘立柱状の壺掘り地形である。礎石は確認面で、直下の根石とともに検出された。掘り方の覆土は、シルト質の暗褐色土と瓦の互層となっており、合せて何段にも礎石と同様の礎が根石として設置されている。



第8図 分割図(2)

加藤家屋敷跡の盛土を除去した確認面からは、建物跡1棟(第2号建物跡)、土壇3基が検出された。建物は寛政12年(1900)の火災で焼失した直後に建てられたものである。その直下から検出された土壇からは建築材をはじめとする被熱した陶磁器、瓦、木製品が多く出土した。

盛土の構造が、確認面より、更に下に連続しているため、遺構の有無を確認する目的で、深掘りを行ったところ、1m下から建物跡がもう一棟検出された(第3号建物跡)。確実な伴出遺物がないため時期は不明だが、18世紀前半に遡る可能性が高い。



第9図 分割図(3)

また、調査区の東端からは、土壙2基、井戸跡3基を検出した。土壙からは18世紀後半の遺物が多く出土した。第1・2号井戸跡は、板材の井戸枠の内側がコンクリートで固められており、近代まで利用されていたと考えられる。

本調査で出土した遺物は、18世紀中葉から19世

紀後半にかけての陶磁器、土器、瓦、銭貨、木製品、鉄製品、石製品で、総計116箱である。

なお、本整理では明治時代への移行の目安の時期を、明治10年前後の瀬戸系磁器における型紙刷りまでとして掲載している。

IV 検出された遺構と遺物

1. 足立家屋敷跡

現在の足立家に該当する調査箇所からは、江戸時代の建物跡2棟、盛土1基、石垣1基、焼土遺構10基が検出された。

(1) 建物跡

盛土の上面では建物跡1棟が確認された。調査では、その下位から第2号建物跡を検出した。

更に柱穴内からは上面の水準が揃った根石が出土している。身舎の外側の根石や柱穴は、第2号建物跡では第1号建物跡に連続する形として確認できなかった。そのため身舎の外側の施設については再建の度に可変的に位置を変えて造られていたと考えられる。

第1号建物跡 (第10・11図)

調査区のほぼ中央、B3-A8・9、B-8~10、C-7~9グリッドに位置する。

建物全体の長軸方向の全長は17.20m、短軸方向の全長は10.20mである。長軸方位はN-42°-Eである。身舎は5×2間の隅柱建物で、北西、南東、南西側に庇が取り付く。北東側には、付属する建物を取り付く。本建物跡は、明治17年に製作された足立家文書に伝わる絵図面とはほぼ一致しており、柱間の結線は絵図を参考に行った。

身舎の規模は、桁行長13.5m、梁行長3.60m、平面積は48.65㎡である。柱間は桁行、梁行ともほぼ一間、一間半、二間半を基本とし、細部に2尺、5尺の部分があり、柱筋も通っている。

建物の南側は掘立柱状だが、柱穴内には柱痕が認められず、硬質の褐色土が充填されている。その下位に褐色土を挟んで砂層が認められるため、第2号建物跡が洪水によって被災し、建て替えられたものと考えられる。第2号建物跡の大規模な柱穴には何段にも根石が入れられており、一種の壺掘り地形となっている。個々の柱穴は隅丸方形、もしくは円形で、建物の軸方向に長軸が揃えられ

ている。規模は長径0.70~0.97m、短径0.65~0.80m、深さは0.06~0.20mである。

建物の北側は布掘り地形が行われている(布掘り1)。やはり第2号建物跡の布掘りとほぼ同一の位置である。布掘り1は、長さ14.28m、幅0.70m、深さ0.1mで、砂利混じりの暗褐色土が充填されていた。S1~7の礎石は、径0.3m、厚さ0.1mほどの不整形の安山岩である。

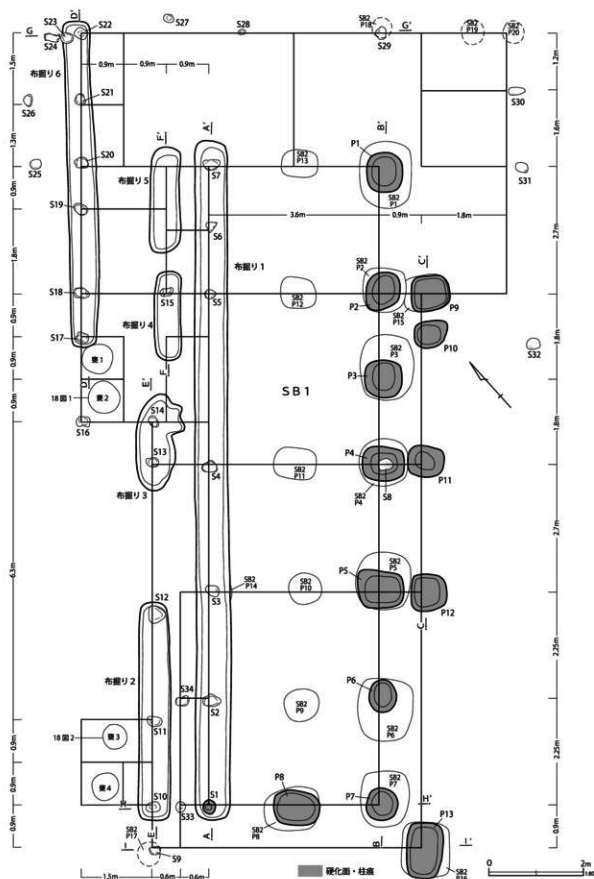
身舎の北西、南西、南東側には、幅0.9mの庇が取り付く。身舎同様に南側は柱穴、北側は布掘りになっている。P31・34、S43の下位には、第2号建物跡の柱穴が認められ、第2号建物跡と同一の構造物を再建したと考えられる。各柱穴は、隅丸方形、もしくは隅丸長方形で、身舎同様、建物の軸方向に向きが揃えられている。長軸0.76~1.17m、短軸0.57~0.75m、深さはいずれも約0.1mである。柱穴内には柱痕が認められず、硬質の褐色土が充填されていた。

北側は、身舎同様に布掘りに礎石が置かれる構造になっているが、下位に同様の布掘りが認められないことから北側の庇は第1号のみに設けられている可能性がある。布掘り2~5は、幅0.57~1.00mで、ほとんどの部分が0.70m内外である。深さは0.16~0.26mで、身舎同様に掘り方内部には砂利混じりの暗褐色土が充填されていた。S9~14の礎石は、径0.3~0.4m、厚さ0.1mほどの不整形の安山岩である。

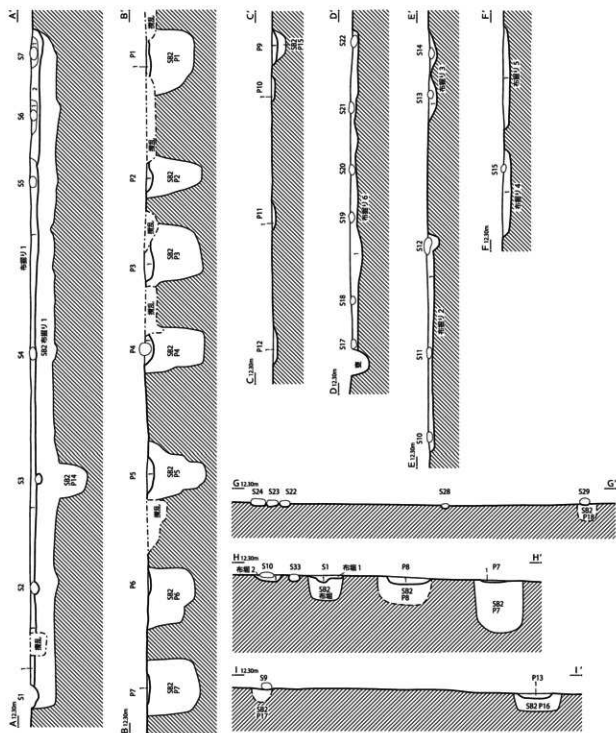
身舎と三方の庇、廊下を中心に、付属する施設が東側に設けられている。

北西側の身舎と庇の間には、S33・34の礎石が認められ、何らかの施設が設置されていたと考えられる。S33の長径は0.2m、S34の長径は0.35mである。

身舎の東側は南北に拡張されている。布掘り6



第10図 第1号建物跡(1)



第1号建物跡

- 1 褐色土 面土砂利層 (砂利φ2~3cm)
 2 褐色土 シルト 粘性強い しまりあり 砂粒含む
 (下位に部分的に薄い砂層を挟む)



第11図 第1号建物跡 (2)

は幅0.52～0.63m、深さ0.10～0.26mで、身舎、庇同様に砂利混じりの暗褐色土が充填されていた。その上面に0.9～1.8m間隔で、礎石が設置されていた。石材は不明である。

この布掘りの他に施設を伴わないS24～32の礎石が確認された。いずれも径0.2～0.3m、厚さ0.1mほどの礎で、身舎の東側を囲むように配置されており、礎石と考えられる。S23・24・27・30～32は原位置から動いている可能性が高い。石材は不明である。

これらの施設の配置から、身舎東側の拡張部は、細かい空間に分割されていたと考えられる。その性格については、第V章で検討する。

また、北側には4基の大礎が設置されていた。いずれも径0.6m、高さ0.6mの大型の素焼きの甕である(第18図1・2)。

第2号建物跡(第12・13図)

調査区のほぼ中央B3-A8・9、B-8～10、C-7～9グリッドに位置する。第1号建物跡と同一の位置である。

建物全体の長軸方向の全長は17.50m、短軸方向の全長は7.10mである。長軸方位はN-42°-Eである。身舎は5×2間の総柱建物跡で、北西、南東、南西側に庇が取り付く。北東側は礎石の多くが遺存しておらず、確実ではないが、カマドの遺構やS22-24の礎石が認められることから、付属する施設が設けられていると考えられる。第2号建物跡の礎石は、第1号建物跡の基礎である硬質褐色土の下位から、砂層を挟んで検出されたことから、第2号建物跡は洪水に伴って建て替えられた可能性がある。

身舎の規模は、第1号建物跡と同じである。

建物の南側は壱掘り地形となっており、第1号建物跡に伴う硬質褐色土の下位から礎石が検出された。個々の柱穴は楕円形、もしくは略円形で、建物の軸方向に長軸が揃えられている。P1～7は側柱である。規模は長径0.90～1.44m、短径0.85

～1.18m、深さは0.40～1.26mである。本建物跡の礎石は、7層上面の径0.3m、厚さ0.2mほどの不整形の礎で、石材はS8が石英斑岩であるほかは不明である。覆土は、粘土ブロック、砂を含むシルト質の暗褐色土、褐色土で、しまりが強い。S8～10層は浅間A軽石(1873年)を含む。

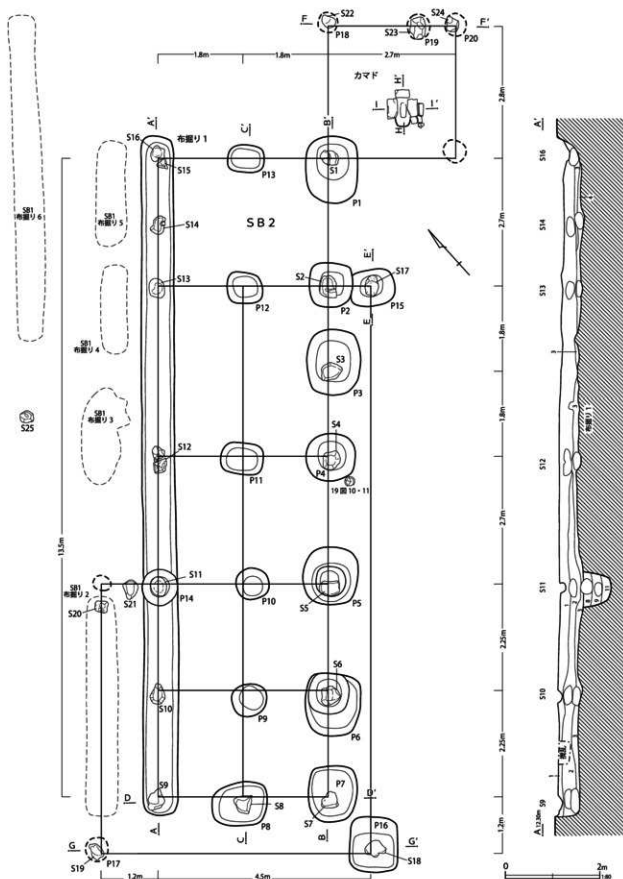
柱穴内には柱痕や抜き取り痕が認められず、ほぼ同位置に何段にも礎石と同様の礎が設置されている。各段の礎のレベルはほぼ揃っており、丁寧な工程がうかがえる。

P4の南側からは胞衣壺が出土した(第19図10・11)。建物跡の検出面近くから正位の状態出土し、土壌等の掘り込みは認められなかった。

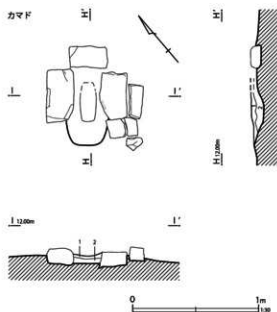
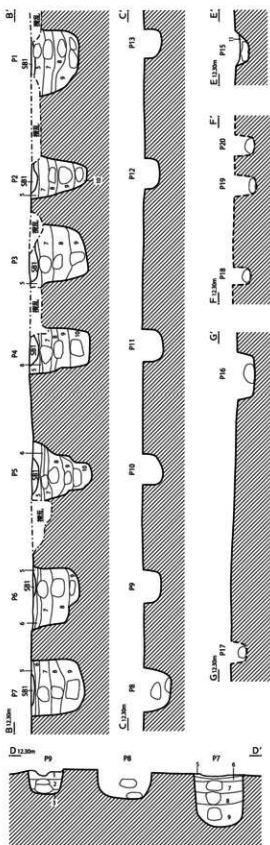
建物の北側は第1号建物跡同様に、布掘り地形が行われている(布掘り1)。第1号建物跡の布掘りとはほぼ同一の位置、規模だが、本建物跡に伴う部分は深さ0.25～0.40mである。覆土は粘土ブロック、砂を含むシルト質の灰褐色土、暗灰褐色土で、最下層の3層は瓦片を多量に含む暗褐色土である。布掘り内には、径0.4～0.5m、厚さ0.15～0.2mの礎が2段設置されており、レベル的にも2層と柱穴7層が対応することから、上段の礎が第2号建物跡に伴う礎石と考えられる。柱穴7層の礎石は標高115～118mの厚さの中に収まっており、対応する2層の下段の礎は根石と考えられる。石材はS9が安山岩であるほかは不明である。S11の下位には、径1.0m、深さ0.6mのP14が確認された。南側の柱穴列下位と覆土が共通しており、布掘り1が設置される前の柱穴と考えられる。布掘り1の下にその他の柱穴は確認できなかったが、布掘り構築以前に柱穴を伴う構造であった可能性を示すものである。

P9～12は束柱である。各柱穴は、隅丸方形、もしくは略円形で、長径0.70～0.90m、短径0.63～0.70m、深さは0.31～0.43mである。柱穴内には柱痕や礎石は認められなかった。

身舎の北西、南西、南東側には、第1号建物跡



第12図 第2号建物跡 (1)



第2号建物跡

- 1 灰褐色土 シルト 砂粒含む 粘性強い しまり強い
- 2 暗灰褐色土 シルト 粘土ブロック (φ1~2cm) 多量 粘性強い しまり強い
- 3 暗褐色土 シルト 砂粒・粘土ブロック含む 粘性強い しまり強い
- 4 暗褐色土 シルト 砂粒・粘土ブロック含む 粘性強い しまり強い
- 5 褐色土 シルト 小砂少量 粘土ブロック (φ1~3cm) 多量 粘性強い しまり強い
- 6 暗褐色砂 砂層
- 7 褐色土 粘質シルト 粘土ブロック (φ1~3cm) 多量 粘性強い しまり強い
- 8 褐色土 シルト 粘土ブロック・Asa少量 粘性強い しまり強い
- 9 暗褐色土 シルト 粘土ブロック・Asa少量 粘性強い しまり強い
- 10 暗褐色土 シルト 砂粒・粘土ブロック・Asa少量 粘性強い しまり強い
- 11 褐色土 シルト 粘性強い しまりあり

- カマド
1 灰層
2 焼土層

第13図 第2号建物跡 (2)

と同様の幅0.9mの庇が取り付く。ただし、第1号建物跡の庇に設けられていた北側の布掘りはなく、南側の褐色硬質砂に遺構が認められたのはP15～17の3基に留まる。P17は攪乱によって遺構の上半分が壊されている。P15・16の平面形は隅丸方形である。P15は長径0.88m、短径0.76m、深さ0.28m、P16は長径1.17m、短径1.00m、深さ0.37mである。いずれも底面に径0.3～0.4m、厚さ0.2～0.3mの礫が設置されている。

身舎の東側は南北に拡張されていると考えられるが、確認できたのはカマドを中心とした一室のみである。ほぼ一間半に当たる2.7m四方である。中央には北東-南西方向0.85m、北西-南東方向0.75mの範囲でカマドが設置されていた。カマドは長さ0.3～0.4m、厚さ0.1～0.15mの長方形の凝灰岩の切り石を、コの字状に組んで造られていた。燃焼部は長さ0.45m、幅約0.2mで、床面が良く焼けていた。上面には灰が溜まっていた。

(2) 盛土 (第14～16図)

調査区のはほぼ中央、B3-A8～10・B7～10・C7～10・D8、B4-B1グリッドに位置する。北側は調査区域外にかかる。第1・2号建物跡が上面に造られている。調査区内の全体の平面形は東側の辺を底辺とする台形である。基底面の規模は、長軸方向30.5m、短軸方向は東西で異なり、東側が17.8m、西側は12.5mである。長軸方位は建物と同じN-42°-Eで、加藤家、島田家両屋敷跡の盛土とはほぼ同一である。11層の上面に有機物層が認められ、堆積が水平であることから、この上面を構築面とした。現在確認できる高さは20～30mである。一方、北側、東側では11層の下に更に土層が連続しており、更に高さがあった可能性も考えられる。覆土はいずれもシルト質で粘土ブロック、砂、炭化物、浅間A軽石を含む黒褐色、暗褐色、灰褐色土である。浅間A軽石(1783年)を含むことから、盛土の形成は18世

紀第4四半期以降である。

工程は大きく2段階に分かれている。第1段階は、第1号建物跡のS12付近を中心とする、3・4層が階段状の互層となる山が造られる。2段階目には、更に全体が0.5mほどの厚さの3層土で被覆されて盛土全体が形成される。階段の西側には石垣が施されている。第2号建物跡の壺掘り地形は、盛土の上面からである。

盛土南東側のはほぼ中央と西側の2箇所に、階段が設置されている。前者は建物跡の玄関に通ずるもので、幅1.5m、高さ1.3mの法面に、幅0.2～0.3m、長さ0.6～0.9mの板石が9段に亘って敷設されている。後者は石垣の石を用いて造られたものである。幅1.4～2.0m、高さ0.9mの法面に、長さ0.3～0.4m、厚さ0.2～0.3mの礫が9段に亘って敷設されている。

階段を上った石垣の上には、長軸1.2m、短軸0.9m、高さ0.15mの方形の基礎が設けられていた。

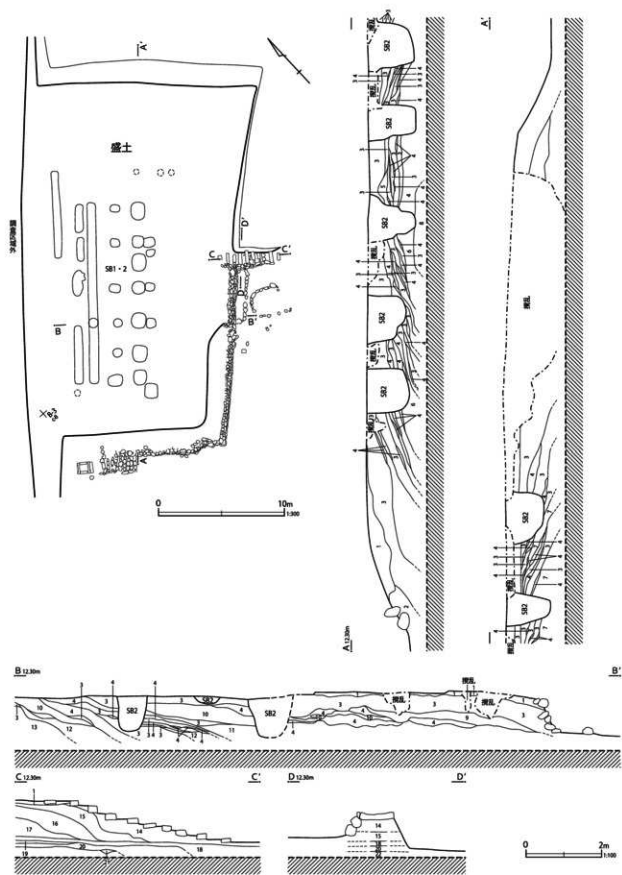
(3) 石垣 (第15・16図)

調査区のはほぼ中央、B3-C7～10・D8グリッドに位置する。盛土の階段を含む西側に敷設されている。長径0.3～0.5m、厚さ0.2～0.3mの礫を使った野面積みである。階段から5m西側までは、盛土の高さ全体に石垣が積まれており、その西側では4段になっている。段数の変換点である5mの箇所は北側に向かって、高く積む部分を区切るように、上段の石積みが回り込んでおり、意図的に段数を変更したと考えられる。

石垣は大部分が安山岩を用いており(第16図a・b)、その他に砂岩(同c)、チャート(同d)、赤褐色を呈する安山岩(同e)が用いられている。

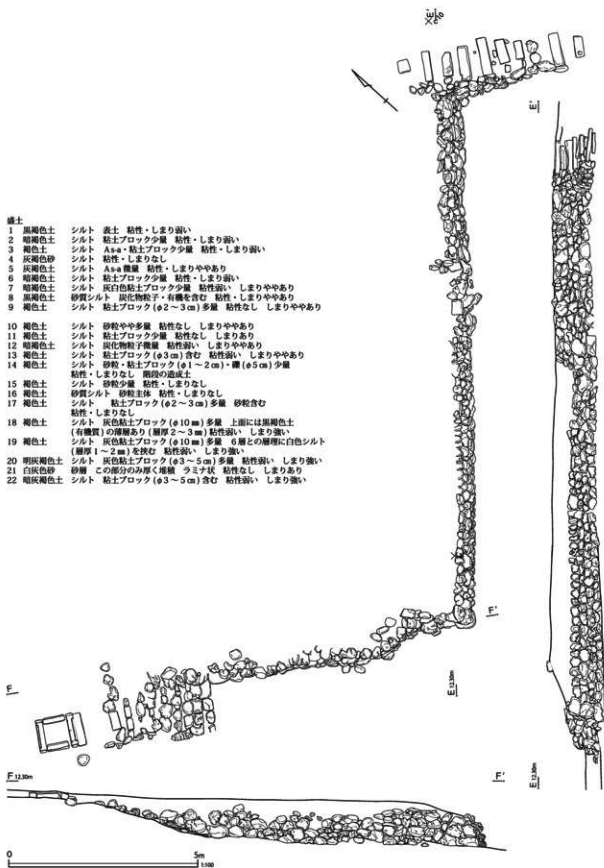
(4) 焼土遺構

調査区のはほぼ中央、B3-C9グリッドからは、焼土遺構10基を検出した。いずれも底面が焼土化した径0.6～0.9m前後、深さ0.1～0.3mの円形の土

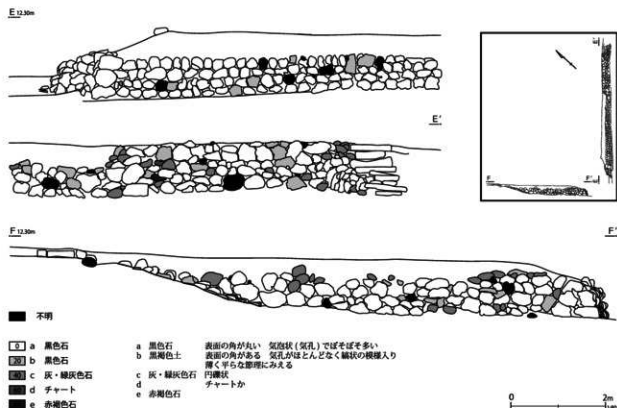


第14図 盛土

- 盛土
- | | | |
|----------|-------|---|
| 1 黒褐色土 | シルト | 流土 粘性・しまり強い |
| 2 暗褐色土 | シルト | 粘土ブロック少量 粘性・しまり強い |
| 3 褐色土 | シルト | Asa・粘土ブロック少量 粘性・しまり強い |
| 4 灰褐色砂 | シルト | 粘性・しまりなし |
| 5 灰褐色土 | シルト | Asa 微量 粘性・しまりややあり |
| 6 暗褐色土 | シルト | 粘土ブロック少量 粘性・しまり強い |
| 7 暗褐色土 | シルト | 灰白色粘土ブロック少量 粘性強い・しまりややあり |
| 8 黒褐色土 | 砂質シルト | 炭化物粒子・有機を含む 粘性・しまりややあり |
| 9 褐色土 | シルト | 粘土ブロック(φ2~3cm)多量 粘性なし・しまりややあり |
| 10 褐色土 | シルト | 砂粒やや多量 粘性なし・しまりややあり |
| 11 褐色土 | シルト | 粘土ブロック少量 粘性なし・しまりあり |
| 12 暗褐色土 | シルト | 炭化物粒子微量 粘性強い・しまりややあり |
| 13 褐色土 | シルト | 粘土ブロック(φ3cm)含む 粘性強い・しまりややあり |
| 14 褐色土 | シルト | 砂粒・粘土ブロック(φ1~2cm)・礫(φ5cm)少量 粘性・しまりなし 隙間の造成土 |
| 15 褐色土 | シルト | 砂粒少量 粘性・しまりなし |
| 16 褐色土 | 砂質シルト | 砂粒主体 粘性・しまりなし |
| 17 褐色土 | シルト | 粘土ブロック(φ2~3cm)多量 砂粒含む 粘性・しまりなし |
| 18 褐色土 | シルト | 灰色粘土ブロック(φ10mm)多量 上面には黒褐色土(有機質)の層あり(層厚2~3mm) 粘性強い・しまり強い |
| 19 褐色土 | シルト | 灰色粘土ブロック(φ10mm)多量 6層との層間に白色シルト(層厚1~2mm)を挟む 粘性強い・しまり強い |
| 20 明灰褐色土 | シルト | 灰色粘土ブロック(φ3~5cm)多量 粘性強い・しまり強い |
| 21 白灰色砂 | 砂層 | この部分のみ厚く堆積 ラミナ状 粘性なし・しまりあり |
| 22 暗灰褐色土 | シルト | 粘土ブロック(φ3~5cm)含む 粘性強い・しまり強い |



第15図 盛土・石垣(1)



第16図 盛土・石垣（2）

域である。焼土遺構2・3・7には幅0.25～0.35m、長さ0.5mの突出部が付く。

第1号焼土遺構（第17図）

長軸0.76m、短軸0.52m、深さ0.15mで、楕円形である。長軸の方位はN—15°—Eである。断面形は皿形で、底面はほぼ平坦である。北東側はやや緩やかに立ち上がり、焼土化している。覆土は砂粒を含む暗褐色土（1・2層）、炭化物層（3層）で、全ての焼土遺構で共通している。遺物は出土していない。

第2号焼土遺構（第17図）

長軸1.36m、短軸0.80m、深さ0.30mで、円形の本体の北東側に突出部が付く。長軸の方位はN—51°—Eである。断面形は箱形で、底面はほぼ平坦である。底面のやや南東寄りに径0.15m、深さ0.08mの小ピットが設けられていた。この小ピットを除き、床面全体が焼土化していた。突出部は長さ0.56m、幅0.36mである。床面は本体から連

続し、平坦である。突出部の床面は焼土化していなかった。遺物は出土していない。

第3号焼土遺構（第17図）

長軸1.10m、短軸0.64m、深さ0.17mで、円形の本体の北東側に突出部が付く。長軸の方位はN—50°—Eである。断面形は箱形で、底面はほぼ平坦である。突出部は長さ0.55m、幅0.37mである。床面は本体から連続し、緩やかに立ち上がる。遺物は京信楽焼の土瓶1点が出土している。

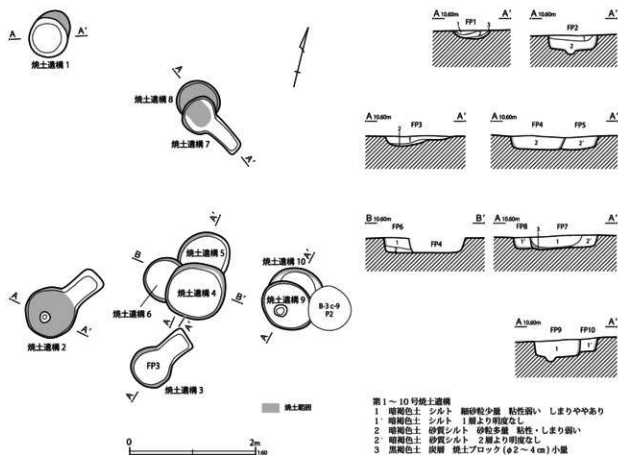
第4号焼土遺構（第17図）

長軸1.01m、短軸0.92m、深さ0.24mで、円形である。焼土遺構5・6と重複し、両者より本遺構の方が新しい。長軸の方位はN—7°—Wである。断面形は箱形、底面はほぼ平坦である。壁面全体が焼土化していた。遺物は出土していない。

第5号焼土遺構（第17図）

径0.80m、深さ0.22mの円形である。焼土遺構4・6と重複し、前者より古く、後者との新旧は不明

焼土遺構 1～10



第17図 第1～10号焼土遺構

である。断面形は箱形で、底面はほぼ平坦である。壁面全体が焼土化していた。遺物は出土していない。

第6号焼土遺構（第17図）

径0.70m、深さ0.25mの円形である。焼土遺構4・5と重複し、前者より古く、後者との新旧は不明である。断面形は箱形で、底面はほぼ平坦である。壁面全体が焼土化していた。遺物は出土していない。

第7号焼土遺構（第17図）

長軸1.17m、短軸0.58m、深さ0.25mで、円形の本体の南東側に突出部が付く。長軸の方位はN—56°—Wである。第8号焼土遺構と重複し、本遺構の方が新しい。断面形は箱形で、床面はほぼ平

坦である。床面の北西寄り、径0.4mほどが焼土化していた。突出部は長さ0.52m、幅0.28mである。床面は本体から連続し、平坦である。突出部の床面は焼土化していなかった。

遺物は、京・信楽の丸碗、小杉碗各1点、瀬戸美濃のせんじ碗1点が出土している。小杉碗は第8号出土の破片と接合する。

第8号焼土遺構（第17図）

径0.70m、深さ0.18mの円形である。断面形は箱形で、底面はほぼ平坦である。第7号焼土遺構より古い。壁面と床面全体が焼土化していた。

遺物は、京・信楽の小杉碗が一点出土している。前述のように、この資料は第7号焼土遺構から出土した破片と接合関係にある。

第9号焼土遺構 (第17図)

長軸0.88m、短軸0.74m、深さ0.34mの楕円形である。長軸の方位はN-75°-Wである。焼土遺構10、グリッドビット2と重複し、前者より新しく、後者より古い。断面形は箱形で、底面はほぼ平坦である。底面のやや南西寄りに径0.2m、深さ0.1mの小ビットが設けられていた。遺物は出土していない。

第10号焼土遺構 (第17図)

現存している最大径0.8mの円形である。断面形は箱形で、底面はほぼ平坦である。焼土遺構9、グリッドビット2と重複し、両者より古い。壁面全体が焼土化していた。遺物は出土していない。

(5) 足立家屋敷跡出土の遺物

陶磁器・土器 (第18～21図) 1～4は第1号建物跡の柱穴、布掘りから出土した陶磁器・土器である。1・2は、建物跡北側から出土した大型の土師質甕である。山に「サ富山」と上方左右に「野州」「岩舟」の刻印がある。下野産。胴部外面ヘラナデ後ナデ。内面は全体に剥離が進む。底面は無調整。3は土器製の大型の蓋である。大型の摘みが付き、先端に「TFCE」の文字がレリーフとして施されている。内外面とも黒色を呈し、外面は鹿の子仕上げ、内面はナデである。4は七輪の目皿である。全体に歪み、被熱により白色化している。

6～11は、第2号建物跡の柱穴、布掘り出土のものである。6～8は肥前系染付磁器である。7は広東碗で焼継ぎ。底面に朱書きがあるが、判読できない。10・11は胞衣壺である。土師質で、10は天井部、11は体部下半回転ヘラケズリ、底面回転切である。11の内面には点々と炭化物付着。

盛土上面からは、酸化コバルト使用肥前系磁器湯呑碗、瀬戸系磁器白磁文型押皿、瀬戸美濃陶器水甕、益子陶器徳利、瀬戸美濃陶器掬鉢が出土している。

2は瀬戸系磁器の土甕である。口縁部に雷文、体部に魚文のレリーフが施されている。5は益子焼の五合徳利である。底部外周露胎。判然としなが、屋号の「八ろ」の墨書が施されている。

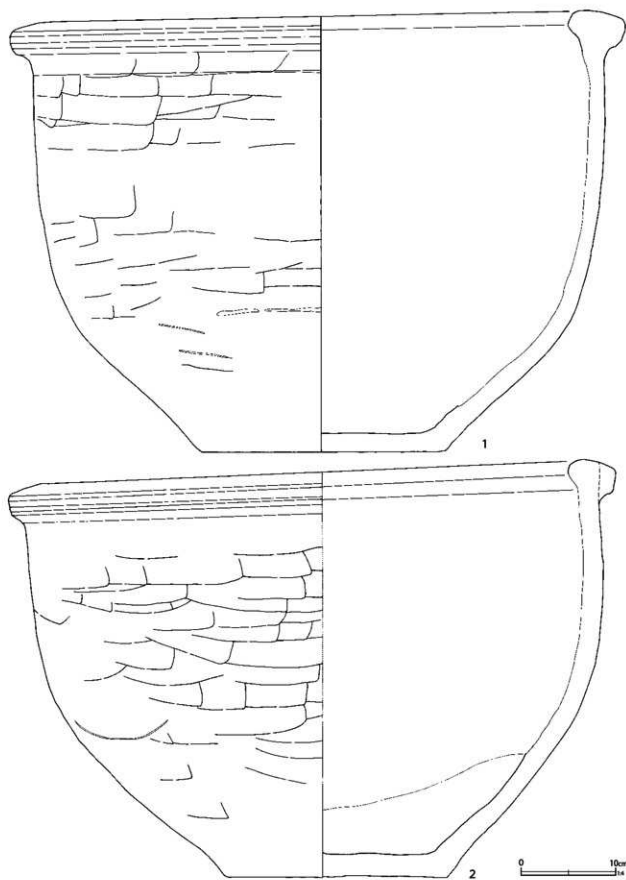
盛土からは、呉須使用肥前系染付磁器碗・皿、酸化コバルト使用肥前系染付磁器皿、瀬戸系湯呑碗、産地不明陶器植木鉢、堺明石産陶器掬鉢、土器植木鉢が出土している。

9の輪花皿は、呉須使用の染付。蛇の目高台。10の輪花皿は、酸化コバルト使用の型紙刷り、微塵唐草文が施されている。12は産地不明の陶器植木鉢。13の掬鉢は使用のため摩耗している。14の植木鉢は、小破片が接合したものである。

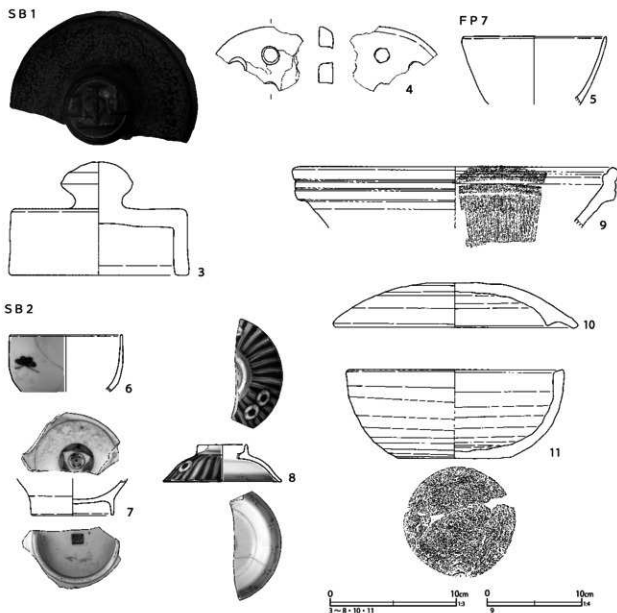
盛土の東端からも多くの遺物が出土した。15は肥前系磁器の筒形碗、16は酸化コバルト使用の肥前系磁器で型紙刷りの微塵唐草文蓋。17は酸化コバルト使用の草花文皿。蛇の目高台。18の瀬戸系磁器端反り碗は焼継ぎが施され、底面に朱書が入れているが判読できない。19の瓶類の胴部には墨書が施されているが、一部しか遺存しておらず判読できない。20の産地不明陶器皿は、2次加熱の可能性ある。22はカマド道具の一つと考えられる。緩やかな弧を描く台形で、上部は受け口状になっている。体部は幅15～20cmのスリットが入れている。23は火消壺、24は持ち手を欠く行平鍋である。

足立家屋敷跡盛土からは、グリッド扱いで取り上げられた遺物も多く出土している。陶磁器には、瀬戸美濃窯産香炉、備前献上徳利、大堀相馬窯「田代法橋」銘坏、瀬戸系磁器碗、笠間陶器掬鉢、京・信楽陶器油受皿がある。

26の献上徳利は、べこかん状の凹みに布袋像が貼付されている。27は大堀相馬窯の相馬駒焼である。片口坏で、手びねり。「田代」「法橋」の刻印が底部外周に施されている。見込み鉄絵走り駒。内外面灰軸施軸。底面は渦巻き状になっている。底部露胎。28は笠間の掬鉢で蛇の目高台。29は産



第18図 第1号建物跡出土遺物



第19図 第1・2号建物跡・焼土遺構出土遺物

地不明の植木鉢である。内外面灰釉施軸。内面頸部以下無釉。外面頸部に幅広の沈線が入られている。30は瀬戸系磁器の八角鉢で、焼継が施されている。底面には朱書きで数字が入られているが、大部分が消えており判読できない。

32・33は盛土出土の土製品である。

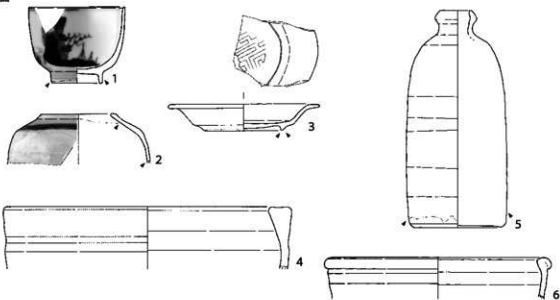
32は土製円板である。土師質で、ナデ調整。側縁はヘラにより押さえられバリ状のはみだしが見られる。表裏に煤が付着する。33は肥前系磁器の

ミニチュアで、瓢形である。中実である。

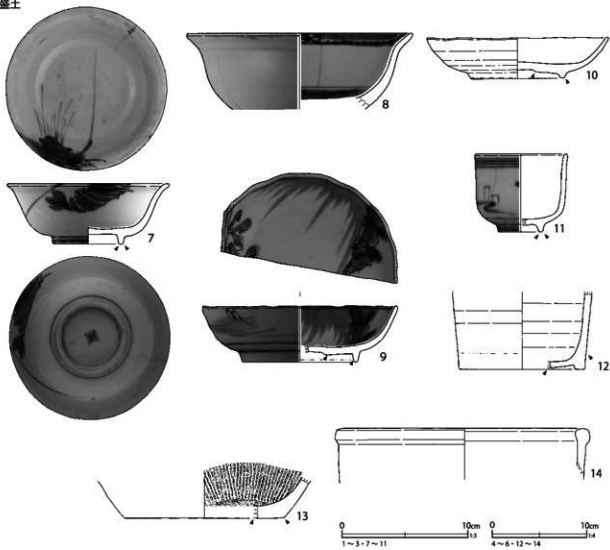
瓦（第22～24図） 第2号建物跡からは、建物基礎の部材として一辺5cmほどに割られた多量の瓦片が入れられていた。6には、瓦を割る際の目安の線が入れられている。7・8が割られた瓦片の大きさである。ほとんどのものが銀化している。また、多くの瓦片が被熱していた。

1は丸瓦である。内面に、布目と模骨痕が見られ、ヘラナデが加えられている。

盛土上面

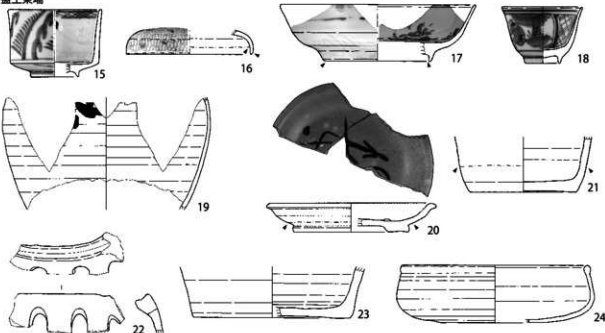


盛土

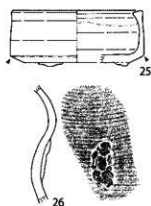


第20図 盛土出土遺物 (1)

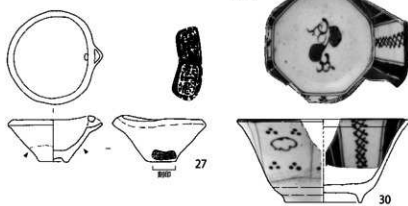
盛土東端



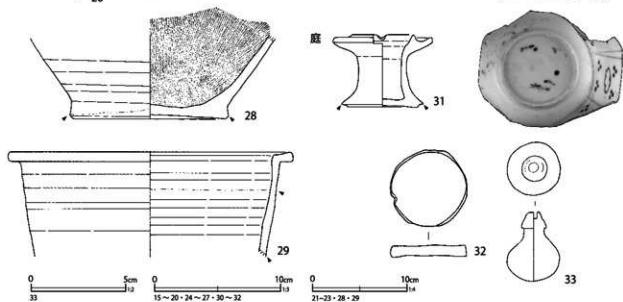
グリッド



攪乱



庭



第21図 盛土出土遺物（2）

第2表 遺構出土土器観察表 (第18・19図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	土器	甕	65.3	46.0	25.6	H1K	100	良好	橙	SB1 No.2	8-1
2	土器	甕	63.8	44.2	23.4	AH1K	95	良好	橙	SB1 No.3 刻印山に「下野」岩舟 ヤ富山	8-2
3	土器	蓋	(14.0)	8.9	—	A EH1K	50	良好	灰輪	SB1 14 不明 レリーフ「TF-CE」	9-1
4	土器	七輪	—	—	—	A CH1K	5	普通	にぶい橙	SB1 掘り方 皿皿径11.6cm 厚1.1cm 孔径1.2cm 被熱	
5	陶器	碗	(11.3)	(5.4)	—	IK	25	良好	灰黄	FP7 F78 京信 小杉碗 外面鉄絵小杉 文	
6	磁器	碗	(8.8)	(4.5)	—	K	30	良好	灰白	SB2 肥前 小丸碗 外面染付	
7	磁器	碗	—	(2.9)	(6.4)	K	40	良好	灰白	SB2 肥前 広東碗 焼き抜き 寿字 変形字 19C後	8-3・5
8	磁器	蓋	(9.3)	2.9	(3.8)	K	25	良好	灰白	SB2 肥前 広東碗蓋 格子文 雷文	8-4・5
9	陶器	漆鉢	(33.0)	(6.5)	—	E1K	5	良好	褐灰	SB2 肥前 漆鉢 目9条1単位	
10	土器	甕	18.8	3.5	—	K	100	良好	橙	SB2 肥前甕蓋	
11	土器	甕	17.0	7.0	8.7	AH1K	100	普通	にぶい橙	SB2 肥前甕蓋受器 回転糸切左回転	

第3表 盛土出土土器観察表 (第20・21図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	磁器	碗	7.6	6.0	4.0	K	95	良好	灰白	盛土上面 肥前 湯呑碗 酸化コバルト 19C4/4	9-2
2	磁器	土瓶	(6.0)	(3.9)	—	K	30	良好	灰白	盛土上面 瀬戸 雷文 青乗せ 魚のレ リーフ	
3	磁器	皿	(12.0)	2.1	(6.0)	K	30	良好	灰白	盛土上面 瀬戸 型押し寿文皿	
4	陶器	水甕	(29.8)	(6.7)	—	E1K	5	良好	灰黄	盛土上面 瀬戸美濃 内外面灰輪 外面 緑輪かけ流し 剥離多	
5	陶器	瓶	3.2	23.0	9.3	A1K	100	良好	にぶい黄橙	盛土上面 益子五合徳利 外面柿輪 墨 書	9-3
6	陶器	鉢	(22.4)	(4.4)	—	IK	10	良好	灰黄	盛土上面 瀬戸美濃 内外面灰輪	
7	磁器	碗	12.6	4.8	5.4	K	100	良好	灰白	盛土 肥前 瑞反 染付 底角福	9-4
8	磁器	鉢	(17.8)	(6.0)	—	K	45	良好	灰白	盛土 肥前 外面青磁輪 内面染付	9-5
9	磁器	皿	(15.2)	4.5	(9.0)	K	45	良好	灰白	瀬戸 輪花皿 外船 内山草 19C4/4	9-6
10	磁器	皿	(14.0)	3.3	7.3	K	60	良好	灰白	肥前 輪花皿 酸化コバルト 型紙刷り 波状口縁	9-7
11	磁器	碗	(7.1)	6.2	(3.6)	K	40	良好	灰白	瀬戸 湯呑碗 外面染付 山水・船 19C4/4	9-8
12	陶器	横木鉢	—	(8.2)	(3.2)	IK	40	良好	褐灰	内外面鉄輪	9-9
13	陶器	漆鉢	—	(4.4)	(17.0)	IK	40	良好	赤	肥前 漆鉢 目8条以上1単位	
14	土器	横木鉢	(25.6)	(5.3)	—	ACEH1K	15	良好	灰光陶	内面保付着	
15	磁器	碗	(7.3)	5.3	(3.7)	K	25	良好	灰白	東端 肥前 染付 草文	
16	磁器	蓋	(10.0)	(1.9)	—	K	25	良好	灰白	東端 肥前 微塵唐草文	
17	磁器	皿	(15.4)	4.5	(8.4)	K	25	良好	灰白	東端 瀬戸 酸化コバルト 草花文	
18	磁器	杯	6.4	4.5	2.7	K	90	良好	灰白	東端 瀬戸 平面赤粉 19C4/4	9-10
19	陶器	瓶	—	(8.3)	—	K	20	良好	灰白	東端 墨書	
20	陶器	皿	(12.8)	2.3	(9.0)	H1K	30	良好	明黄褐	東端 産地不明 トナリ 銘 被熱か	9-11
21	陶器	蓋	—	(5.9)	(1.4)	H1K	40	良好	灰黄	東端 瀬戸美濃 有耳蓋 内外面灰輪	
22	土器	七輪	—	(4.3)	—	AC1K	10	普通	灰黄	東端	9-12
23	土器	火消煮	—	(5.5)	(1.6)	AH1K	40	良好	にぶい橙	東端 内外面保付着	
24	土器	火消煮	(14.6)	(4.5)	—	AH1K	30	普通	にぶい橙	東端 行平陶 保付着	9-13
25	陶器	香炉	(10.3)	4.4	(8.2)	H1K	25	良好	浅黄	B2-C7 瀬戸美濃 灰輪	9-14
26	陶器	徳利	—	(9.5)	—	IK	10	良好	褐灰	B2-B10 備前 甕上徳利	
27	陶器	杯	5.9	3.6	2.4	K	100	良好	灰黄	B2-C7 大瀬相馬産 作者刻印・田代 法橋	10-1

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
28	陶器	部鉢	—	[9.0]	16.0	A1K	70	良好	灰白	B2-D9 笠間	10-2
29	陶器	植木鉢	(29.6)	[11.1]	—	1K	20	良好	灰黄	B2-C7 産地不明 花木鉢 灰軸	
30	磁器	鉢	(13.4)	6.6	6.0	K	20	良好	灰白	カクラン 肥前 八角鉢 焼接ぎ	10-3
31	陶器	油受け皿	4.8	5.7	5.6	K	90	良好	にぶい黄緑	庭(西)京信 灰軸	10-4
32	土器	土製円板	—	—	—	K	100	良好	橙	土師質 表裏に煤付着 径6.0cm 厚さ0.9cm 重さ39.7g	10-5
33	磁器	ミニチュア	—	—	3.6	—	100	良好	—	瀬戸 最大径2.7cm	10-6

2～15は浅瓦・平瓦である。分割により両者の別が困難なため一括した。いずれも、表面は丁寧なナデ調整。裏面はヘラケズリのままのものが多い。ほとんどの破片で表面の銀化が見られる。2には墨書があるが、直線状に書かれており、何らかの目印と考えられる。3・4には切り欠きが見られる。7には5条1単位の平行線状の、8には15条1単位の波状の滑り止めが施されている。

3・10～15には刻印が施されている。3・14は「幸栄」である。10～13・15は屋号と考えられる。10・13・15は、山に「石」で左右に文字が入る。15は右が「己」、左がひらがなの「し」であろうか。12・13の左側も同様である。10・11・16は山に「吉」である。11は判然としないが、右が「西」、左が「長」である。16は冠瓦と考えられる。山に「吉」の刻印がある。右に「阿」か。

17は瓦樋である。下側半分と片側の側縁を欠く。内面全面に模骨痕と布目が見られる。外面には分割のための沈線が入られている。傷みが著しい。

18・19は、軒浅瓦である。18は小型で粒の大きい三つ巴文が施されている。19の垂れは上半を欠いている。中心飾りは、基本的に江戸式と同様だが、江戸式より花卉が一重多く、本例は直立する中心の花芯を欠いている。表中では一重多いため、「江戸式Ⅱ(+)」と表記し、一重増えるごとに「+」を増やして表記した。また剥離面にカキ目が見られる。

盛土中からも多くの瓦が出土している。1は軒丸瓦である。瓦当面を一部欠いている。煤、漆喰付着。中央と瓦尻に穿孔があり、後者は針金が

付けられている。裏面全面布目。2は丸瓦である。裏面布目後ナデ。3・4は平瓦である。中央に穿孔が施されている。4の穿孔は貫通していない。5は完形の軒浅瓦である。連珠三つ巴文。江戸式亜種。「田宮瓦」の刻印が施されている。6～8は軒浅瓦である。6は連珠三つ巴文、7・8は三つ巴文。いずれも右巻きである。

なお、出土瓦については、調査現場で分類し、点数・重量を記録した。実測個体を除いて、廃棄を行った(第6表)。

木製品(第25・26図) 足立家屋敷跡からは、第1号建物跡確認面から一括して木製品が出土している。

12の深身の椀、16の独楽を除き、いずれも上質の漆器で、本来一揃いのセットであったと考えられる。

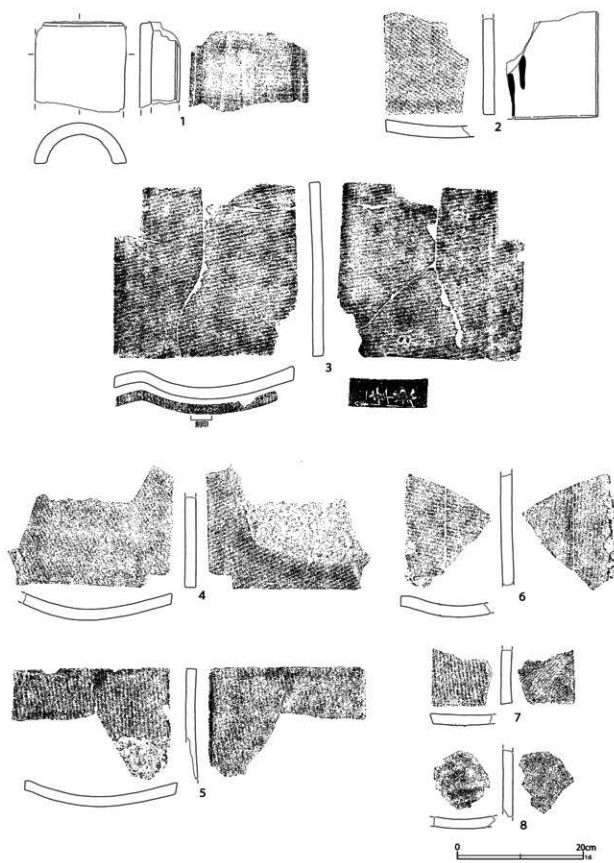
1～3は、皆朱漆の端反碗である。いずれも形態、法量ともほぼ同一でセットと考えられる。底面に「十」の黒漆書が施されている。

4～6は、外面朱漆、内面黒漆の皿で、金蒔絵の梅樹、松葉が描かれている。

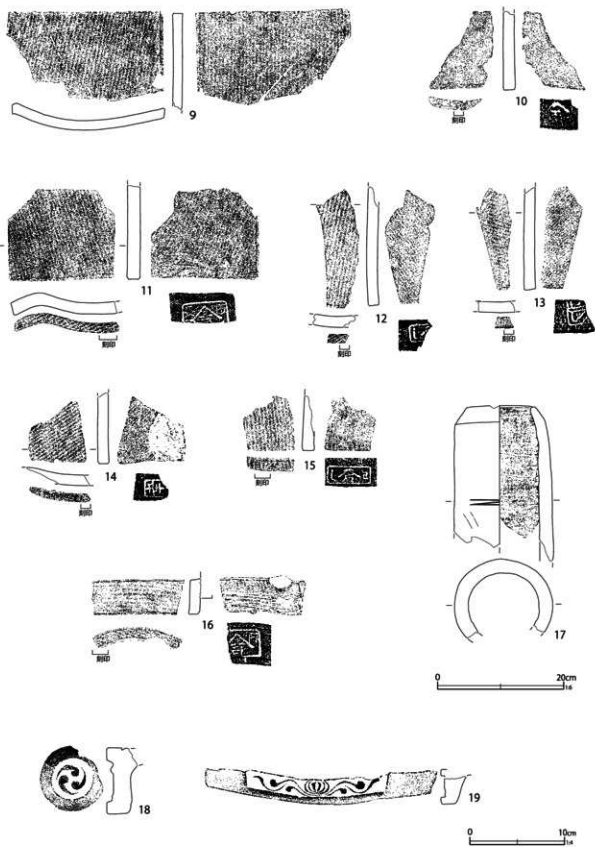
7～10は、皆朱漆の碗蓋である。7～9は端反で1～3の蓋と考えられる。内面に「十」の黒漆書きが施されている。10は摘みの高さがやや高く、広東型の碗蓋の可能性がある。11は皆朱漆の椀の破片で、「十」の黒漆書きが施されている。

12は深身の木製椀で、遺存状況が悪い。内面にロクロ目が見られる。

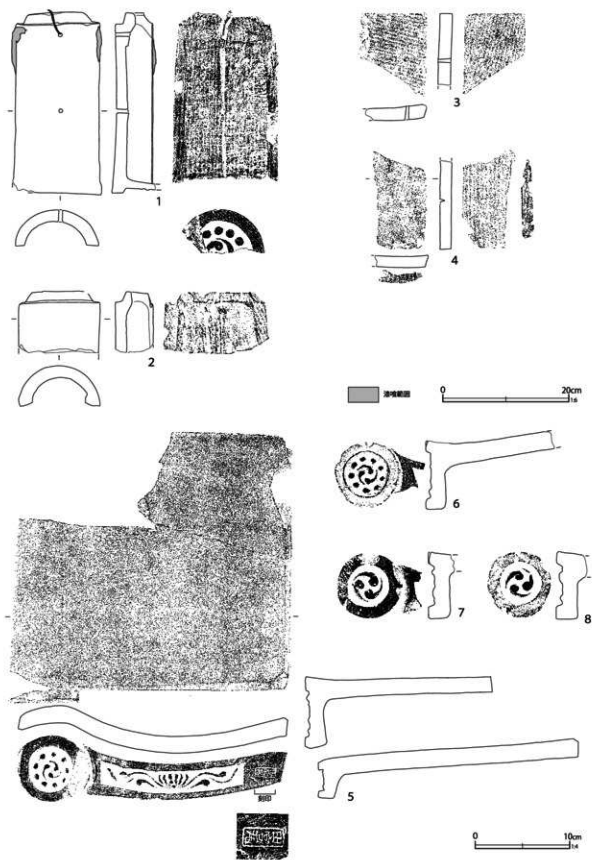
13・15は、箱の部材と考えられる。13は内面朱漆、外面黒漆で「十」の朱漆書きが施されている。15



第22図 第1号建物跡出土瓦(1)



第23图 第1号建物跡出土瓦(2)



第24図 盛土出土瓦

第4表 第1号建物跡出土瓦観察表 (第22・23図)

番号	種別	文様	法量(cm)			重量(g)	色調	備考	国版
			長さ 径	幅	厚さ 高さ				
1	丸瓦		[14.1] 7.2	14.5	1.8	610	灰	I-I' 一部被熱 煤付着 撥骨痕	10-8
2	平瓦		[15.1]	[13.7]	1.7	480	灰白	被熱 墨書 内部二層	
3	棧瓦		27.5	28.9	1.6	1110	灰	握り方 一部銀化 一部被熱 刻印「幸栄」か	
4	棧瓦		[19.6]	[23.3]	1.7	700	灰	握り方 切り欠き 被熱	
5	棧瓦		[17.4]	24.3	1.6	620	暗灰	握り方	
6	棧瓦		[18.5]	[14.2]	1.8	430	暗灰	I-I' 一部銀化 被熱	
7	平瓦		[9.4]	[9.9]	1.6	220	灰	一部被熱 5条1単位滑り止め	
8	平瓦		[10.6]	[9.6]	1.5	120	灰	表面銀化 15条1単位滑り止め	
9	棧瓦		15.3	24.3	1.5	730	灰	握り方 一部被熱か	
10	平瓦		[12.5]	[7.5]	1.9	170	灰	握り方 表面銀化 刻印	
11	棧瓦		[14.3]	[16.5]	2.0	610	灰	一部銀化 一部焼けている 刻印	
12	平瓦		18.8	6.6	1.7	200	灰	表面銀化 刻印	
13	平瓦		[16.0]	[5.8]	1.7	640	灰	刻印	
14	棧瓦		[11.2]	[10.0]	1.7	160	灰	一部銀化 刻印「幸」	
15	平瓦		[8.6]	[7.6]	1.9	90	灰	上面銀化 刻印	
16	冠瓦		[5.5]	—	1.7	170	灰	握り方 刻印	
17	瓦種		[24.7]	—	—	1690	灰	I-I' 撥骨痕 布目 外径15.4cm 内径11.1cm	
18	軒棧瓦	三つ巴文右巻	7.0	—	2.2	100	灰	一部銀化	
19	軒棧瓦	江戸式Ⅱ(+)+L	2.5	24.2	1.9	160	灰	一部銀化 一部被熱 煤付着	

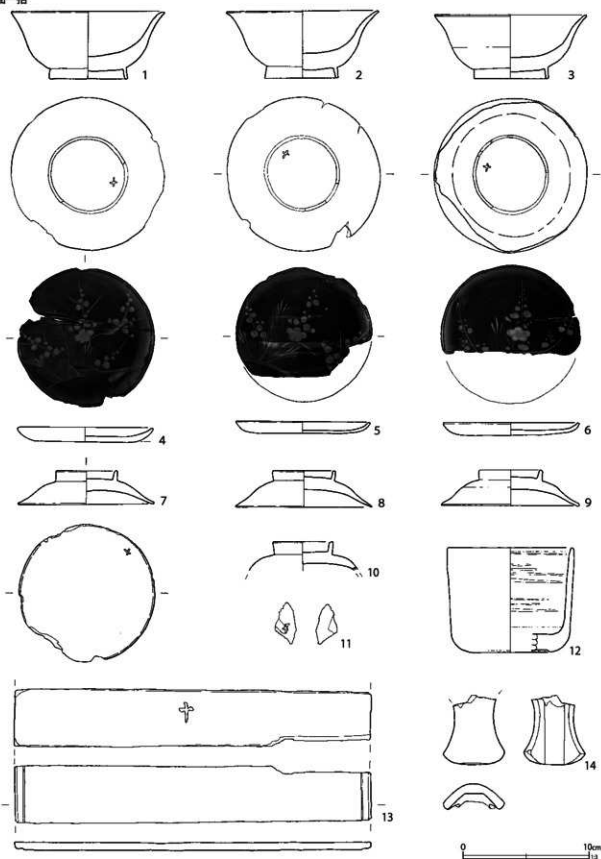
第5表 盛土出土瓦観察表 (第24図)

番号	種別	文様	法量(cm)			重量(g)	色調	備考	国版
			長さ 径	幅	厚さ 高さ				
1	軒丸瓦	連珠三つ巴文右巻・18珠か	28.6 (14.0)	13.2	1.9	1320	灰	盛土 一部煤・漆喰付着 一部銀化 穴2箇所 針金付き	10-9
2	丸瓦		[9.1]	12.9	1.8	410	灰白	B2C10 一部銀化 撥骨痕 布目	
3	棧瓦		[13.2]	[10.7]	1.9	260	灰白	盛土 釘穴あり	10-7
4	棧瓦		[16.2]	[9.1]	1.8	240	灰	盛土 一部銀化 針穴あり	
5	軒棧瓦	連珠三つ巴文右巻・9珠 江戸式Ⅱ(+)+L	29.3 7.4	28.6	3.7	2010	灰	一面一括 銀化	
6	軒棧瓦	連珠三つ巴文右巻・9珠	[14.1]	[14.0]	1.9	510	灰	盛土	
7	軒棧瓦	連珠三つ巴文右巻	7.0	—	2.3	180	灰	盛土	10-7
8	軒棧瓦	連珠三つ巴文右巻	7.1	—	2.3	100	灰	盛土 B2B10	

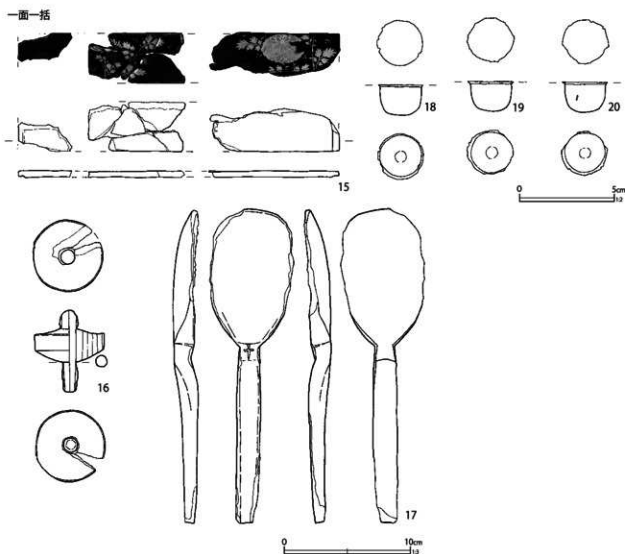
第6表 瓦計測表

		計量数(g) 破片数(個)												
	平瓦	丸瓦		軒瓦		造具瓦		鬼瓦		刷印瓦		その他		
遺構	計量数	破片数	計量数	破片数	計量数	破片数	計量数	破片数	計量数	破片数	計量数	破片数	計量数	破片数
SB1	81,950	941	4,510	26	1,530	20	120	1	0	0	170	1	0	0
SB2	1,050	19	120	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
盛土	12,165	129	2,930	9	2,750	5	0	0	0	0	50	1	0	0
一面	0	0	0	0	2,190	1	0	0	0	0	0	0	0	0
表探	100	3	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
カクラン	730	9	530	1	90	1	0	0	0	0	0	0	0	0
総合計	95,995	1,101	8,090	48	6,560	27	120	1	0	0	220	2	0	0

一面一括



第25図 木製品 (1)



第26図 木製品（2）

も同様の塗りで、外面に菊花文の蒔絵が施されている。細かく割れた状態で出土した。

14は、何らかの部材で断面台形を呈する。全面黒漆塗りか施されている。

16は独案である。体部が直立して面を持つ菱形の体部に、太さ1cmの棒状の鉄芯が取り付けられている。芯の上部はキャップ状になっている。

17は大型の匙である。全面黒漆塗り、持ち手の根元に「十」の朱書きが施されている。

18～20は容器などの脚部と考えられる。全面黒漆塗りである。

金属製品（第27図） 足立家屋敷跡からは多くの

鉄・銅製品が出土している。

第1号建物跡からは、釘、風鈴が出土している。風鈴はいずれも梵鐘を模倣したタイプで、下位が蓮弁状を呈しており、朝鮮半島の梵鐘の模倣と考えられる。

2の風鈴は鉄製で、下位が蓮弁状になっている。頂部は穿孔されており、舌は脱落している。二重の沈線により上帯が作出されている。体部には縦位の3条1単位の沈線が5単位施されている。3は青銅製で、鉄製の舌が付く。竜頭、上帯、横帯、縦帯、乳、撞座が線刻により描かれ、各々の間を唐草で埋めている。草の間に当たる箇所雲・雷・

第7表 木製品観察表 (第25・26図)

番号	出土遺構	器種	法量 (cm)			木取り	備考	図版
			長さ 口徑	幅 底徑	厚さ 高さ			
1	1面	椀	11.9	6.0	5.3	横木取り	一括 皆朱漆 文字有り (黒漆)	10-10
2	1面	椀	11.8	5.5	5.2	横木取り	一括 皆朱漆 文字有り (黒漆)	11-1
3	1面	椀	12.0	6.0	5.0	横木取り	一括 皆朱漆	11-2
4	1面	皿	10.4	7.8	1.1	横木取り	一括 外:内:黒漆 今壽絵 梅樹 松葉	11-3
5	1面	皿	10.7	6.0	0.9	横木取り	一括 朱漆 黒漆 今壽絵 梅樹 松葉	11-4
6	1面	皿	10.8	8.5	1.0	横木取り	一括 黒漆 絵入り	11-5
7	1面	椀(蓋)	10.6	4.9	2.8	横木取り	一括 皆朱漆 文字有り (黒漆)	12-1
8	1面	椀(蓋)	10.6	5.0	2.8	横木取り	一括 皆朱漆	12-2
9	1面	椀(蓋)	14.8	5.0	2.7	横木取り	一括 皆朱漆	12-3
10	1面	椀(蓋)	(8.7)	4.8	[22]	横木取り	一括 皆朱漆	12-4
11	1面	椀	(3.3)	(1.6)	—	横木取り	一括 皆朱漆 文字有り (黒漆)	11-6
12	1面	椀	(9.8)	(6.5)	8.2	縦木取り	一括	11-7
13	1面	箱	28.0	(4.6)	0.6	一括	内:朱漆 外:黒漆 文字有り (朱漆)	11-8
14	1面	不明	(5.4)	4.8	0.7	板目	一括 黒漆	11-9
15	1面	箱	(22.0)	3.9	5.0	一括	皆朱漆 外:黒漆 今壽絵 菊花 内:朱漆	11-10
16	遺物溜り	狭束	6.4	5.5	2.6	板目	鉄部分:厚さ0.9cm	12-5
17	1面	匙	23.7	6.3	1.9	一括	黒漆 文字有り (赤漆)	12-6
18	1面	脚か	2.4	—	1.6	一括	黒漆	12-7
19	1面	脚か	2.4	—	1.6	一括	黒漆	12-7
20	1面	脚か	2.4	—	1.6	一括	黒漆	12-7

SB1



SB1



FP



盛土



0 5cm



一面一括

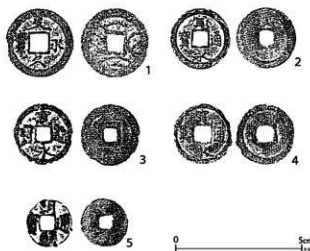


0 10cm

第27図 鉄製品

第8表 鉄製品観察表 (第27図)

番号	出土遺構	器種	法量 (cm)			重さ (g)	備考	図版
			長さ 口径	幅 底径	厚さ 高さ			
1	1号建物	釘	[5.7]	0.5	0.4	3.7	A-A'	13-1
2	1号建物	風鈴	4.2	5.8	—	77.7	I-I'	13-1
3	1号建物	風鈴	4.2	12~3.1	0.2~0.4	37.2	F-F' 舌は鉄製	12-8
4	FP10	釘	[3.8]	0.3	0.3	4.3		13-1
5	盛土中	釘か	[6.0]	0.6	0.5	13.6	B 2-B 1 0	13-1
6	盛土	釘	[5.8]	0.4	0.4	5.6	東端	13-1
7	盛土	釘	[6.4]	0.4	0.4	7.2	東端	13-1
8	盛土	釘か	[5.3]	0.7	0.3	16.8	東端	13-1
9	盛土	釘	[3.2]	0.6	0.5	17.2	東端	13-1
10	盛土	不明品	[7.4]	1.8	0.4	49.9	東端	13-1
11	1面	銅釘	5.5	0.7	0.4	9.5	一括 釘頭部分にNの文字有り	13-1
12	1面	銅釘	5.2	0.7	0.3	9.2	一括	13-1
13	1面	不明品	大きさ[5.8]×[4.8]		0.4	54.5	一括 容器か	13-1



第28図 古銭

雨と考えられる絵が描かれている。

盛土、焼土遺構からは釘が多く出土している。いずれも頭部を欠いている。5・8・9はやや太めである。

10は直角に曲げられた板状の製品である。用途不明。

本製品と同一の箇所からは銅製の釘と、容器と考えられる製品が出土している。

11・12は銅製の釘である。頭部は隅丸方形、多角形で、11には「N」の刻字が施されている。首部には、細かな沈線が入れられ、胴部から先端部は扁平である。

13は口縁部が肥厚し、胴部が湾曲することから、容器の一部と考えられる。

古銭 (第28図) 古銭は盛土からの出土である。

1は文久永宝である。「草文」と呼ばれる草書体で。背文は11波である。文久3年(1863)から慶応3年(1867)に铸造されたものである。

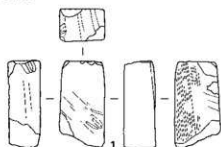
2~4は、寛永通宝である。いずれも新寛永である。4は傷みが著しい。

5は朝鮮通宝である。李朝鮮、世宗5年(1423)

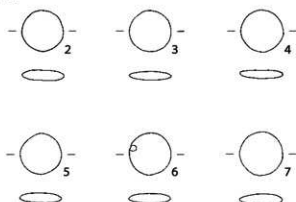
第9表 古銭観察表 (第28図)

番号	器種	出土位置	縦/mm	横/mm	厚さ/mm	重さ/g	備考	図版
1	文久永宝	不明	27.32	27.68	1.20	3.7	草文 裏波形 文久3年(1863)初铸	13-2
2	寛永通寶	盛土下	23.99	23.93	0.90	2.0	新寛永	13-3
3	寛永通寶	盛土	24.03	24.04	1.24	2.8	新寛永	13-4
4	寛永通寶	盛土	23.47	23.84	0.77	1.3	新寛永	
5	朝鮮通寶	2面	19.18	18.94	0.92	2.2	銭一括 李朝鮮 世宗5年(1423)铸造	13-5

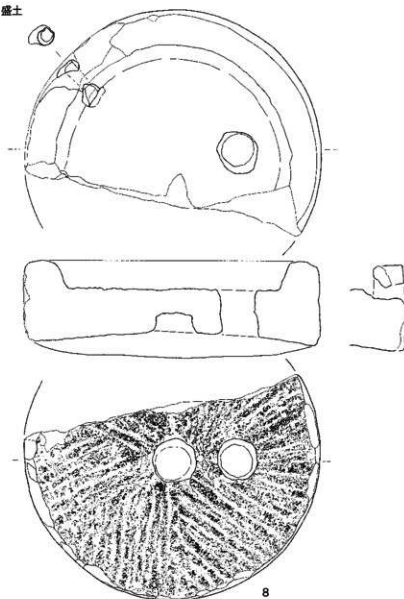
盛土下面



一面一括



盛土



第29図 石製品

第10表 石製品観察表 (第29図)

番号	種別	器種	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	備考	図版
1	石製品	砥石	9.1	4.8	3.3	25.6	盛土下面 流紋岩	13-6
2	貝製品	碁石	—	2.2	0.5	3.8	一面一括 貝殻の生長線まだらな縞に見える	13-6
3	貝製品	碁石	—	2.2	0.5	3.7	一面一括 貝殻の生長線まだらな縞に見える	13-6
4	貝製品	碁石	—	2.2	0.4	3.4	一面一括 貝殻の生長線まだらな縞に見える	13-6
5	石製品	碁石	—	2.2	0.5	3.4	一面一括 所謂那智の黒石か	13-6
6	石製品	碁石	—	2.2	0.5	3.4	一面一括 所謂那智の黒石か	13-6
7	石製品	碁石	—	2.2	0.5	4.1	一面一括 所謂那智の黒石か	13-6
8	石製品	石臼	径31.0	芯棒径3.8	貫通孔径1.2	高さ10.3	重さ72.2g 盛土 上臼 安山岩	13-7

の鑄造である。

石製品 (第29図) 1は流紋岩製の砥石である。盛土の下位から出土している。裏面に切断時の平ノミ痕が残る。

2～7は、第1号建物跡の確認面から、漆碗とともに出土した。2～4は白の碁石で、蛤製であ

る。5～7は黒の碁石で、所謂那智の黒石と呼ばれる粘板岩製である。

8は砂岩製の石臼の上臼である。上面の物入れに横方向の穿孔が見られる。挽手の取り付け孔の可能性はある。挽面は8区画9溝である。

2. 島田家屋敷跡

現在の島田家に該当する調査箇所からは、江戸時代の盛土1基が検出された。

(1) 盛土 (第30図)

調査区の西側、B3～D6・7、E5～8、F4～6、G4～6グリッドに位置する。丁度調査区の幅が狭くなる箇所であり、南北が調査区域外にかかる。調査区内の全体の平面形は長方形である。長軸方向は上端幅335m、下端幅348m、調査区内の短軸方向は上端幅150m、下端幅180mである。長軸の方位は足立家、加藤家と同じN—42°—Wである。調査が可能な深度では、水平堆積などの地山と認定できるような堆積状況を確認できなかった。東側の足立家と同一の高さを構築面と仮定すると、現在確認できる高さは20～30mである。覆土はいずれもシルト質で粘土ブロック、砂、炭化物、浅間A軽石を含む暗褐色土、灰褐色土である。浅間A軽石 (1873年) を含むため、盛土の形成は18世紀第4四半期以降である。

盛土の形成工程は、上下ではなく、大きく盛土の手前と奥に分かれている。断面Aで確認できる盛土の手前側は、比較的単純な土層で、層厚も厚

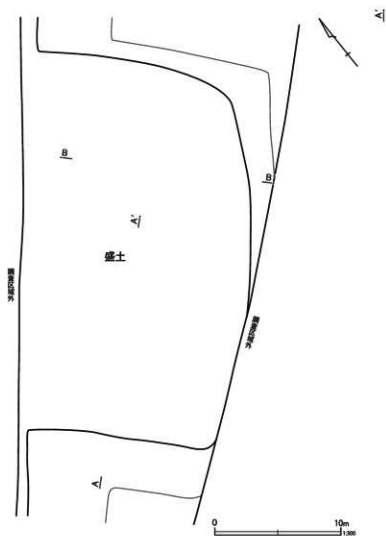
い。大きな単位での造成が確認できる。それに対して断面Bの北側では、暗褐色土、灰褐色土、褐色土が、明瞭ではないが、山を造るような状態で造成されている。こうした構築方法は足立家、加藤家両屋敷跡と共通する。

(2) 島田家屋敷跡出土の遺物

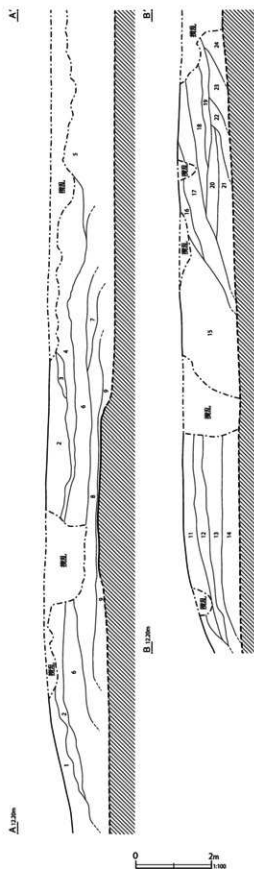
陶磁器・土器 (第31～33図) 盛土からは、肥前系磁器碗・皿・段重、瀬戸系磁器碗・皿・蓋物・蓋、京信楽系陶器碗、瀬戸美濃陶器杯、堺明石陶器播鉢、産地不明の植木鉢・火鉢が出土している。少量の、被熱した破片を含んでいる。

1～8は磁器である。2・5は梅樹文の粗製の碗・皿である。3は瀬戸系磁器の端反碗である。6は焼継ぎが施され、底面には不明瞭だが、朱書きで「二六」と記されている。7は段重で、色絵である。

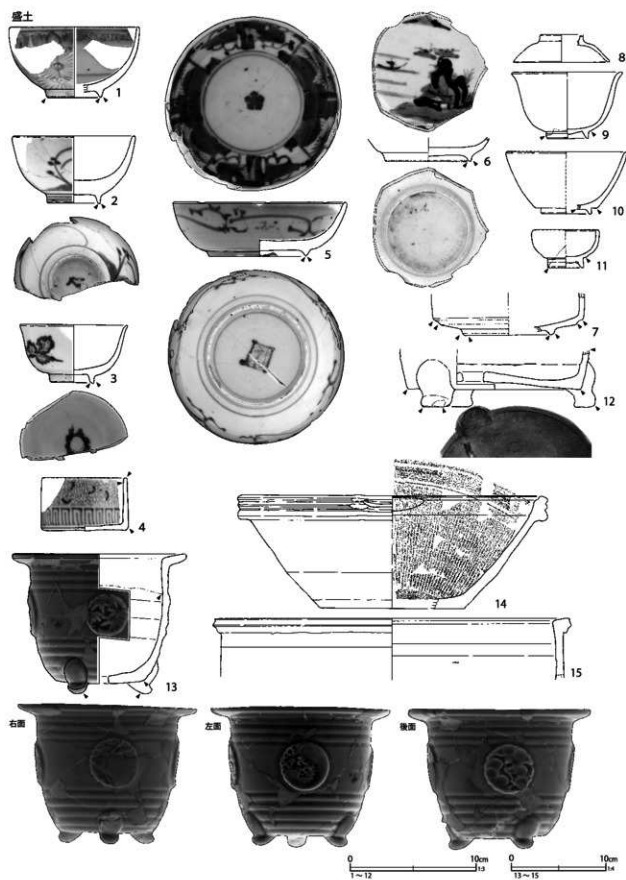
8～12は陶器である。9・10は京信楽、11は瀬戸美濃。12は産地不明、14は堺明石である。11の杯は灰釉のかけ方が均一でなく、部位によって厚さが異なる。12は産地不明の植木鉢で、獸蹄3足である。底面に2箇所孔が開けられている。胴



- 盛土
- 1 暗褐色土 表土層 シルト・腐植土の混在層 砂粒少量 粘性ややあり しまり弱い
 - 2 褐色土 砂質シルト 粘土ブロック少量 粘性強い しまりややあり
 - 3 暗褐色砂 砂質 炭化物粒子少量 粘性なし しまりややなし
 - 4 暗褐色土 砂質シルト 礫・砂粒・粘土ブロック (φ1~2cm) 含む 粘性・しまりややあり
 - 5 褐色土 砂質シルト 粘土ブロック多量 粘性ややあり しまりやや強い
 - 6 褐色土 砂質シルト 砂少量 粘土ブロック多量 粘性ややあり しまりあり
 - 7 暗灰褐色土 砂質 粘土ブロック (φ1~5cm)・砂の混在層 粘性・しまり強い
 - 8 暗褐色土 粘土 砂少量 粘土ブロック多量 粘性ややあり しまり強い
 - 9 黄灰土 粘土 砂粒含む 炭化物粒子多量 粘性・しまりあり
 - 10 暗灰褐色土 粘土 砂粒含む 粘性・しまりあり
 - 11 褐色土 シルト A-sa 多量 炭化物粒子少量 粘性なし しまりややあり
 - 12 暗褐色土 シルト A-sa 多量 砂粒・粘土ブロック (φ1~3cm) 含む 粘性・しまりなし
 - 13 暗褐色土 シルト A-sa 少量 砂粒・粘土ブロック (φ1~3cm) 含む 粘性なし しまりややあり
 - 14 暗灰褐色土 シルト 炭化物粒子多量 粘土粒子少量 粘土ブロックラミナ状に入る 粘性・しまりややあり
 - 15 灰褐色土 砂質シルト 細砂粒に粘土ブロック (φ1cm) 含む 粘性なし しまり弱い
 - 16 暗褐色土 砂質シルト 砂含む A-sa・粘土ブロック (φ1cm) 多量 粘性なし しまりややあり
 - 17 褐色土 シルト 砂含む A-sa 少量 粘土ブロック (φ2~5cm) 多量 粘性なし しまりややあり
 - 18 暗灰褐色土 シルト A-sa 少量 粘土ブロック (φ1cm)・砂含む 炭化物粒子少量 粘性なし しまりややあり
 - 19 暗灰褐色土 砂質シルト 粘土ブロック (φ1cm)・砂多量 粘性・しまりなし
 - 20 暗灰褐色土 砂質シルト 粘土ブロック (φ1cm) 多量 炭化物粒子少量 粘性・しまりなし
 - 21 暗褐色土 砂質 粘土ブロック (φ1cm) 多量 粘性・しまりなし
 - 22 暗褐色土 砂質 褐色粘土ブロック (φ1~2cm) 多量 炭化物粒子・ブロック多量 粘性なし しまり強い
 - 23 暗灰褐色土 砂質 砂・粘土ブロック少量 炭化物粒子少量 粘性・しまりなし
 - 24 暗灰褐色土 粘質 炭化物粒子少量 粘性あり しまりややあり

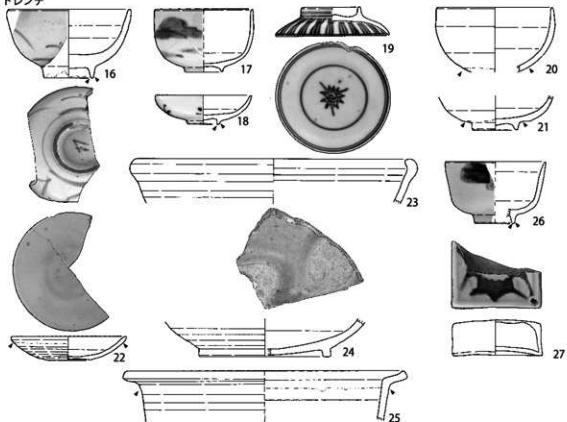


第30図 盛土

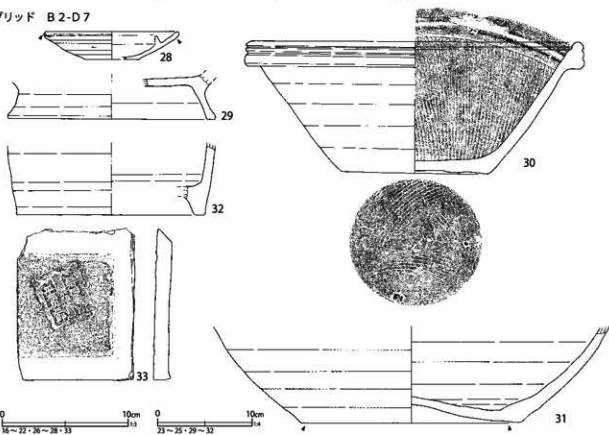


第31図 盛土出土遺物（1）

S2トレンチ

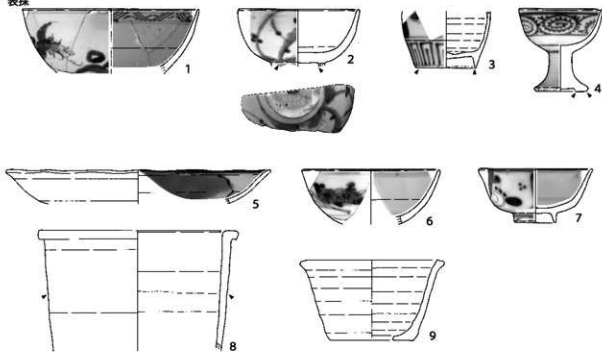


グリッド B2-D7

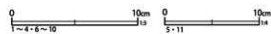
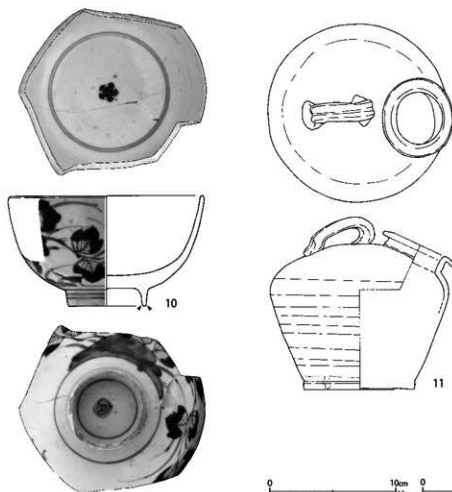


第32図 盛土出土遺物 (2)

表採



竈（西）



第33図 表採遺物

第11表 盛土出土遺物観察表 (第31・32図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	磁器	碗	(10.0)	5.6	(2.2)	—	40	良好	白	肥前 被熱 染付 内外面施輪 外不明 内雷文 見込不明 19C初	14-1
2	磁器	碗	(9.6)	5.3	(4.0)	H	50	良好	白	肥前 染付 梅枝文・梅樹文 底記号 18C後	14-2
3	磁器	碗	(8.4)	4.6	(3.4)	—	50	良好	白	瀬戸 染付 端反 外桃・紫文 見込桃 19C前	14-3
4	磁器	蓋物	(6.7)	4.2	(6.6)	K	40	良好	白	SB1-52 瀬戸 染付 微塵唐草文	14-4
5	磁器	皿	13.6	4.3	7.7	—	95	良好	白	肥前 輪花皿 染付 梅樹文 18C後	14-5
6	磁器	皿	—	[18]	6.8	K	90	良好	灰白	内外面焼接 底朱書「二六」	
7	磁器	段重	—	[33]	(6.8)	IK	15	良好	白	肥前 色絵 18C後	
8	磁器	蓋	(7.7)	[22]	—	H	30	良好	白	瀬戸 染付 外不明 内四方博	
9	陶器	碗	(8.6)	5.2	3.1	—	20	普通	淡黄	京信 被熱 煤付着 19C	
10	陶器	碗	(9.2)	4.9	(3.9)	K	40	良好	灰白	京信 灰輪 小杉碗 19C初	
11	陶器	杯	(5.0)	3.0	2.8	I	50	良好	灰白	瀬戸美濃 灰輪 19C初	
12	陶器	植木鉢	—	(3.5)	13.6	H IK	95	良好	にぶい焼	不明 透明釉 鉄絵 底面墨書	14-6
13	磁器	植木鉢	18.4	14.8	9.2	H IK	90	良好	灰白	三脚 青磁輪 四景	14-7
14	陶器	播鉢	(30.4)	11.9	(15.4)	E H IK	20	良好	明赤褐	堺明石 播目 9条 1単位 片口 19C初	
15	土器	火鉢	(39.7)	[6.4]	—	A IK	10	普通	黒	2トレ 不明 内外面煤付着 ロクロナデ	
16	磁器	碗	(9.5)	5.5	3.8	K	30	良好	灰白	2トレ 肥前 被熱 染付 梅樹文「力」 19C中	
17	磁器	碗	(7.6)	3.9	(2.8)	K	40	良好	灰白	2トレ 肥前 被熱 小丸碗 染付 山水文 19C前	
18	磁器	杯	(7.4)	2.3	2.5	K	60	良好	灰白	2トレ 瀬戸 コバルト 雄 草花 輪絵文	
19	磁器	蓋	9.0	2.3	つまみ径 4.5	K	100	良好	灰白	2トレ 瀬戸 染付 桶末文 星 草花文 19C中	
20	陶器	碗	(9.0)	[5.1]	—	H IK	30	良好	灰黄	2トレ 京信 灰輪 貫入多	
21	陶器	碗	—	[2.7]	3.6	K	80	良好	灰黄	2トレ 京信 灯明皿	
22	陶器	皿	9.0	1.9	4.0	K	70	良好	灰白	2トレ 京信 網毛目あり 19C前	
23	陶器	控鉢	(29.2)	[4.8]	—	IK	20	良好	黄灰	2トレ 瀬戸美濃 被熱 煤付着	
24	陶器	控鉢	—	[4.1]	(14.0)	K	25	普通	—	2トレ 瀬戸美濃 灰輪	
25	陶器	植木鉢	(29.0)	[5.2]	—	K	10	良好	灰黄	2トレ 瀬戸美濃 胎輪	
26	磁器	杯	(7.9)	4.9	(3.0)	K	30	良好	灰白	B2D7 瀬戸 染付 山水文か 18~19C初	
27	磁器	水滴	縦(5.5)	幅7.0	厚2.5	—	40	良好	灰白	B2C7 肥前 染付 菊花文 右側面無輪	
28	陶器	鉢	(10.5)	2.2	(4.2)	K	30	良好	灰黄	B2D7 京信 油受皿 灰輪 外面無輪 18C末~19C初	
29	土器	火鉢	—	[4.8]	(21.8)	A H IK	25	良好	にぶい焼	B2C7 御付火鉢 土師質	14-8
30	陶器	播鉢	34.5	14.0	15.5	H IK	60	良好	赤褐	B2C7 堺明石 無輪 播目10条1単位	14-9
31	陶器	大甕	—	[10.1]	(23.2)	H IK	40	良好	褐灰	B2D7 常滑	14-10
32	土器	植木鉢	—	[7.7]	(20.0)	E H IK	20	普通	灰黄褐	B2D7 瓦貫 胎輪	
33	土器	七輪	—	—	—	A EK	100	良好	橙	B2D7 箱型七輪返風口 刷印 三河製 長さ11.7cm 幅9.2cm 厚さ1.2cm	

部外面に鉄絵が施され、墨書で大書されているが、部分的で判読できない。底面には「□□□□」の墨書が書かれている。

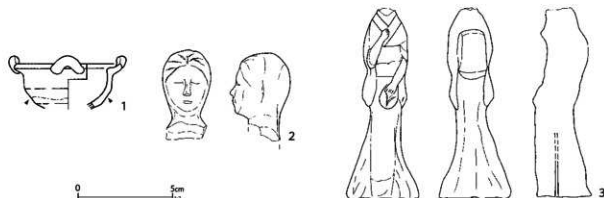
13の磁器植木鉢は、産地不明で、三脚。外面全体に青磁釉が施され、上下に太い沈線が入れられ

ている。沈線間には4単位の円板が添付され、波、鳥、菊、紅葉のレリーフが施されている。14の播鉢は片口である。15の火鉢は大型で、断面が四角い複合口縁である。

16~25は盛土に入れたトレンチから出土したも

第12表 表採遺物観察表 (第33図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	磁器	碗	(13.8)	(5.0)	—	K	25	良好	灰白	肥前 染付 大碗 えび 18C後半	15-1
2	磁器	碗	(9.6)	(5.2)	—	K	25	良好	灰白	肥前 染付 梅樹文 18C後半	
3	磁器	御神酒德利	—	(4.5)	4.7	K	60	良好	灰白	肥前 鶴首形 染付	14-11
4	磁器	仏飯具	(6.5)	6.5	4.0	K	70	良好	灰白	肥前 蛸唐草 18C後半	
5	磁器	皿	(27.8)	(3.6)	—	K	10	良好	灰白	肥前 志田窯 雲弾き雲形文 19C前半	15-1
6	磁器	碗	(10.8)	(4.3)	—	K	20	良好	灰白	瀬戸 染付 草花文	15-1
7	磁器	碗	(9.0)	4.2	(3.2)	K	60	良好	灰白	瀬戸 端反 染付 五弁花 19C前半	15-1
8	陶器	鉢	(15.8)	(9.5)	—	IK	20	良好	浅黄	瀬戸美濃 植木鉢 灰釉	
9	土器	植木鉢	(10.0)	6.3	(6.6)	A IK	25	普通	黄灰	瓦質土器	15-1
10	磁器	大碗	(15.4)	8.7	6.1	K	60	良好	白	庭 (西) 肥前 染付 草花文 変形字	14-12
11	陶器	渡瓶	8.0	18.2	11.5	IK	100	良好	にぶい黄橙	笠岡 柿軸	14-13



第34図 土製品

第13表 土製品観察表 (第34図)

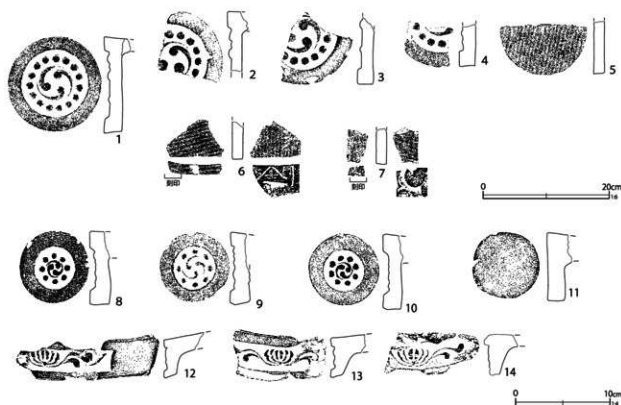
番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	陶器	ミニチュア 鍋	(7.6)	(2.8)	—	K	20	良好	にぶい黄橙	盛土 不明 柿軸 把手あり	15-2
2	土器	人形	—	(4.7)	—	E I	90	良好	褐灰	B3C7 姉さんか 煤付着 表面は光沢がある 残存長14.7cm 最大幅2.5cm	15-3
3	土器	人形	—	10.1	—	AHIK	98	普通	にぶい橙	盛土 不明 姉さん 19Cか 幅1.6~3.8cm 重さ58.9g	15-4

のである。肥前系磁器碗、瀬戸系磁器杯・蓋、京信楽陶器碗・皿、瀬戸美濃陶器捏鉢、植木鉢を図示した。

16~19は磁器である。16・17は肥前系磁器の碗で、被熱している。18・19は瀬戸系磁器である。18は酸化コバルト使用で、薬・草花文が描かれて

いる。19世紀後半。20~25は陶器である。20~22は京信楽の碗・皿である。23~25は瀬戸美濃の捏鉢・植木鉢である。23は被熱により変色し、煤が付着している。

26~33は盛土のグリッド出土のものである。瀬戸系磁器碗、肥前系磁器水滴、京信楽陶器皿、堺



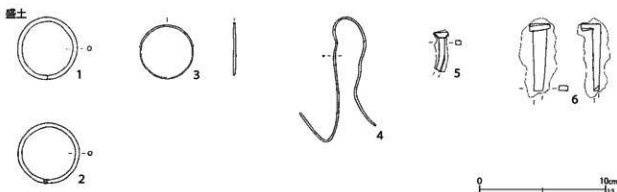
第35図 瓦

第14表 瓦観察表 (第35図)

番号	種別	文様	法量 (cm)			重量 (g)	色調	備考	図版
			長さ 径	幅	高さ				
1	軒丸瓦	連珠三つ巴左巻・15珠	[5.2] 15.2	—	2.1	740	暗灰	表採 軒止瓦	15—5
2	軒丸瓦	連珠三つ巴文左巻・16珠	(16.0)	—	2.3	220	灰	盛土 銀化	15—5
3	軒丸瓦	連珠三つ巴文左巻・15珠	(16.0)	—	2.5	220	黒灰	表採 銀化	15—5
4	軒丸瓦	連珠三つ巴文左巻・16珠	(7.5)	—	2.5	120	灰	盛土 銀化	15—5
5	石持瓦		(14.0)	—	1.7	190	灰	S2トレンチ 無文	
6	平瓦		[5.9]	[8.9]	1.7	80	灰	盛土 銀化 刻印 山に「吉」「長」「月」	
7	平瓦か		[5.6]	[1.7]	1.6	40	灰白	盛土 一部銀化 刻印「○」	
8	軒枕瓦	連珠三つ巴文右巻・8珠	7.7	—	2.1	100	灰白	盛土 銀化 被熱か	15—6
9	軒枕瓦	連珠三つ巴文右巻・8珠	7.5	—	2.1	100	灰白	盛土 銀化	15—6
10	軒枕瓦	連珠三つ巴文右巻・8珠	7.9	—	1.9	100	黒灰	表採	15—6
11	石持枕瓦		7.2	—	1.8	110	黒灰	表採 銀化 朱入り	15—6
12	軒枕瓦	江戸式Ⅱ(+)L	[5.1]	[15.1]	1.6	180	灰	盛土 一部銀化	15—6
13	軒枕瓦	江戸式Ⅱ(+)L	[4.8]	[9.0]	1.9	90	暗灰	盛土 銀化	15—6
14	軒枕瓦	江戸式Ⅱ(+)L	[3.5]	[9.3]	—	100	灰	盛土 銀化 子葉欠損	

第15表 瓦計測表

遺構	計量数(g) 破片数(個)													
	平瓦		丸瓦		軒瓦		道具瓦		鬼瓦		刻印瓦		その他	
遺構	計量数	破片数	計量数	破片数	計量数	破片数	計量数	破片数	計量数	破片数	計量数	破片数	計量数	破片数
盛土	11,730	161	320	3	1,230	12	50	1	0	0	70	1	0	0
表彩	0	0	0	0	950	3	0	0	0	0	0	0	0	0
S2レンヂ	0	0	0	0	420	2	0	0	0	0	0	0	0	0
総合計	11,730	161	320	3	2,600	17	50	1	0	0	70	1	0	0



第36図 盛土出土鉄製品

第16表 盛土出土鉄製品観察表 (第36図)

番号	出土遺構	器種	法量(cm)			重量(g)	特徴	図版
			長さ 口径	幅 底径	高さ			
1	盛土	銅環	4.9	0.3	0.3	9.8	眼鏡か	15-7
2	盛土	銅環	4.8	0.3	0.3	9.9	眼鏡か	15-7
3	盛土	レンズ	—	4.2	0.2	—	レンズ	15-7
4	盛土	リム	—	0.1	0.1	5.2	眼鏡のリムか	15-7
5	盛土	銅線	9.8	6.1	0.2	2.7	眼鏡のつるか	15-7
6	S2レンヂ	釘	[3.1]	0.5	0.4	3.0		
		釘	[5.3]	0.7	0.4	42.0		



第37図 古銭

明石陶器瑠鉢、常滑壺、産地不明の土器植木鉢・火鉢・七輪がある。

24は瀬戸美濃の鉢で、内面に小型器種を入れた釉壳が見られる。27は肥前系磁器の水滴で、内面の調整が底面布目、側面指ナデである。29は脚付

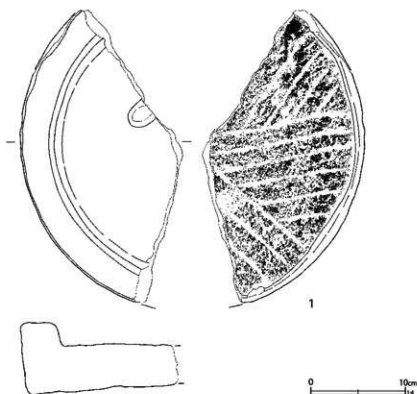
火鉢の脚部である。胎土には雲母を多く含む。31は常滑焼の壺である。外面には灰が掛かり、底面にはトチン痕が見られる。左上がりのナデ痕が明瞭である。32は瓦質の植木鉢で、外面全体に鉄軸が施されている。33は箱型七輪の送風口の扉で、「三陶」「三河陶器工商同業組合員平松興三郎」の刻印が施されている。三河製。雲母多量。

この他に、表土掘削時や、盛土西側の「庭」とされていた箇所からも多くの遺物が出土している。

1～5は肥前系磁器である。1は肥前系磁器の大碗である。2は梅樹文のくらわんか手碗である。4は仏飯具で、蛸唐草が施文されている。5は志

第17表 古銭観察表 (第37図)

番号	器種	出土位置	縦/mm	横/mm	厚さ/mm	重さ/g	備考	図版
1	寛永通寶	不明	28.33	28.71	1.02	4.2	表面波形8波	14-14



第38図 石製品

第18表 石製品観察表 (第38図)

番号	種別	器種	長さ(cm)	幅(cm)	底径(cm)	高さ(cm)	重さ(g)	備考	図版
1	石製品	石臼	[30.9]	[17.3]	[37.0]	7.7	4.4kg	表採 上臼 8区画 7溝	14-15

田舎の大皿である。黒弾き雲形文。6・7は瀬戸系磁器である。6は丸碗、7は端反碗である。9は瓦質の植木鉢である。10は肥前系磁器の大碗である。草花紋が施されている。11は笠間焼の浅瓶である。内外面柿軸施軸。底面へら切り。

第34図1～3は土製品である。1は両手鍋のミニチュアである。内外面柿軸施軸。把手貼り付け。2・3は素焼きの人形である。2は被り物をした女子の頭部で、光沢がある。姉さん人形か。3は頭部を欠く姉さん人形で、右手の握りに穿孔があり傘を持っていると考えられる。左手は包みを持っている。底面には径15mmの穿孔があり、台

座等への固定用と考えられる。

瓦(第35図) 盛土からは瓦片が多く出土している。足立家、加藤家両屋敷跡のような分割は行われておらず、被熱しているものは少ない。ほとんどのものが銀化している。

1～4は軒丸瓦である。いずれも連珠三つ巴文左巻きである。5は石持軒瓦である。瓦当面無文。6・7は刻印が施されている。棧瓦・平瓦と考えられるが、小破片のため確実でない。6は下側と左側が欠けており判然としないが、山に「吉」で左右に文字が入る。左に「長」、右に「門」と入られている。7は「〇」である。8～11は軒棧

瓦である。8～10は連珠三つ巴文である。8・10は右巻き、9は左巻きである。11は石持軒瓦である。12～14は小破片の軒棧瓦の垂れである。いずれも中心飾りは江戸式の亜種である。

なお、出土瓦については、調査現場で分類し、点数・重量を記録した。実測個体を除いて、廃棄を行った（第15表）。

金属製品（第36図） 島田家屋敷跡盛土からは多くの鉄・銅製品が出土している。1・2は、径5cmほどの銅製円環である。太さ0.3cmほどの銅線

を円環にしたもので、2には取り付け痕のような痕跡がある。眼鏡の可能性はある。3は眼鏡である。径4.2cmのガラス製レンズと、その縁であるリムと呼ばれる銅製品である。4は太さ0.2cmの銅線で、つるの可能性はある。5・6は鉄釘である。6は大型で、かすがいの可能性はある。

古銭（第37図） 1は寛永通宝で、新寛永である。裏面に波形8波が施されている。

石製品（第38図） 1は砂岩製の石臼の上臼である。挽面は8区画7溝と考えられる。

3. 加藤家屋敷跡

現在の加藤家に該当する調査箇所からは、江戸時代の建物跡4棟、盛土1基、井戸跡3基、土壇5基が検出された。

(1) 建物跡

建物跡は、盛土の上面から1棟、中位から1棟、盛土の下位から1棟、更にその下位から1棟の計4棟を検出した。

第1a号建物跡（第39図）

A4-I1・2・J1グリッドに位置する。

下位から検出された第1b号建物跡と、ほぼ同一箇所に建てられ、規模も同一であることから第1a・b建物跡と呼称した。ただし、両者の位置は完全に一致するものではなく、軸方向も若干異なることから、別個の建物の可能性もある。

建物全体の規模は、桁行長9.9m、梁行長3.6mである。長軸方向はN-30°-Eである。5×2間の側柱建物跡で、南東側に庇が取り付く。建物の東側では礎石が動いていると考えられるものも多く、推定される箇所を破線で示した。

身舎の規模は、桁行長9.9m、梁行長2.7m、平面積は26.73㎡である。柱間は桁行、梁行ともほぼ一間（1.8m）、一間半（2.7m）を基本としている。

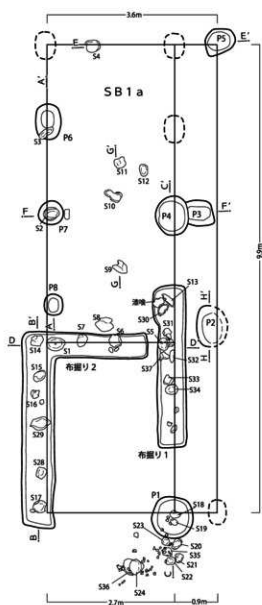
建物全体の地形は掘立柱状の壱掘り地形だが、建物の西側は布掘り地形が行われている（布掘り1・2）。

柱穴内には柱痕が認められず、シルト質の暗褐色土が充填されていた。個々の柱穴は円形もしくは楕円形で、建物の軸方向に長軸が揃えられている。規模は長径0.49～0.90m、短径0.47～0.85m、深さは0.06～0.36mである。P1・P6には礎石が認められる。長径0.3mほどの円礫である。石材は不明である。S4も移動しているが礎石の可能性はある。

建物の西側は布掘り地形が行われている。布掘り1は、長さ3.43m、幅0.57～0.70m、深さ0.1～0.2mで、瓦片・漆喰片を含む暗褐色土が充填されていた。

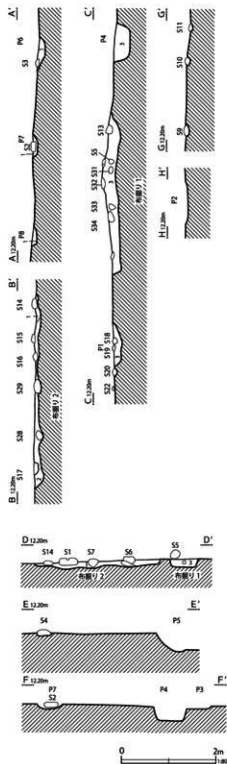
S5・13・30～34・37の礫は礎石と根石と考えられるが、散在した状態で、原位置が失われていると考えられる。いずれも長径0.3m、厚さ0.1mほどの不整形円形である。個々の石材は、流紋岩、砂岩、粘板岩、頁岩、片岩である。S13・30は安山岩製の石臼である（第91図）。

布掘り2は、桁方向のみでなく、建物の半ばで梁方向に屈曲して延びている。桁方向の長さ4.10m、梁方向の長さ2.65m、幅0.52～0.70m、深さ0.05～0.21mで、瓦片を含む小礫混じりの暗褐色土が充填されていた。S1・6～8・14～17・28・29の礫は、長径0.2～0.4m、厚さ0.1～0.2mほどの不整形円形、不整形楕円形である。石材は不明である。

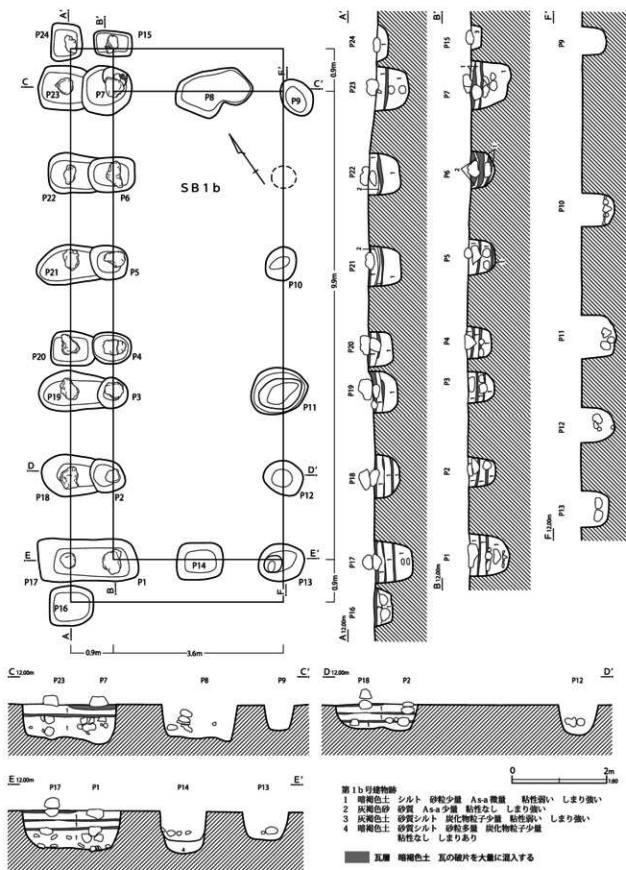


第1 a号建物跡

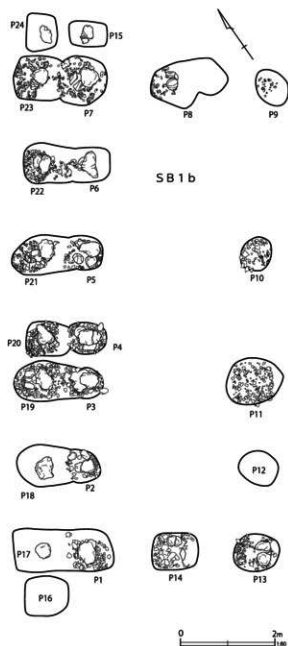
- 1 暗褐色土 シルト質 炭化物粒子微量 粘性強い しまりやあり
- 2 暗褐色土 小礫との混土層 瓦片混入 掘り方埋め土
- 3 暗褐色土 砂質シルト 瓦片・漆喰片層状に含む 粘性強い しまりやあり 掘り方埋め土



第39図 第1 a号建物跡



第40図 第1b号建物跡



第41図 第1b号建物跡瓦散布状況

S 1・14・17・29が位置的に礎石の可能性が高いが、布掘り1と同様に原位置を失っている可能性がある。

身舎の南東側には、幅0.9mの庇が取り付け付く。P 2・5は身舎同様の柱穴で、不整な楕円形である。各々の規模は、長軸0.88m、0.70m、短軸0.70m、0.60m、深さ0.05m、0.40mである。

第1b号建物跡 (第40図)

調査区の東側、A 4 - I 1・2・J 1グリッド

に位置する。

0.4m上位で検出された第1a号建物跡と、ほぼ同一箇所に建てられ、規模も同一であることから第1b号建物跡と呼称した。

建物全体の規模は、桁行長11.7m、梁行長4.5mである。長軸方位はN-35°-Eである。5×2間の側柱建物跡で、北西、北東、南西側に庇が取り付け付く。

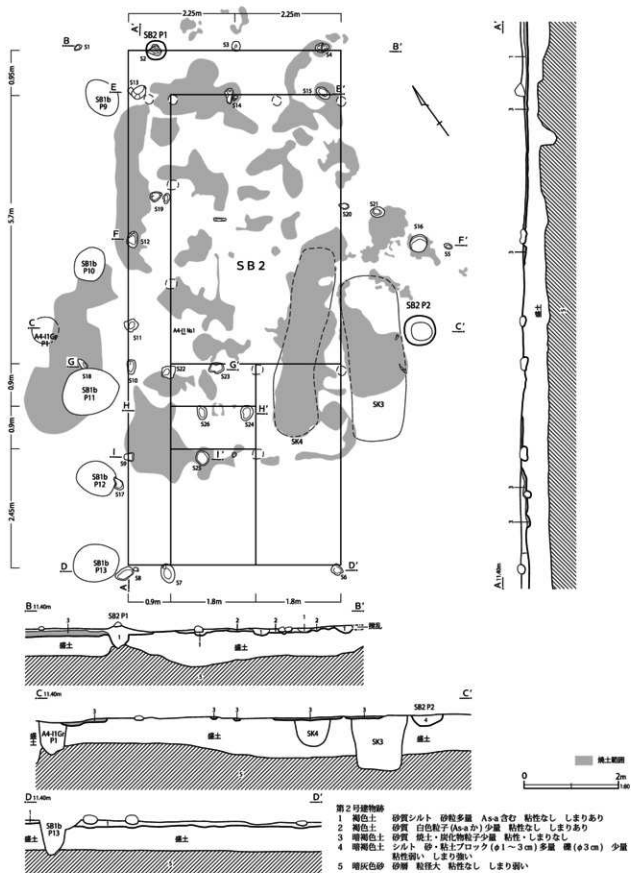
身舎の規模は、桁行長9.9m、梁行長3.6m、平面積は35.64㎡である。柱間は桁行、梁行ともほぼ半間(0.9m)、一間(1.8m)を基本としている。

建物全体の地形は、掘立柱状の壱掘り地形である。

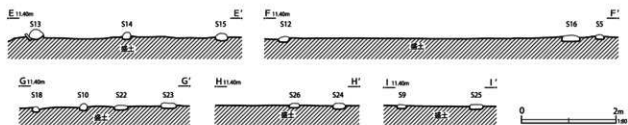
個々の柱穴は楕円形、もしくは略円形で、軸方向は原則として建物の軸方向に長軸が揃えられているようだが、北西側は庇の柱穴と一連の構造になるように建物軸と直交している。規模は長径0.77~1.16m、短径0.63~1.06m、深さは0.50~0.90mである。P 8は長軸1.61mの不整形で、2基が重複した形態である。礎石は、確認面で直下の根石とともに検出された。各々の礎石は、長径0.3~0.6m、厚さ0.1~0.3mほどの不整楕円形である。石材は不明である。

柱穴内には柱痕や抜き取り痕は認められない。覆土は、シルト質の暗褐色土と瓦の互層になっており、合わせて何段にも礎石と同様の礎が設置されている。瓦の互層、各段の礎のレベルはほぼ揃っており、丁寧な工程が窺える。根石の石材は不明である。覆土全体に浅間A軽石を含む。

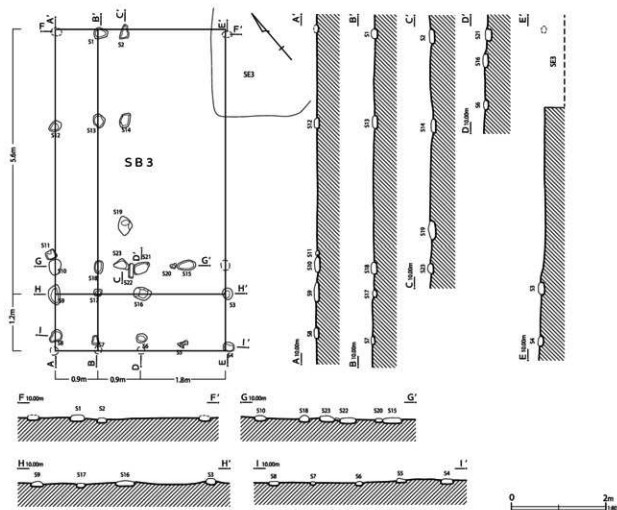
身舎の北東、北西、南西には、幅0.9mの庇が取り付け付く。P 17~23は、楕円形もしくは隅丸方形で身舎のP 1~7と一体の掘方になっており、瓦の互層も連続している(第41図)。各々の規模は、長軸0.88~1.20m、短軸0.74~0.92m、深さ0.53~0.81mである。P 15・16・24は連続せず、やや小型で、浅い掘方になっている。長軸0.80~0.95m、短軸0.54~0.84m、深さ0.22~0.38mである。



第42図 第2号建物跡 (1)



第43図 第2号建物跡(2)



第44図 第3号建物跡

第2号建物跡(第42・43図)

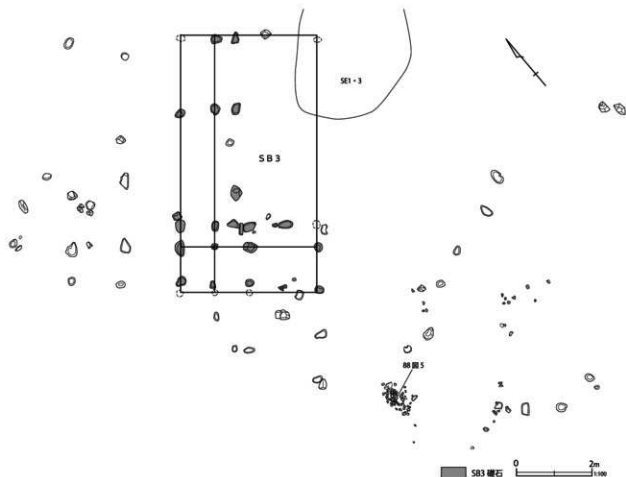
A4-I1・2・J1・2グリッドに位置する。第1b号建物跡の0.4m下位、標高約110mの面から検出された。検出面には、全体に焼土・炭化物が分布し、壁土と考えられるスサ入りの焼土塊が散在していた。

第3・4号土壇と重複し、両者より本建物跡の

方が新しい。

建物全体の規模は、桁行長10.90m、梁行長4.5mである。長軸方位はN-37°-Eである。5×2間の側柱建物跡と推定され、北西側に庇が取り付く。礎石が動いている、もしくは失われているものも多く、推定される箇所を破線で示した。

身舎の規模は、桁行長9.95m、梁行長3.6m、平



第45図 第3号建物跡周辺礎石分布図

面積は3582㎡である。柱間は桁行、梁行ともほぼ半間（09m）、一間（18m）、一間半（27m）を基本としているが、それに合わない箇所も見られる。特に建物の西側は、部屋割りが細分されている可能性があるが、詳細は判然としない。

建物全体の地形は特に行われておらず、盛土の平坦面に礎石が据え置かれている。

礎石は、焼土、炭化物を含む層の直上に当たり、第2号建物跡は火災後直後に建てられたと考えられる。

建物の範囲、あるいは周辺の礫は、礎石や根石と考えられるが、原位置を保っているものと、原位置が失われていると考えられるものがある。いずれも長径0.3m、厚さ0.1mほどの不整形形である。個々の石材は、角閃石安山岩が最も多く、ほかに頁岩、安山岩が見られる。底に当たる断面A

の礎石は、いずれも角閃石安山岩であり、礎石の主たる石材として用いられたと考えられる。

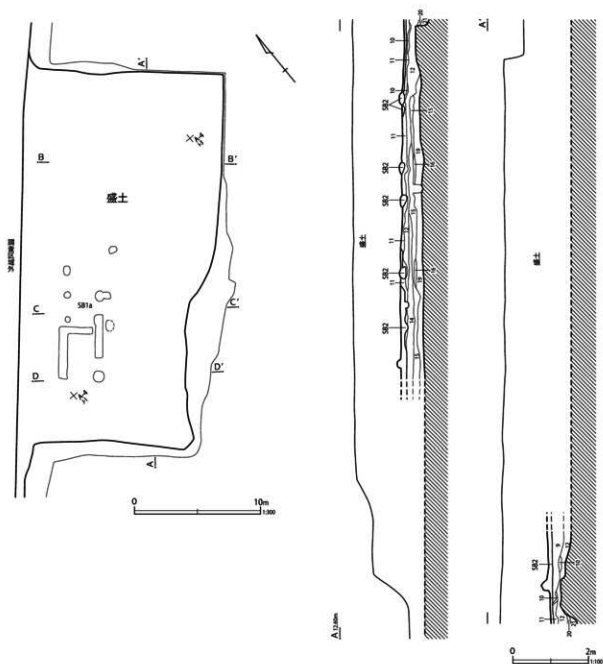
身舎の北西には幅0.9mの庇が取り付け付く。柱穴が認められたのはP 1のみである。径0.66m、深さ0.23mの略円形で、覆土は浅間A軽石を含む褐色砂質シルトである。上面にS13が置かれていた。その他はS 8～12の礫が礎石と考えられる。石材はいずれも角閃石安山岩である。

同一の面からは、建物の東側にP 2が検出されている。径0.7m、深さ0.23mの円形で、覆土は砂、粘土ブロック、礫を含む暗褐色シルトである。

第3号建物跡（第44図）

A 4-H 3・I 3グリッドに位置する。約10×20mの範囲で行った、盛土構築面からの掘り下げによって検出した。

第2号建物跡の1.3m下位、標高約97mの面か



第46図 盛土（1）

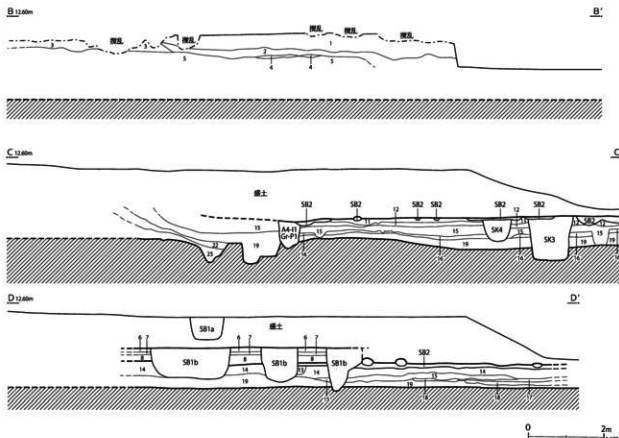
ら検出された。

第3号井戸跡と重複し、本建物跡が古い。

建物全体の規模は、桁行長658m、梁行長363mである。長軸方位はN—40°—Eである。3×2間の側柱建物跡と推定され、北西側に庇が取り付く。全体的に礎石が動いている、もしくは失われていると考えられ、推定される箇所を破線で示した。

身舎の規模は、桁行長56m、梁行長27m、平面積は1512㎡である。柱間は桁行、梁行ともほぼ半間（09m）、一間（18m）、一間半（27m）を基本としているが、それに合わない箇所も見られる。特に建物の西側は、部屋割りが細分されている可能性があるが、詳細は判然としない。

建物全体の地形は特に行われておらず、地山の平坦面に礎石が据え置かれている。礎石の下は暗



盛土

- 1 淡灰褐色土 砂質シルト 粘性ややあり しまりあり
- 2 灰褐色土 砂質シルト 炭化物粒子(φ1mm)含む 粘性なし しまりややあり
- 3 淡灰褐色土 砂質 粘性なし しまり強い
- 4 明灰褐色土 砂質シルト 砂多量 炭化物粒子(φ1~2mm)多量 粘性なし しまりややあり
- 5 暗灰褐色土 シルト As-a少量 粘性なし しまり強い
- 6 褐色土 シルト 瓦の破片を大量に混入する
- 7 暗褐色土 シルト 粘質ブロック(φ5cm)含む 粘性・しまり強い
- 8 暗褐色土 砂質 粘土ブロック(φ1cm)散置 粘性・しまりなし
- 9 褐色土 シルト 砂較少量 粘性ややあり しまりあり
- 10 灰褐色土 砂質 数粒大 一部に白色粒子(As-aカ)含む
- 11 褐色土

- 12 褐色土 砂質 粘土ブロック(φ1cm)含む 粘性・しまりなし
- 13 暗褐色土 砂質シルト 砂較多量 砂少量 粘性なし しまりややあり
- 14 褐色土 シルト 砂質 粘土ブロック(φ2~3cm)少量 粘性・しまり強い
- 15 灰褐色土 砂質シルト 砂較多量 灰褐色粘土少量 粘性・しまりなし
- 16 灰褐色土 砂質シルト 灰褐色シルト・砂含む 粘性・しまりややあり
- 17 褐色土 砂質 粘性・しまりなし
- 18 灰褐色土 シルト 砂較多量 粘土散置 粘性・しまりなし
- 19 灰褐色土 砂質 ラミナ状 粘性・しまりなし
- 20 暗褐色土 粘質シルト 砂較少量 粘性・しまりややあり
- 21 灰褐色土 砂質シルト 砂較多量 粘性・しまりややあり
- 22 赤褐色土 粘土・炭化物の凝土層
- 23 暗褐色土 砂質 炭化物少量 粘性なし しまりあり

第47図 盛土(2)

褐色の均一なシルト(基本土層Ⅲ層)になっており、盛土等の存在は不明である。

身舎の北西側には幅0.9m、南西側には幅1.2mの庇が取り付く。柱穴は確認できず、身舎と同様の礎石が据え置かれた状態であった。

また、第3号建物跡周辺には、建物跡に使用されている礫と同様の多くの礫が分布していた(第45図)。同建物跡との関係や、別の建物の存在も推定されたが、湧水による法面崩落が著しく、調査を断念せざるを得なかった。

(2) 盛土(第46・47図)

調査区の東側、A3-I10・J9・10・A4-G2・H1~3・I1~3・J1・2グリッドに位置する。北西側は調査区域外にかかる。第1号建物跡が上面に、第2号建物跡が盛土の中位に造られている。調査区内の全体の平面形は西側に乱れがあるが、ほぼ長方形である。基底面の規模は、長軸方向30.6m、短軸方向は東西で異なり、東側が15.2m、西側は13.2mである。長軸方位は建物と同じN-39°-Wで、足立、島田両屋敷跡の盛土とはほぼ同一である。19層の下面に水平堆積が認められることから、この面を構築面とした。現在

確認できる高さは18mほどである。覆土はシルト質、砂質で粘土ブロック、砂、炭化物、浅間A軽石を含む暗褐色、灰褐色土である。浅間A軽石(1873年)を含むことから、盛土の形成は18世紀第4四半期以降である。

築造工程は、各建物跡の建造に大きく関係している。第1段階は第2号建物跡の建造に伴うものである。褐色土、暗褐色土、灰褐色土を0.1~0.2mの厚さを一つの単位として、およそ0.6mの盛土を行っている。第2段階は、第1b号建物跡の建造に伴うものである。第2号建物跡構築面に、瓦の混土層(7層)、大型の粘土ブロックを含む埋め戻し土(8層)によって、約0.3mの造成を行っている。第3段階は、第1a号建物跡の建造に伴うものである。第1b号建物跡構築面に、暗灰褐色土を主体に、約0.8mの造成を行っている。

足立家、島田家両屋敷跡で見られたような山を起点とした盛土は確認できなかった。

(3) 土壌

土壌は5基で、第1・2号土壌が加藤家屋敷跡盛土の北東側、第3~5号土壌が盛土中の南東寄り、第2号建物跡の直下から検出されている。

第1号土壌 (第48図)

盛土の北東側、A4-G3・A4-H3グリッドに位置する。南側の第2号井戸跡と近接している。長軸5.53m、短軸1.21m、深さ0.65mで、溝状に長い隅丸長方形である。長軸の方位はN-58°-Eである。断面形は逆台形で、底面はほぼ平坦だが、南側で段を持って0.1mほど深くなっている。覆土は確認面に近い上層が炭化物、明褐色土を含む褐色土で自然堆積、その下層の大部分が焼土、炭化物、粘土の混土層で、埋め戻しである。

遺物は多く、東側の底面付近からまとまって出土した。

第2号土壌 (第48図)

盛土の北東側、A4-H3グリッドに位置する。北側の第2号井戸跡、南側の第3号井戸跡と近接

している。長軸1.36m、短軸1.26m、深さ0.26mで、不整な円形である。長軸の方位はN-32°-Eである。断面形は皿形で、底面はほぼ平坦である。覆土は焼土、炭化物、粘土を含む明灰褐色砂質土、青灰色粘土、灰褐色砂層で、大型のブロックを含むことから、埋め戻しの可能性がある。

第3号土壌 (第48図)

盛土の南東寄り、A4-J2グリッドに位置する。第2号建物跡の直下に広がる砂層の下から検出した。規模は長軸3.48m、短軸1.16m、深さ1.15mで、不整な長方形である。長軸の方位はN-33°-Eである。断面形は箱形、底面はほぼ平坦である。覆土は焼土、炭化物の互層で、間に炭化物、焼土、砂の混土層が挟まれている。埋め戻しである。西側に近接する第4号土壌と覆土、遺物が共通し、同様の性格を持つと考えられる。

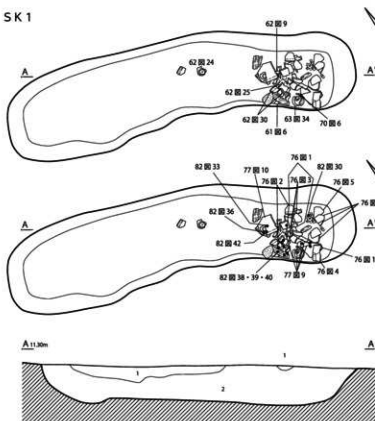
第4号土壌 (第48図)

盛土の南東寄り、A4-J2グリッドに位置する。第2号建物跡の直下に広がる砂層の下から検出した。東側に近接して第3号土壌が造られている。規模は長軸3.98m、短軸0.75m、深さ0.56mである。溝状の不整な長方形である。長軸の方位はN-42°-Eである。断面形はU字形で、底面はほぼ平坦である。覆土は焼土、炭化物の互層で、間に炭化物、焼土、砂の混土層を挟んだ埋め戻し土である。東側に近接する第3号土壌と、覆土、遺物が共通し、同様の性格を持つと考えられる。

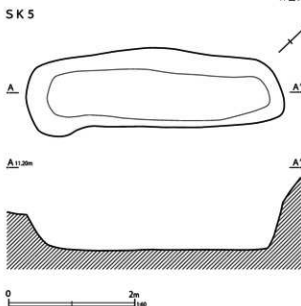
第5号土壌 (第48図)

盛土のほぼ中央、A4-I1・2グリッドに位置する。位置的には第1・2号建物跡と重なるが、検出面がそれより1m下位であるため、直接の重複関係にはない。規模は長軸4.03m、短軸1.23m、深さ0.75mである。不整な隅丸長方形である。長軸の方位はN-41°-Eである。断面形は逆台形で、底面はほぼ平坦である。覆土は調査時に断面が崩落してしましたが、明灰褐色土を主体とする自然堆積であった。

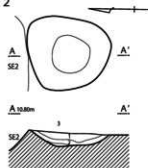
SK 1



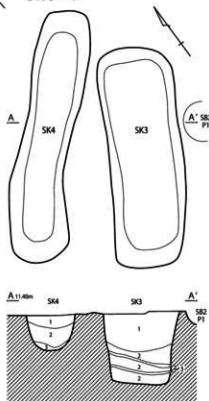
SK 5



SK 2



SK 3・4



第1号土層

- 1 明灰褐色土 砂質 炭化物粒子(φ2~3mm)・明褐色土少量
粘性・しまりあり
2 黒褐色土 粘土・炭化物の凝土層 砂質 焼土ブロック(φ1~3cm)
・炭化物ブロック(φ1~3cm) 多量
粘性あり しまりややなし

第2号土層

- 1 明灰褐色土 砂質 焼土粒子(φ2~5mm)・炭化物粒子(φ3~5mm)
少量 粘土ブロック(φ1~2cm) 含む
粘性ややあり まりあり
2 青灰色土 粘土層 炭化物ブロック(φ2~3cm) やや多量 焼土粒子
(φ3~20mm) 少量 赤褐色顔料混む 青灰色粘土多量
粘性・しまりやや強い
3 灰褐色砂 砂層 砂粒(φ1~2mm) 多量 褐色土微量
粘性・しまりなし

第3・4号土層

- 1 黒褐色土 炭質・炭化(材)主体 焼土ブロック多量 しまり弱い
2 赤褐色土 焼土主体 炭化物多量 しまり弱い
3 赤褐色土 炭化物・焼土・砂の凝土層

第48図 土層

(4) 井戸跡

井戸跡は3基検出され、いずれも盛土の北東側に分布する。

第1・3号井戸跡 (第49図)

A4-H3・4グリッドに位置する。第3号井戸跡の掘り方を北東側に拡張して第1号井戸跡が掘り込まれている。第1号井戸跡の内側にはコンクリートが入れられており、ごく最近まで使用されていたことが分かる。

第1号井戸跡の井戸筒を中心とすると、全体の掘り方の規模は長軸43m、短軸30mの不整形円形である。断面形は上段が鍋底形、下段が長径33m、短径25mの筒形である。確認面から20m程度まで掘削したが底面には達せず、更に1mのピンボールを刺し込んだが底面には至らなかった。安全上の配慮からこの時点で下層の調査を断念した。

掘り方の覆土は、炭化物、焼土、砂を含む暗灰褐色、暗褐色、暗灰色の粘質土である。5・6層は暗灰色土で、第3号井戸跡の掘り方と考えられる。

第1号井戸跡の井筒は、第3号井戸跡の井筒に接して設けられている。長径0.76m、短径0.72mの円形である。幅0.1m、現存長1.1mの板材24枚が、3段の箍によって留められている。更に、内側にコンクリートが入れられている。井筒の中は粘土、砂、小礫を多く含む暗青灰色粘土によって埋め戻されていた。

第3号井戸跡の井戸枠は、長軸20m、短軸1.65mの方形である。幅0.1m、厚さ0.02mの縦板を横板によって抑える構造になっている。縦板は長さ0.9mほどが遺存していた。横板は太さ0.1mの角材で、互い違いになるように組まれている。井筒の中は暗灰色である。

遺物は、第1層を中心に出土した。

第2号井戸跡 (第49図)

A4-H3グリッドに位置する。全体の掘り方

の規模は長径31m、短径26mの不整形円形である。断面形は、上段が大きく開き、下段は長径24m、短径20mの筒形である。確認面から20m程度まで掘削したが底面には達せず、さらに1mのピンボールを刺し込んだが底面には至らなかった。安全上の配慮から、この時点で下層の調査を断念した。掘り方の覆土は、炭化物、焼土、砂を含む灰褐色、暗灰褐色、褐灰色の粘質シルト、砂、粘土で、埋め戻しである。

井筒は、径0.65mの円形である。幅0.22m、厚さ2cm、現存長0.96～1.06mの板材9枚が、2段の箍によって留められている。更に、この内側の上段には長さ0.5mの井筒が遺存していた。その内側に、更にコンクリートで井筒が造られていた。井筒の中は、炭化物を含むボンボンの灰褐色土によって埋め戻されていた。中からは、竹の破片が多く出土している。

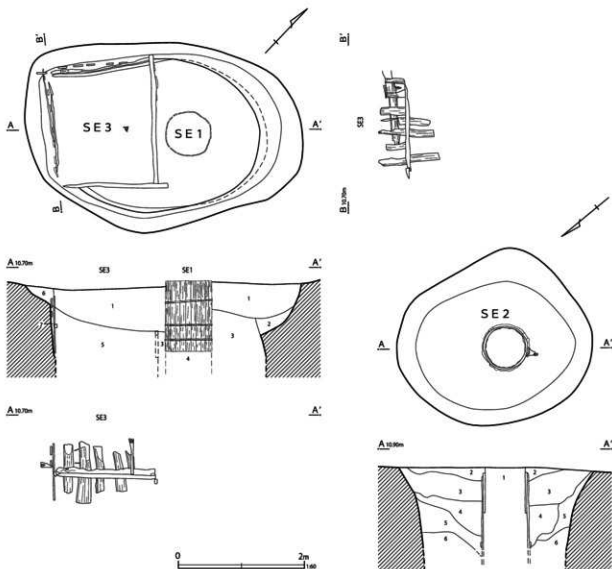
外側の板材の下端付近の内面には底板の痕跡が認められることから、樽材転用の可能性がある。

(5) 加藤家屋敷跡出土の遺物

陶磁器・土器 (第50～68図) 加藤家屋敷跡の遺構、盛土からは大量の陶磁器、土器、瓦、金属器が出土している。

第1号建物跡 (第50～52図) 1～60は第1号建物跡出土の陶磁器、土器である。1・2・4～13・18・19は肥前系磁器である。1は広東の鉢である。焼継ぎが施され、底面に「二三四」の朱書きが施されている。2・3は端反碗で、小広東である。5は梅樹文の粗製の碗である。7は小丸碗、8は筒形碗である。両者とも矢羽根文。11は大皿の破片である。釘書きが一字で、辺の一部と作りの「至」が確認できる。12は輪花皿である。蛇の目高台で、高台が高い。13は段重の蓋である。19の筒形碗の口縁は軸が斑である。

3・14～22は瀬戸系磁器である。15は端反碗の蓋である。21は琴弾きである。琴の部分に鉄軸が施されている。22は球形の体部の水滴で、上に観



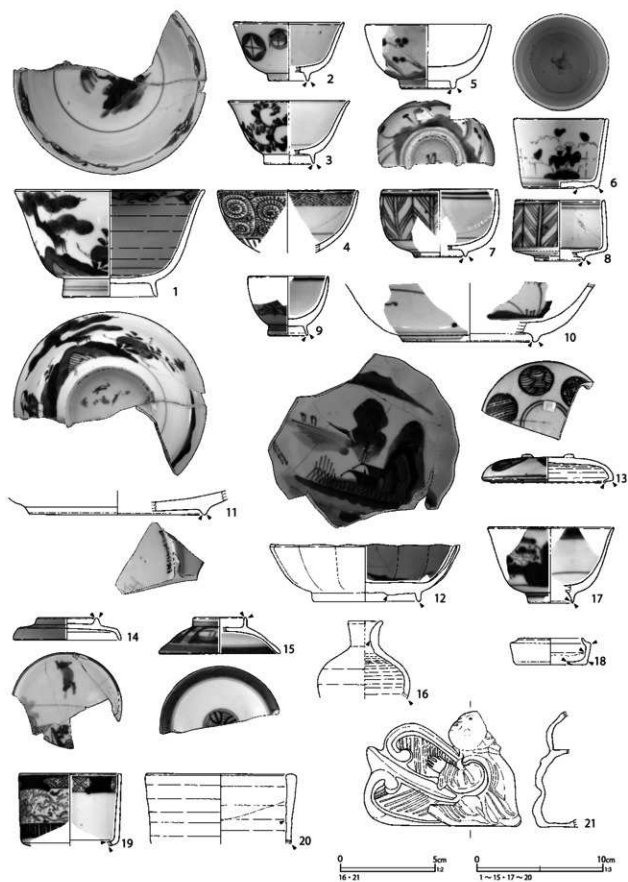
第1・3号井戸跡

- 1 暗灰褐色土 粘質 砂粒・炭化物粒子・礫 (φ2~5 cm) 少量
粘性あり しまり強い
- 2 暗褐色土 炭化物粒子・焼土粒子多量 粘性・しまり強い
- 3 暗灰色土 粘質 砂粒多量 炭化物粒子・礫 (φ2~5 cm) 少量
粘性あり しまり強い
- 4 暗青灰色土 粘土・小礫 (φ1~2 cm) 多量 炭化物粒子・焼土粒子少量
粘性・しまりややあり
- 5 暗灰色土
- 6 暗灰色土
- 7 暗灰色土

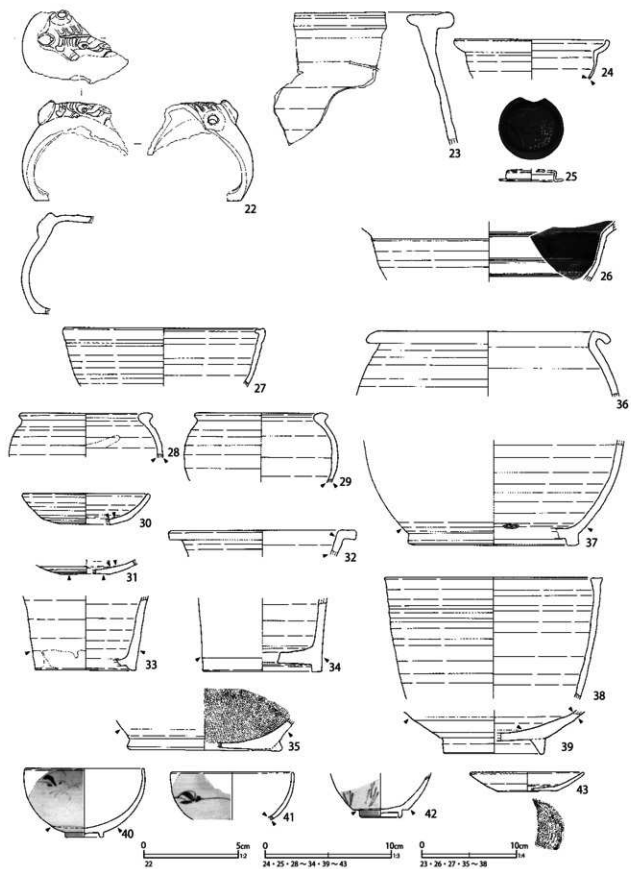
第2号井戸跡

- 1 灰褐色土 粘質シルト 炭化物粒子多量 粘性ややあり
しまり非常に強くボソボソ 埋め戻し
- 2 灰褐色土 粘質シルト 炭化物粒子多量 焼土粒子少量
粘性・しまりややあり 埋め戻し
- 3 暗灰褐色土 粘質シルト 炭化物粒子多量 焼土粒子少量
粘性ややあり しまりあり 埋め戻し
- 4 暗灰褐色土 砂質シルト 炭化物粒子微量 粘性・しまり弱い
- 5 灰褐色砂 砂質 炭粒多
- 6 灰褐色土 粘土 炭化物粒子微量 粘性強い しまりあり

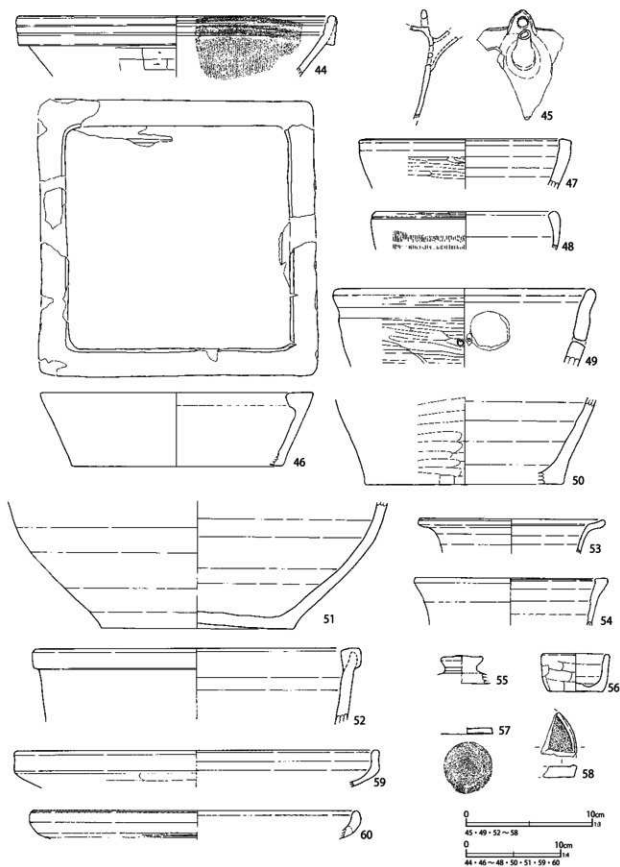
第49図 井戸跡



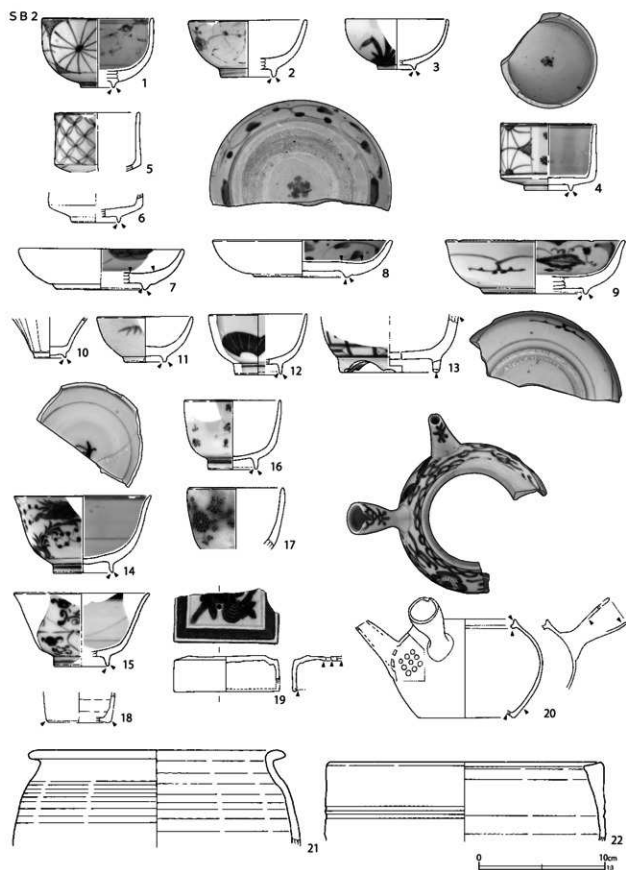
第50図 第1号建物跡出土遺物（1）



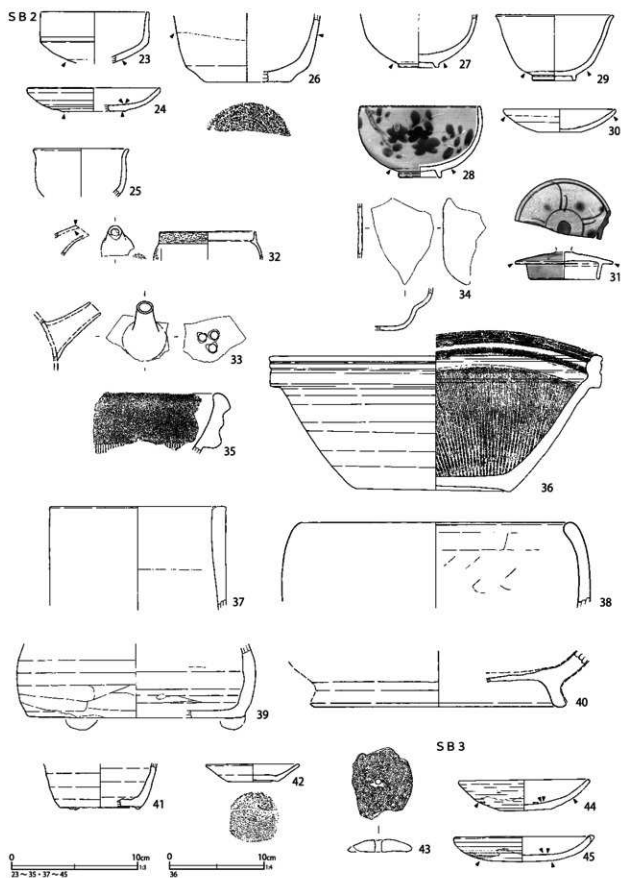
第51図 第1号建物跡出土遺物(2)



第52図 第1号建物跡出土遺物 (3)



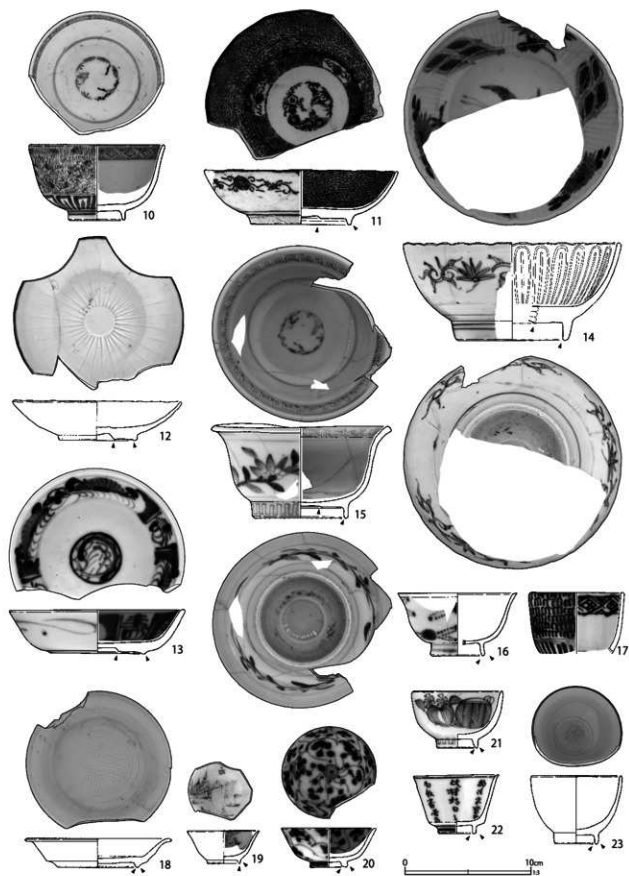
第53図 第2号建物跡出土遺物



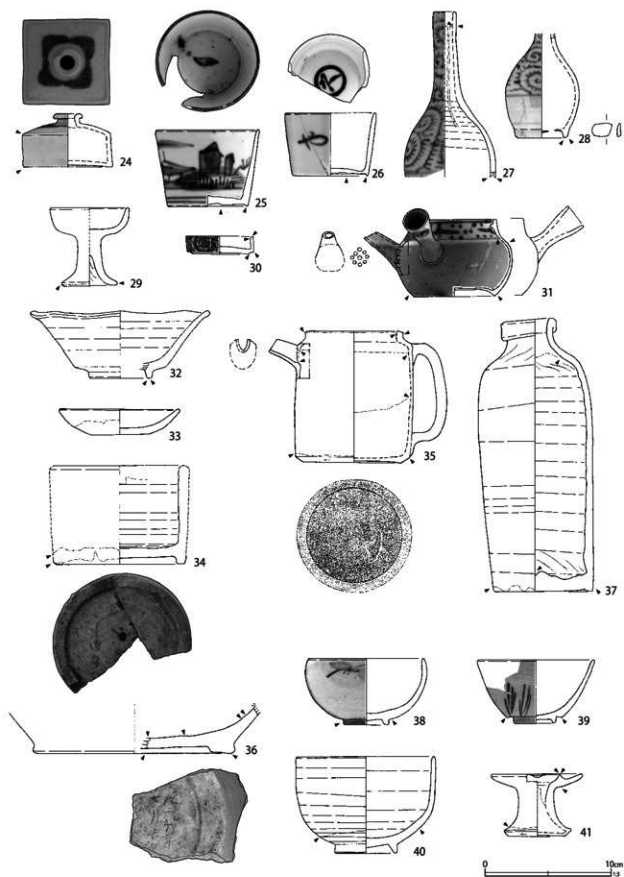
第54図 第2・3号建物跡出土遺物



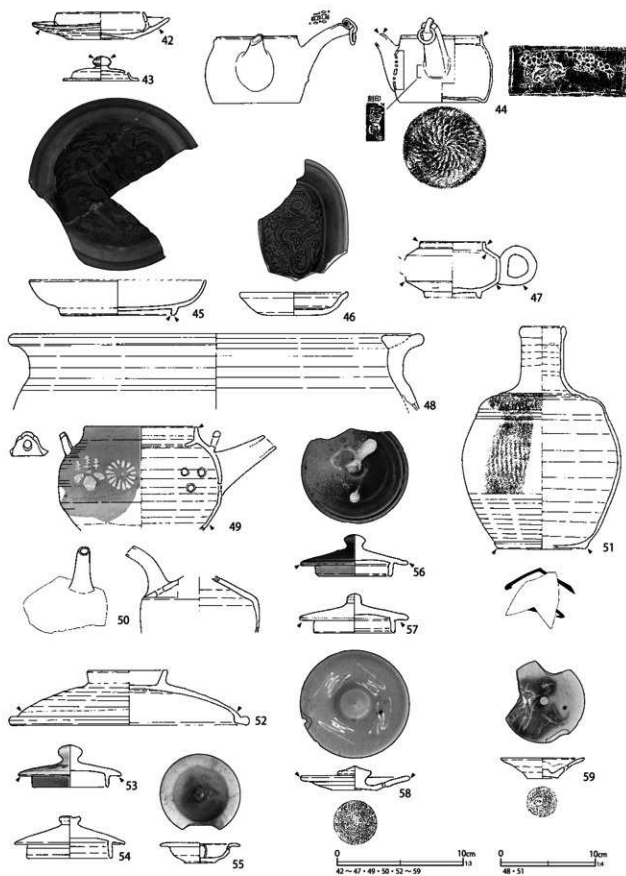
第55图 盛土出土遺物(1)



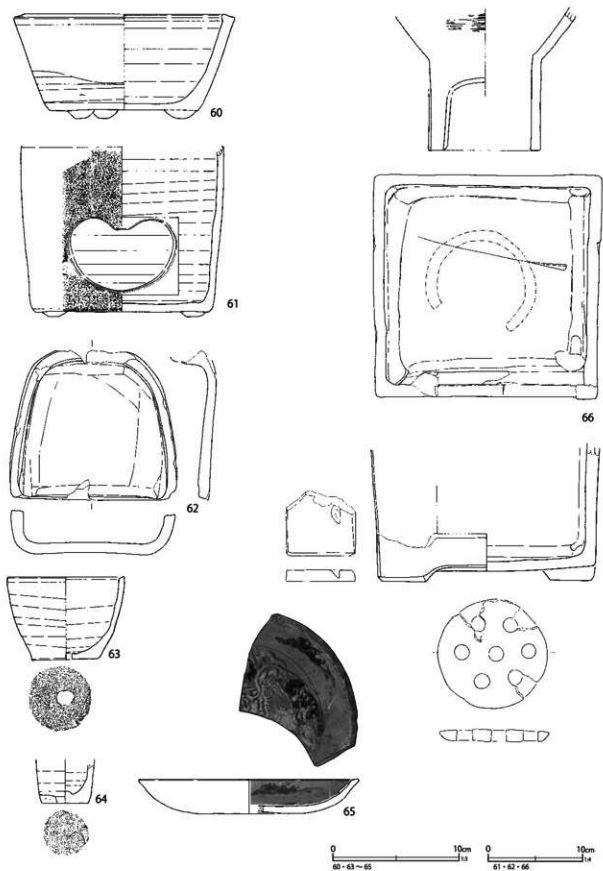
第56図 盛土出土遺物 (2)



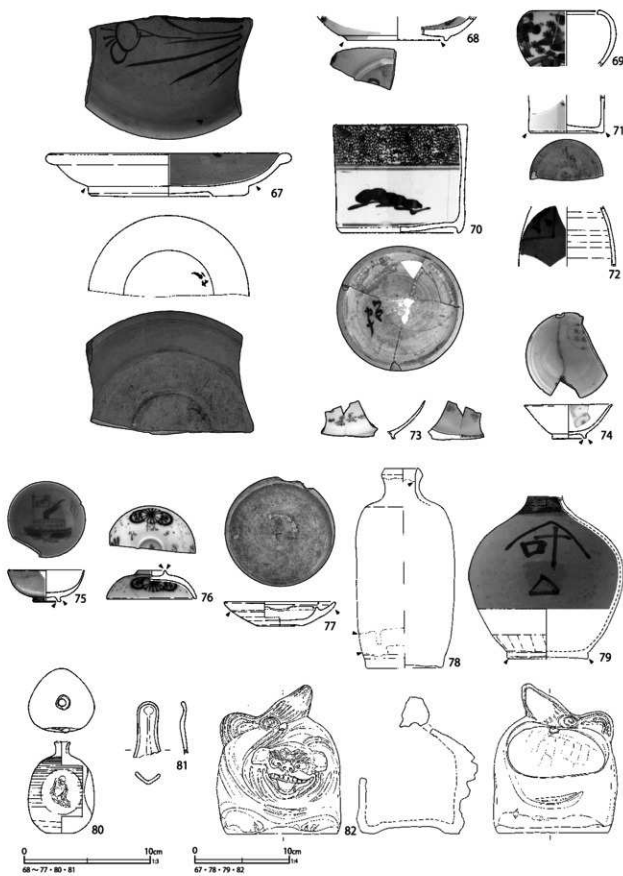
第57図 盛土出土遺物（3）



第58図 盛土出土遺物 (4)

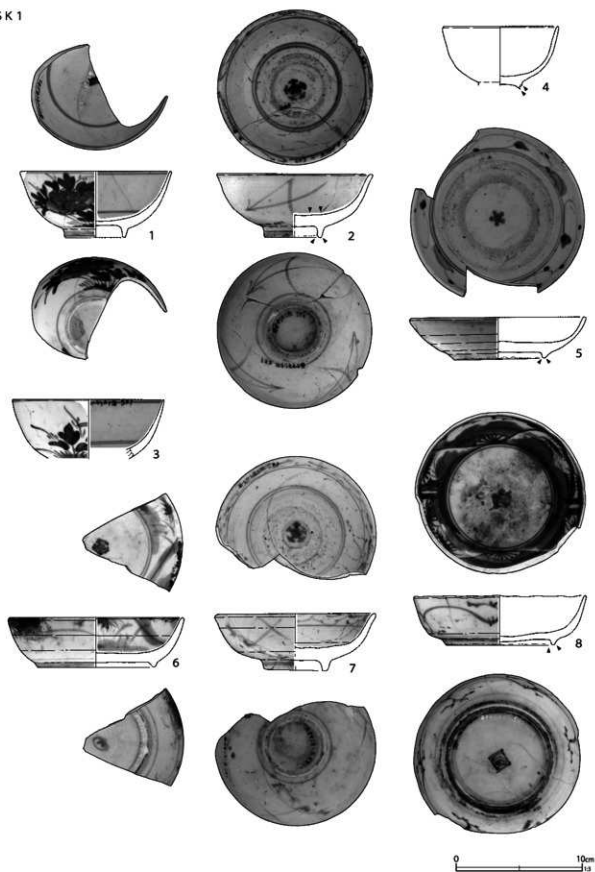


第59図 盛土出土遺物 (5)

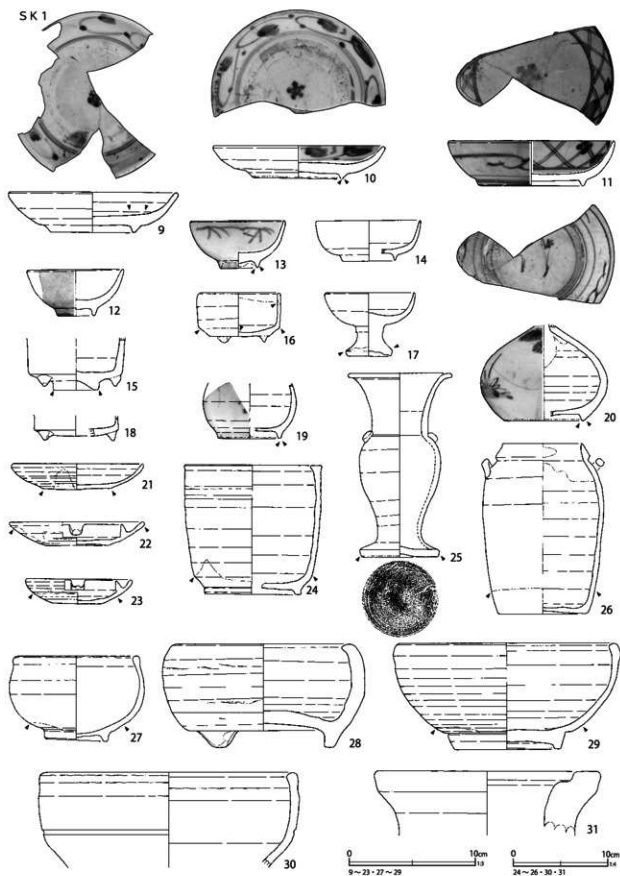


第60図 盛土出土遺物 (6)

SK 1

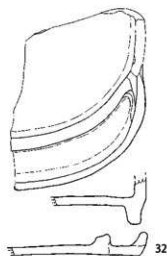


第61図 土曜出土遺物 (1)

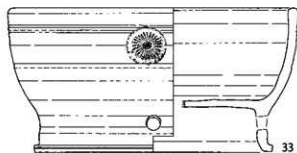


第62図 土曜出土遺物 (2)

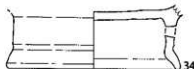
SK 1



32

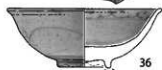
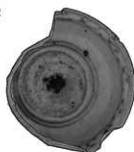


33



34

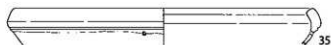
SK 2



36



39



35



37

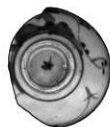


38

SK 3



40



44



41



45



42



47



49



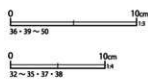
50



46

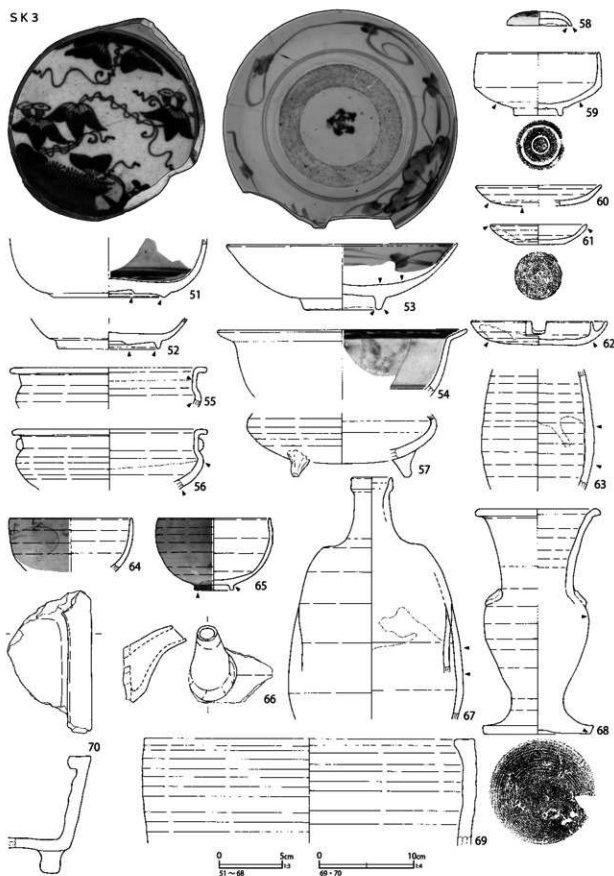


48

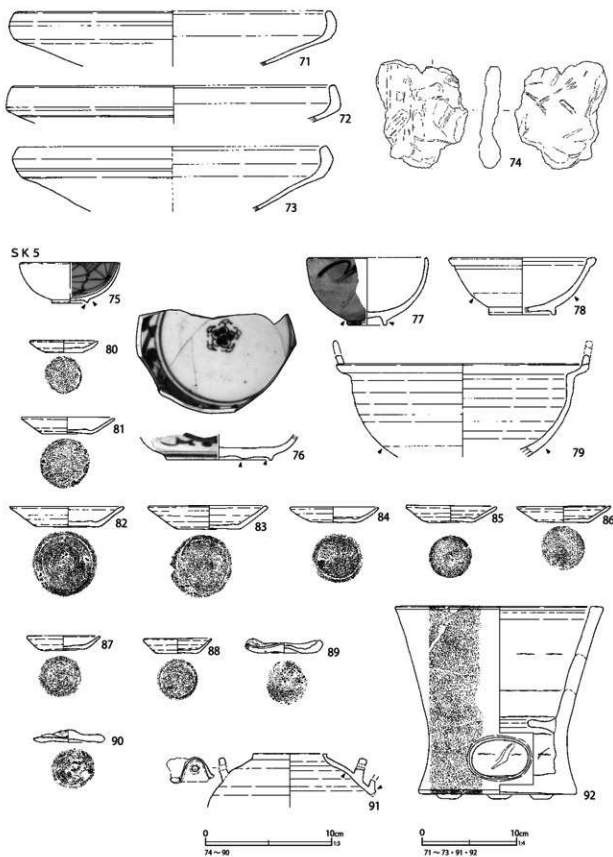


第63図 土曜出土遺物 (3)

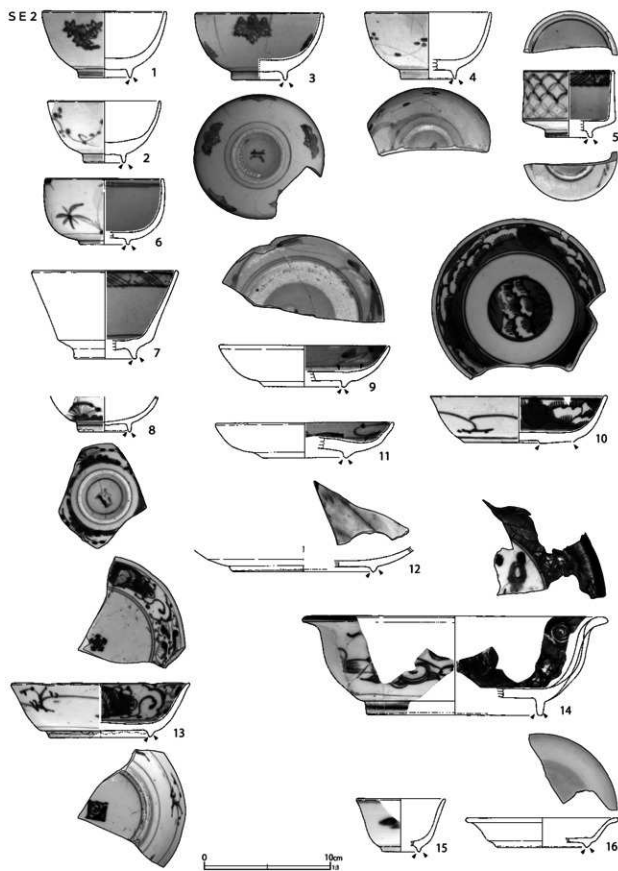
SK3



第64図 土曜出土遺物 (4)

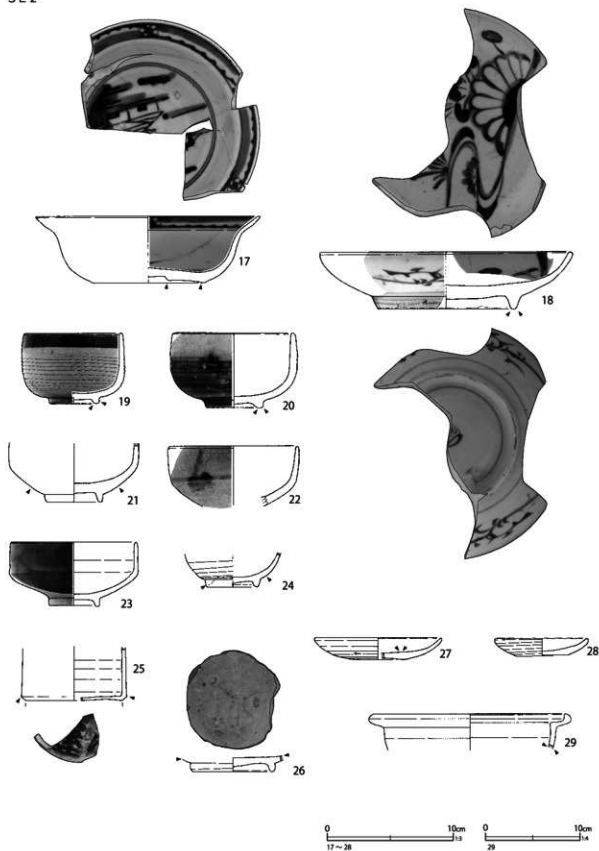


第65図 土曜出土遺物 (5)



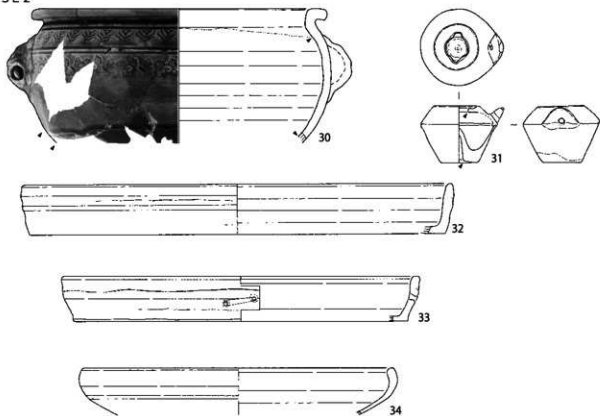
第66図 井戸跡出土遺物（1）

SE 2

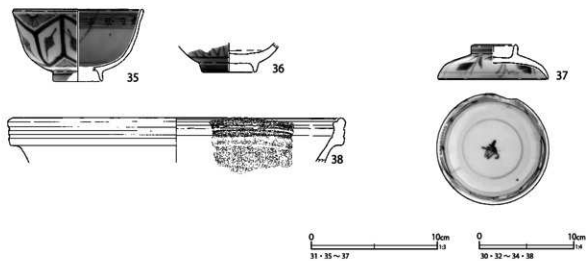


第67図 井戸跡出土遺物（2）

SE 2



SE 3



第68図 井戸跡出土遺物（3）

第19表 第1号建物跡出土遺物観察表 (第50~52図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	磁器	鉢	150	8.5	(7.4)	1K	50	良好	灰白	掘り方 肥前 焼き抜き 染付 松花人物文 19C前	16-1
2	磁器	碗	(8.6)	4.6	(3.0)	1K	25	良好	灰白	掘り方 肥前 染付 端反 丸文(福寿)	
3	磁器	碗	(9.6)	5.0	(3.9)	1K	25	良好	灰白	Ph7 瀬戸 染付 端反 草花文 19C初	
4	磁器	碗	(11.0)	[4.9]	—	1K	15	良好	灰白	掘り方 肥前 染付 胡唐草 四方摺 19C初	
5	磁器	碗	(9.7)	5.1	4.1	1K	45	良好	灰白	掘り方 肥前 染付 梅花文 19C初	
6	磁器	猪口	7.2	5.5	5.7	K	100	良好	灰白	掘り方 肥前 染付 蛇の目 草花文 宝 19C初	16-2
7	磁器	碗	(8.9)	5.3	(4.0)	1K	20	良好	灰白	飯P No.9 A3-11 肥前 染付 矢羽根文	
8	磁器	碗	(7.0)	4.8	(3.8)	1K	20	良好	灰白	肥前 染付 矢羽根文 19C初	
9	磁器	杯	(6.2)	4.7	3.0	1K	35	良好	灰白	掘り方 肥前 染付 花鳥 19C前	
10	磁器	皿	—	[4.6]	(10.4)	1K	5	良好	灰白	掘り方 肥前 染付 唐草 18C末	
11	磁器	大皿	—	[1.9]	(14.0)	1K	5	良好	灰白	掘り方 肥前 染付 松 釘書「」18C末	16-3
12	磁器	皿	14.8	4.5	8.2	1K	70	良好	灰白	掘り方 肥前 輪花 染付 山水家屋文 19C前	
13	磁器	蓋	(9.0)	2.0	—	I	25	良好	灰白	S12 肥前 染付 丸文 19C初	
14	磁器	蓋	(8.0)	1.8	つまみ径 4.7	K	60	良好	灰白	掘り方 瀬戸 口紅 染付 19C前	
15	磁器	蓋	(9.6)	2.9	つまみ径 4.0	K	45	良好	灰白	掘り方 瀬戸 染付 施軸 端反 広末碗の蓋 福寿字、丸文(舟人物・胡干・遠山文) 雷文 葉底変型字	
16	磁器	瓶	1.8	[4.1]	—	K	90	良好	灰白	C-C 瀬戸 御神酒徳利 染付 19C前	16-4
17	磁器	碗	(9.8)	6.0	(3.6)	K	20	良好	灰白	掘り方 瀬戸 染付 端反 山水 19C前	
18	磁器	合子	(5.0)	2.1	(5.4)	HK	30	良好	灰白	掘り方 筒形 施軸 内面紅付着 肥前 19C前	
19	磁器	碗	(8.0)	[5.7]	—	1K	25	良好	灰白	一括 肥前 色絵 牡丹 四方摺 18C末	
20	磁器	香炉	(11.2)	[5.6]	—	H1	15	良好	灰白	S24 瀬戸 青磁 19C前	
21	磁器	水滴	—	[6.1]	—	K	45	良好	灰白	掘り方 瀬戸 鉄軸 染付 琴弾き童子	16-4
22	磁器	水滴	—	—	—	—	30	良好	灰白	掘り方 瀬戸 施軸 酸化コバルト 親子亀 内面焼き抜き 長さ47cm 幅3.6 高さ53cm 厚さ0.4cm	
23	陶器	甕	—	[14.0]	—	E H 1 K	5	良好	灰赤	掘り方 常滑 自然釉	
24	陶器	行平鍋	(12.0)	[3.1]	—	I	5	良好	灰白	掘り方 産地不明 内面鉄軸	
25	陶器	蓋	5.1	[1.0]	—	I	95	良好	赤灰	掘り方 萬古 金泥書き 山水文 急須	
26	陶器	鉢	—	[6.4]	—	I	5	良好	にぶい橙	飯P No.8 肥前 三鳥手鉢 菊印判	16-4
27	陶器	片口鉢	(21.2)	[6.2]	—	1K	5	良好	淡黄	掘り方 瀬戸美濃 灰軸 内面赤色付着物	
28	陶器	小型甕	(10.2)	[3.5]	—	1K	20	良好	灰白	掘り方 瀬戸美濃 柿軸 灰軸流し	
29	陶器	小型甕	(10.2)	[5.5]	—	E I	25	良好	灰白	掘り方 瀬戸美濃 柿軸 灰軸流し	
30	陶器	皿	(9.8)	2.4	(4.2)	1K	20	良好	灰白	B-B 瀬戸美濃 灯明皿 鉄軸 重ね焼き痕 19C前	
31	陶器	皿	—	[1.1]	(4.0)	1K	25	良好	灰白	掘り方 瀬戸美濃 灯明皿 鉄軸 重ね焼き痕	16-4
32	陶器	植木鉢	(14.6)	[2.0]	—	1K	25	良好	灰白	飯P No.9 瀬戸美濃 灰軸	
33	陶器	瓶	—	[5.9]	(8.0)	H 1 K	20	良好	灰白	C-C 瀬戸美濃 灰軸 五合徳利	
34	陶器	植木鉢	—	[5.8]	(9.4)	E 1 K	25	良好	灰白	掘り方 瀬戸美濃 灰軸	

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
35	陶器	播鉢	—	[3.5]	(16.0)	IK	25	良好	灰白	掘り方 備前 外面鉄軸 播目13条	16-5
36	陶器	甕	(22.8)	[6.9]	—	K	10	良好	黄灰	C-C' D-D' 瀬戸美濃 鉄軸 19C前	
37	陶器	こね鉢	—	[11.2]	(16.8)	H1 K	15	良好	灰白	掘り方 瀬戸美濃 灰軸 両面トチン痕	
38	陶器	甕	(23.0)	[12.9]	—	IK	10	良好	淡黄	掘り方 瀬戸美濃 鉄軸 半銅甕	
39	陶器	片口鉢	—	[3.4]	(7.8)	IK	30	良好	灰白	掘り方 瀬戸美濃 灰軸外面 見込み軸だまり	
40	陶器	碗	(9.3)	5.5	3.0	IK	25	良好	灰白	京信 灰軸 鉄絵 18C	
41	陶器	碗	(9.6)	[3.8]	—	IK	15	良好	灰白	掘り方 京信 灰軸 鉄絵 草花文	
42	陶器	碗	—	[3.5]	3.2	IK	30	良好	灰白	Pt7 京信 灰軸 小杉碗 内面ビン跡 19C 初	
43	土器	かわらけ	(8.8)	1.5	(4.5)	ACHIK	25	普通	橙	掘り方 煤付着 左回転	
44	陶器	播鉢	(33.2)	[6.4]	—	IK	5	良好	橙	S12一面 堺明石 播目9条1単位	
45	陶器	土甌	—	[8.6]	—	EIK	5	良好	灰白	C-C' 産地不明 青土甌 被熱	16-5
46	土器	火鉢	—	[7.8]	—	H1 K	30	普通	褐灰	掘り方 軟質瓦質角火鉢 被熱 煤付着	
47	土器	火鉢	(20.0)	[5.3]	—	ACHIK	10	普通	灰白	掘り方 硬質瓦質丸火鉢	
48	土器	火鉢	(19.0)	[4.0]	—	AC1	20	普通	灰黄	掘り方 硬質瓦質丸火鉢 煤付着	
49	土器	火鉢	(20.0)	[6.1]	—	CHIK	15	普通	黄灰	掘り方 内面煤付着 被熱 瓦質	
50	土器	火消壺	—	[9.2]	(20.6)	ACHI	10	普通	黄灰	掘り方 全体に煤 内面口クロナデ	
51	土器	火消壺	—	[13.5]	(20.5)	DIK	20	普通	橙	B-B' 煤付着 底面砂目	
52	土器	植木鉢	(25.4)	[6.0]	—	ACHI	15	普通	褐灰	掘り方 瓦質 内外面口クロナデ	
53	土器	植木鉢	(14.6)	[2.7]	—	IK	5	良好	赤	D-D'	
54	土器	植木鉢	(15.0)	[4.7]	—	I	25	普通	灰白	掘り方2面 瓦質 外面煤付着	
55	土器	蓋	つまみ径 3.4	[2.2]	—	AIK	80	普通	灰白	内外面煤付着 火消壺の蓋	16-6
56	土器	兼焼 円板	(5.0)	3.0	4.4	ACHIK	90	普通	淡赤橙	掘り方 被熱 内面煤付着	
57	土器	円板	—	[0.5]	—	AC1K	100	普通	にぶい橙	假P No.7 転用土器円板 左回転かわらけ	
58	土器	蓋	—	[1.1]	—	HI	5	普通	にぶい橙	掘り方 焼坂壺 凹形 布目 煤付着	
59	土器	焙焼	(38.0)	[3.9]	(38.4)	ACDHI K	5	普通	浅黄橙	Pt No.7 丸底 土師質	
60	土器	焙焼	(34.2)	[4.0]	—	AHIK	5	普通	橙	掘り方 丸底 土師質 内外面煤付着	

第20表 第2・3号建物跡出土遺物観察表 (第53・54図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	磁器	碗	(8.6)	5.5	(2.5)	—	25	良好	白	肥前 染付 菊花撃ぎ 18C末	16-7
2	磁器	碗	(9.2)	4.5	(4.0)	H	45	良好	白	焼土面 肥前 染付 被熱 梅樹文 18C末 →19C初	
3	磁器	碗	(8.0)	4.0	(2.8)	K	30	良好	白	A3-I2 No.91 肥前 染付 唐草文 18C後	16-8
4	磁器	碗	(7.5)	5.3	3.6	K	80	良好	白	A3-I2 No.45 肥前 染付 菊花撃ぎ 格子文	
5	磁器	碗	(6.4)	[4.7]	—	—	30	良好	白	肥前 染付 七宝撃ぎ文 18C末か	16-9
6	磁器	筒形碗	—	[2.3]	(3.7)	K	20	良好	白	A3-I2 No.211 肥前 染付 菊花文 19C初	
7	磁器	皿	(12.9)	3.2	(7.0)	—	10	良好	灰白	A3-I2 No.228 肥前 内面輪走 染付 19C初	16-10
8	磁器	皿	(14.0)	2.9	(6.9)	—	—	良好	灰白	肥前 被熱 輪花 染付 草花文 18C末	
9	磁器	皿	(14.0)	4.2	(7.8)	—	30	良好	灰白	B-B' 肥前 染付 草花文 雪持笹 18C末	
10	磁器	杯	—	[3.1]	2.4	H	35	良好	白	A-A' 肥前 角型 白磁 19C3/4	
11	磁器	杯	(7.4)	3.6	(2.9)	—	35	良好	白	肥前 染付 笹文 雲付紅 19C初	
12	磁器	杯	(7.6)	4.8	(3.6)	K	45	良好	白	肥前 染付 屈文 19C前	
13	磁器	植木鉢	—	[4.4]	(7.6)	K	30	良好	白	瀬戸 染付 幾何学文 花文 19C前	

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
14	磁器	碗	(106)	6.1	(4.6)	—	40	良好	白	A3-I2 瀬戸 染付 太湖石 草花文 見込 不明 19C前	16-11
15	磁器	碗	(107)	5.8	(4.2)	—	20	良好	白	A3-II No.35 瀬戸 染付 雪芝文 19C初	
16	磁器	湯呑碗	(7.5)	5.5	(3.6)	H	45	良好	—	A-A' 瀬戸 染付 草文 漢詩文 18C中	
17	磁器	碗	(7.6)	4.9	—	H	40	良好	明緑灰	A3-J1 瀬戸 輪花 青磁 口金 梅樹折枝 文 19C前	
18	磁器	霽唐利	—	[2.4]	(4.7)	K	30	良好	白	A3-II No.34 瀬戸 底部無軸	
19	磁器	水滴	—	2.8	—	—	—	良好	白	C-C' 瀬戸 長軸8.2cm 短軸4.3cm 染付 雷文 流水紅葉文 19C	16-12
20	磁器	急須	(8.0)	[7.8]	(7.2)	—	55	良好	白	盛土A3-I2 瀬戸 染付 雲 朝顔 19C後	
21	陶器	甕	(19.1)	[7.6]	—	IK	10	良好	灰白	D-D' 瀬戸美濃 灰釉 緑軸かけ流し 19C前	
22	陶器	甕	(21.8)	[6.4]	—	EIK	10	良好	にぶい黄橙	A-A' 半割甕 瀬戸美濃 鉄軸 19C初	
23	陶器	碗	(8.4)	[4.0]	—	IH	20	良好	灰白	瀬戸美濃 せんじ 灰軸 19C初	
24	陶器	皿	(10.4)	1.9	(5.0)	HK	30	良好	灰	瀬戸美濃 灯明皿 鉄軸 19C初	16-13
25	陶器	碗	(7.4)	[3.8]	—	H	15	良好	灰	萩 ビラ掛け 灰軸 19C前	
26	陶器	甕	—	[5.4]	(6.5)	K	40	良好	灰白	B-B' 瀬戸美濃 鉄甕 鉄軸	
27	陶器	碗	—	[4.2]	3.1	—	70	良好	褐灰	A3-I2 No.147 京信 被熱 灰軸 19C初	
28	陶器	碗	9.4	5.7	3.4	—	95	良好	淡黄	京信 灰軸 色絵 梅樹文 19C初	
29	陶器	碗	(9.2)	5.2	3.4	—	60	良好	灰白	京信 内外面施軸 灰軸 貫入 19C前	16-14
30	陶器	皿	(8.8)	1.8	(3.5)	—	45	良好	灰白	京信 灰軸 灯明皿 ペン痕 19C前	16-15
31	陶器	蓋	(5.4)	[2.2]	—	K	50	良好	—	京信 鉄絵 緑軸 ちらし 19Cか	17-1
32	陶器	急須	—	[2.3]	—	—	5	良好	暗赤褐	萬古系 注口 端部のみ灰軸 19C前	17-2
33	陶器	土瓶	—	[4.6]	—	K	5	良好	灰白	萬古系 19C前	
34	陶器	土瓶	—	—	—	IK	5	良好	灰白	長軸5.9cm 短軸5.4cm 厚さ0.3cm 青土瓶	
35	陶器	播鉢	—	[4.8]	—	IK	5	良好	にぶい褐	笠間 柿軸 19C前	
36	陶器	播鉢	35.0	14.4	16.4	HIK	60	良好	赤褐	A3-II 埴明石 樋目10条 見込樋目まばら	
37	土器	不明	(13.6)	[8.2]	—	AIK	20	普通	橙	鉢か内面赤彩	17-3
38	土器	丸火鉢	(21.6)	[6.8]	—	AH1K	10	普通	にぶい橙	A3-I2 No.8 土師質 煤付着	
39	土器	火鉢	—	[5.8]	(16.9)	ACI	20	普通	灰黄褐	A-A' 硬質瓦質 内外面煤	
40	土器	火鉢	—	[4.4]	(20.0)	ACHI	25	普通	赤	K7トレンチ 脚付火鉢 被熱 赤化 内面剥離	
41	土器	植木鉢	—	[3.2]	(6.4)	LK	30	普通	灰白	瓦質 内外面クロコナデ	
42	土器	かわらけ	(7.4)	[1.4]	4.0	ACHI K	50	普通	にぶい橙	石回転	17-3
43	土製品	紡錘車	—	—	—	AC	80	不良	黒	全体に煤付着 長軸5.2cm 短軸4.8cm 厚さ最大1.0cm	
44	陶器	皿	10.1	2.4	3.9	K	100	良好	にぶい褐	瀬戸美濃 灯明皿 鉄軸 軸はげ 19C初	
45	陶器	皿	10.6	2.0	4.8	—	75	良好	にぶい褐	瀬戸美濃 灯明皿 鉄軸 19C初	

第21表 盛土出土遺物観察表 (第55~60図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	磁器	鉢	13.5	5.6	7.0	—	95	良好	白	肥前 焼き継ぎ 染付 菖蒲「六七」底面朱書 19C前	17-4
2	磁器	鉢	17.4	7.8	10.5	K	95	普通	灰白	肥前 染付 山水樓閣文 19C前	17-5
3	磁器	瓶	1.6	16.3	4.8	H K	80	良好	灰白	一面 肥前 御神酒徳利 染付 蛸唐草文 19C中	17-6
4	磁器	碗	10.5	5.6	4.1	I	90	普通	灰白	瀬戸「牡丹花之富貴者」銘 19C前	17-7
5	磁器	八角鉢	12.5	5.4	5.8	—	95	良好	白	瀬戸 染付 草文 19C前	17-8
6	磁器	碗	10.4	6.0	3.8	K	65	良好	灰白	瀬戸 酸化コバルト 雲芝文 寿 19C	17-9
7	磁器	碗	—	[31]	4.1	—	45	普通	灰白	瀬戸 焼き継ぎ コバルト 朱書「六七三」	
8	磁器	碗	—	[48]	3.8	I	30	普通	灰白	瀬戸 染付 底「十三口口」	
9	磁器	饗徳利	(3.0)	[180]	—	K	70	良好	灰白	瀬戸 染付 草花文 雷文 19C前	17-10
10	磁器	碗	10.5	6.0	4.2	H K	65	良好	灰白	瀬戸 酸化コバルト 型紙刷り 19C中	17-11
11	磁器	皿	(15.1)	4.3	7.8	H I K	35	良好	灰白	瀬戸 輪花 コバルト 型紙刷り 19C後	
12	磁器	皿	13.1	3.1	5.8	K	75	良好	灰白	瀬戸 輪花 型押菊皿 19C中	
13	磁器	皿	13.7	3.4	7.5	H I	70	良好	灰白	瀬戸 酸化コバルト 草花文 19C前	17-12
14	磁器	鉢	16.8	7.7	(8.4)	I K	50	良好	灰白	肥前 焼き継ぎ 染付 菊(折枝) 龍 19C前	17-13
15	磁器	鉢	13.5	7.1	7.2	K	80	良好	灰白	瀬戸 焼き継ぎ 酸化コバルト「口九」朱書 19C前	17-14
16	磁器	碗	(9.4)	5.0	(4.1)	I	50	良好	灰白	瀬戸 酸化コバルト 丸繋ぎ文 19C中	17-15
17	磁器	碗	(7.2)	[48]	—	H K	40	良好	灰白	瀬戸 酸化コバルト 霞唐草 19C中	
18	磁器	皿	11.2	2.3	6.5	I K	90	良好	灰白	瀬戸 寿文皿 型押 19C中	18-1
19	磁器	杯	5.6	2.6	2.5	I K	50	良好	灰白	瀬戸 御殿手 色絵 舟景図 19C後	
20	磁器	杯	7.4	3.1	2.8	I K	80	良好	灰白	瀬戸 描2個体 酸化コバルト 内外捻花 見込湯巻 19C前	18-2
21	磁器	杯	7.0	4.5	3.0	I K	60	良好	灰白	一面 肥前 描2個体 染付 毛糸王印判変形字か	18-3
22	磁器	杯	6.7	4.6	2.8	I K	95	良好	灰白	瀬戸 酸化コバルト 漢詩文「天香」銘	
23	磁器	杯	7.0	5.4	3.2	H I K	75	良好	灰白	肥前 口紅 寿文杯 19C中	18-4
24	磁器	水滴	1.8	4.2	7.0	—	95	良好	白	瀬戸 酸化コバルト 上面花散らし底面布目 松葉 19C前	18-5
25	磁器	猪口	8.0	6.1	6.2	H	90	良好	白	瀬戸 染付 山水樓閣文 19C前	18-6
26	磁器	猪口	(7.0)	5.0	(5.8)	—	40	良好	白	瀬戸 染付「とらや」「◎」銘 19C初	18-7
27	磁器	瓶	1.5	13.1	—	—	70	良好	白	肥前 御神酒徳利 染付 蛸唐草文 19C初	
28	磁器	瓶	—	[8.3]	4.0	—	95	良好	白	肥前 御神酒徳利 染付 蛸唐草文 19C初	18-8
29	磁器	仏飯具	6.0	6.1	4.1	—	95	良好	白	瀬戸 酸化コバルト 19C前	18-9
30	磁器	合子	5.3	1.4	4.4	—	100	良好	白	瀬戸 酸化コバルト 型紙 19C	18-10
31	磁器	急須	6.6	6.1	6.3	—	85	良好	白	瀬戸 鞍輪 酸化コバルト 19C中	
32	陶器	碗	(13.8)	5.3	(4.8)	H	20	良好	灰白	瀬戸美濃 輪花 胡毛目碗 18C末	
33	陶器	皿	9.3	2.0	4.4	A I	95	普通	灰白	瀬戸美濃 灯明皿 鉄軸 19C前	18-11
34	陶器	香炉	10.3	7.8	10.2	H I	45	普通	灰白	瀬戸美濃 灰軸 底面墨書	18-12
35	陶器	水指	6.8	10.4	7.7	I K	95	良好	灰白	瀬戸美濃 灰軸 回転ヘラケズリ	18-13
36	陶器	捏鉢	—	[38]	15.6	G H I	20	普通	灰白	瀬戸美濃 灰軸 刻書 底面「安政二乙卯年七月吉日」	
37	陶器	瓶	3.6	21.5	7.5	I K	90	良好	灰白	瀬戸美濃 二合半徳利	19-1
38	陶器	碗	(9.0)	5.2	(3.4)	—	45	普通	灰白	京信 内外面施軸	
39	陶器	碗	9.1	5.0	2.8	K	85	良好	灰白	京信 小杉碗 灰軸 19C初	
40	陶器	碗	10.7	7.6	4.9	I K	70	良好	灰白	京信 灰軸	
41	陶器	束壺	(7.0)	4.9	4.4	E H K	90	良好	にぶい燈	京信 灰軸 19C初	

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
42	陶器	皿	6.8	2.1	5.1	H1	100	良好	褐灰	志登呂 油受皿 鉄軸 19C前	19-2
43	陶器	蓋	6.0	1.9	つまみ径 1.4	—	90	良好	灰白	萬古 被熱 変色し白色化している 器面に傷み 軸等不明 19C前	19-3
44	陶器	急須	6.3	5.3	6.6	—	95	良好	灰白	萬古 被熱 轆に菊 把手型押 白石 下蓋 菊花状押圧痕	19-4
45	陶器	皿	13.8	2.8	8.8	I	70	良好	灰白	淡路 黄軸 龍文 19C前	19-5
46	陶器	皿	(8.4)	1.8	4.0	HK	30	良好	灰白	淡路 青軸 龍文 19C前	
47	陶器	カンテラ	5.0	4.4	4.4	E1K	90	良好	にぶい橙	産地不明 透明軸 森	19-6
48	陶器	羹	(42.7)	8.0	—	E1K	5	普通	赤	常滑 19C 小罐	
49	陶器	土瓶	8.7	(8.2)	—	H1K	80	良好	淡黄	産地不明 イッチン 菊	19-7
50	陶器	油差し	—	(6.8)	—	—	30	良好	灰白	産地不明 外面鉄軸	
51	陶器	壺	4.5	23.5	9.2	E1K	80	良好	灰白	産地不明 鉄軸 灰軸掛分け 底面墨書	19-8
52	陶器	蓋	(18.6)	4.3	—	H1K	50	良好	浅黄橙	産地不明 鉄軸 漆黒軸掛分け	19-9
53	陶器	土瓶蓋	5.9	3.3	—	HK	90	良好	灰	産地不明 三彩 19C前	
54	陶器	土瓶蓋	6.7	3.3	—	HK	90	普通	淡黄	産地不明 鉄軸 19C前 笠間か	
55	陶器	蓋	5.3	1.6	2.4	CH1K	90	良好	灰黄	産地不明 急須蓋 透明軸	
56	陶器	土瓶蓋	5.8	3.2	—	A1	100	良好	淡黄	産地不明 褐軸 イッチン	
57	陶器	土瓶蓋	6.3	3.1	—	IK	100	良好	褐灰	産地不明 うのふ輪	
58	陶器	蓋	8.4	1.9	3.4	HK	95	良好	灰白	産地不明 急須蓋 鉄軸 イッチン	
59	陶器	蓋	6.5	1.6	2.4	H1K	75	良好	灰白	産地不明 急須蓋 透明軸 イッチン	
60	土器	火鉢	(17.4)	8.3	(11.6)	H1K	70	普通	にぶい黄橙	土師質 内外面保付着	19-10
61	土器	涼巾	(21.4)	(18.0)	(18.4)	AH1K	55	普通	灰白	産地不明 瓦質 内外面保付着	
62	土器	土器	長き 幅 (15.9)	17.7	—	CH1K	50	普通	灰白	瓦質 保付着 内面ナデ 外面無調整か 砂目	
63	土器	植木鉢	9.0	6.6	5.3	AH1K	80	普通	灰	不明 瓦質 雲母多	
64	土器	焼塩釜	(4.6)	(3.5)	3.6	H1	70	普通	橙 赤橙	土師質 内外面赤橙色変色 回転系切刃 回転	19-11
65	土器	皿	(17.1)	(2.7)	—	HK	30	良好	灰白	不明 施軸土器 透明軸 雲龍文	
66	土器	箱型七輪	縦 23.7	横 24.1	—	AH1K	—	普通	にぶい黄橙	不明 被熱 雲母多 本体 白輪 目皿のセツト	19-12
	土器	箱型七輪	—	(15.1)	11.6	AH1K	40	普通	にぶい黄橙		
	土器	扉	—	—	—	AH1K	—	普通	にぶい橙		
	土器	目皿	長軸 11.5	短軸 11.4	—	H1K	85	普通	橙		
67	陶器	石皿	25.0	4.6	16.2	K	40	良好	灰黄	A3H4 瀬戸美濃 灰軸 染付 草花文 底「廿八」	19-13
68	磁器	皿	—	(1.9)	(7.8)	—	10	普通	灰白	盛土トレンチ 瀬戸 酸化コバルト 型紙 刷 微塵草 底面墨書	20-1
69	磁器	香炉	(4.9)	(4.4)	—	K	30	良好	白	K4トレンチ 瀬戸美濃 外面給付け (人物) 焼き継ぎ 底面朱書	
70	磁器	香炉	10.4	8.6	9.5	HK	95	普通	灰白	盛土灰土 酸化コバルト 型紙刷 微塵草 文 草文 底面墨書「クマカサ」	20-2
71	磁器	觀徳利	—	(3.0)	5.6	—	35	普通	灰白	K7トレンチ 瀬戸 染付 底面墨書「クカ」	20-3
72	陶器	瓶	—	(4.8)	—	I	5	普通	灰白	庭(西) 産地不明 内外面被熱 全体に煤 給付銘	20-4
73	磁器	坏	—	(3.0)	—	—	15	普通	灰白	盛土トレンチ 瀬戸 御殿子 内面「栗焼町」「福前屋」印刷	20-5
74	磁器	小坏	6.9	2.7	2.6	—	75	普通	灰白	K3H2H 瀬戸「安藤支店」印刷 20C1/4	20-6
75	磁器	坏	5.9	2.5	2.1	—	95	良好	白	A3J3 瀬戸 被熱 内外底部施軸 印刷、汽船「くりはし」「福前屋」「〇」	20-7
76	磁器	蓋	(7.0)	2.3	—	—	45	普通	灰白	K3トレンチ 瀬戸 コバルト「み保之町」朱書 19C末	20-8
77	陶器	皿	8.6	1.9	3.4	H	95	普通	灰白	庭(西) 京伝 油受皿 鉄軸 内外面保付着 底面墨書判読不能 19C前	20-9

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
78	陶器	瓶	3.5	21.1	8.0	K	100	良好	灰黄	盛土 瀬戸美濃 五合徳利	20-10
79	陶器	壺	—	[17.1]	8.4	IK	90	良好	灰黄	盛土 産地不明 外面施釉 内面無釉	20-11
80	陶器	瓶	(L1)	7.2	2.1	IK	95	良好	灰	盛土表土 黒古 鉄軸 布袋 19C前	20-12
81	陶器	蓮華	長さ (4.4)	[0.9]	幅 2.1	H I	5	良好	灰白	K7トレント 浅緑 黄軸 19C前	
82	土器	蛇造り	高さ 15.6cm	幅 12.9cm	厚さ 12.0cm	K	100	良好	橙	盛土	20-13

第22表 土器出土遺物観察表 (第61～65図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	磁器	碗	(11.8)	5.3	(4.8)	K	60	良好	灰白	SK1 肥前 染付 草花文 見込変形字 煤 付着	
2	磁器	碗	12.2	5.0	4.5	K	100	良好	灰白	SK1 肥前 蛇の目輪画 染付 被熱 18C 後半	21-1
3	磁器	碗	(12.0)	[4.7]	—	K	25	良好	灰白	SK1 肥前 被熱 染付 草花文 煤付着	
4	磁器	碗	9.0	[4.8]	3.0	K	60	良好	灰白	SK1 肥前 被熱	
5	磁器	皿	13.8	3.3	7.0	K	80	良好	灰白	SK1 被熱 肥前 染付 梅花繫ぎ文 五弁 花	
6	磁器	皿	(13.6)	3.9	(9.0)	K	20	良好	灰白	SK1 No.57 肥前 被熱 染付 草花文	
7	磁器	皿	12.4	4.5	5.0	K	60	良好	灰白	SK1 肥前 被熱 染付 草文	21-2
8	磁器	皿	13.5	3.9	8.5	K	70	良好	灰白	SK1 輪花碗 被熱 染付 草文	21-3
9	磁器	皿	13.2	3.2	6.6	K	70	良好	灰白	SK1 No.37 肥前 染付 梅樹文 19C初	21-4
10	磁器	皿	13.4	2.6	6.9	K	60	良好	灰白	SK1 被熱 染付 梅花繫ぎ文	21-5
11	磁器	皿	(13.0)	3.6	8.2	I	25	普通	灰白	SK1 肥前 文字入	
12	磁器	杯	(7.5)	3.6	2.9	K	30	良好	灰白	SK1 肥前 被熱 染付	
13	磁器	杯	7.4	3.8	2.9	K	90	良好	灰白	SK1 肥前 被熱 草文	
14	磁器	杯	(8.2)	3.2	(4.2)	K	20	良好	灰白	SK1 肥前 被熱	
15	磁器	香炉	—	[4.1]	3.6	K	70	良好	灰白	SK1 肥前 青磁 筒形被熱	
16	陶器	香炉	6.2	3.9	4.8	K	100	良好	黄灰	SK1 瀬戸美濃 被熱 灰軸 底部煤付着	21-6
17	磁器	仏飯具	7.0	5.0	3.5	K	90	良好	灰白	SK1 肥前 被熱 底部無釉	
18	磁器	香炉	—	[1.9]	(6.6)	K	20	良好	灰白	SK1 肥前 染付 脚部型押 煤付着	
19	磁器	瓶	—	[4.4]	(5.0)	H K	40	良好	灰白	SK1 肥前 染付 御神酒徳利	
20	磁器	壺	—	[7.6]	(6.1)	K	50	良好	灰白	SK1 SE2 肥前 油壺 染付 折枝松	21-7
21	陶器	皿	10.3	2.1	5.4	K	80	良好	褐灰	SK1 瀬戸美濃 被熱 灯明皿 柿輪 煤付 着	
22	陶器	皿	10.5	1.9	5.0	K	70	良好	灰黄	SK1 瀬戸美濃 油受皿 鉄軸 内面に付 着物あり 芝村か?	21-8
23	陶器	皿	8.3	2.0	4.0	IK	100	良好	黄灰	SK1 瀬戸美濃 被熱 鉄軸	21-9
24	陶器	壺	14.5	13.7	10.2	H IK	100	良好	灰黄	SK1 No.52 瀬戸美濃 手割茶 植木鉢に 転用 18C末	21-10
25	陶器	花生	(10.7)	19.4	8.5	K	90	良好	灰白	SK1 No.1 瀬戸美濃 朝顔形有耳壺 掛 分け	21-11
26	陶器	壺	8.5	18.0	(9.4)	IK	70	良好	灰黄	SK1 瀬戸美濃 灰軸 有耳壺 双耳貼り 付け	21-12
27	陶器	碗	9.6	6.7	5.0	K	90	良好	灰白	SK1 瀬戸美濃 柿輪	21-13
28	土器	火鉢	13.7	8.2	12.2	AH IK	90	普通	にぶい橙	SK1 下半煤付着 土師質丸火鉢	21-14
29	陶器	片口鉢	(17.2)	8.4	8.3	K	50	良好	褐灰	SK1 瀬戸美濃 被熱 灰軸 1つ直 煤付着	
30	土器	火鉢	(26.0)	[10.1]	—	EH IK	15	良好	灰褐	SK1 No.17・43 土師質丸火鉢 内面被 熱 煤付着	
31	土器	七輪	(23.5)	[6.8]	—	K	10	普通	にぶい橙	SK1 産土製	
32	土器	カマド	—	[5.0]	(26.0)	H IK	20	普通	橙	SK1 炊爨口	
33	土器	火鉢	(30.2)	15.2	(25.2)	AH IK	30	普通	にぶい橙	SK1 脚付火鉢 土師質 菊印 煤付着	
34	土器	火鉢	—	[6.8]	18.2	H IK	90	普通	橙	SK1 脚付火鉢 土師質 被熱 2孔 煤付 着	21-15

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
35	土器	焙烙	(31.5)	3.9	—	HJK	15	普通	橙	SK1 土師貫 九底 保 補修孔あり	
36	磁器	碗	(12.2)	4.7	4.2	K	50	良好	灰白	SK2 肥前 被熱 染付 草花文	
37	土器	焙烙	(34.5)	4.5	(32.0)	ACHIK	20	普通	灰白	SK2 平底 瓦貫 煤付着	
38	土器	焙烙	(32.5)	(5.1)	—	CHIK	10	普通	にぶい・橙	SK2 土師貫 九底 煤付着	
39	磁器	蓋	100	2.8	つまみ径 5.5	K	80	良好	灰白	SK2 肥前 染付 花卉文 双蝶 18C後半	22-1
40	磁器	碗	(9.4)	—	3.6	IK	70	良好	灰白	SK3 肥前 染付 梅樹文 昆虫 18C末	22-2
41	磁器	碗	(10.0)	(5.0)	—	K	25	良好	灰白	SK3 肥前 瑞反 染付 九文 18C後	
42	磁器	碗	(7.2)	5.3	3.6	I	50	良好	灰白	SK3 肥前 筒形碗 染付 竹草文 五弁花 18C後	
43	磁器	杯	—	(2.5)	3.4	IK	75	良好	灰白	SK3 肥前 白磁 雲付無軸 18C末	
44	磁器	碗	—	(3.3)	4.6	IK	50	良好	灰白	SK3 肥前 染付 朝顔形 18C末	
45	磁器	碗	7.7	5.8	3.3	I	70	良好	灰白	SK3 肥前 染付 草花文 18C末	
46	磁器	碗	—	(3.0)	3.9	IK	80	良好	灰白	SK3 肥前 青磁 染付五弁花 18C末	
47	磁器	碗	(7.8)	(5.5)	—	K	40	良好	灰白	SK3 肥前 染付 花蝶文 18C末	
48	磁器	杯	8.2	3.8	(2.8)	IK	40	良好	灰白	SK3 肥前 染付 格子 菊散らし文 18C末	
49	磁器	杯	(7.8)	3.6	(2.6)	K	70	良好	灰白	SK3 肥前 染付 内外面施釉 18C後	22-3
50	磁器	蓋	8.2	2.4	つまみ径 3.3	IK	50	良好	灰白	SK3 肥前 染付 若松 四方押 18C末	
51	磁器	鉢	—	(4.7)	8.7	I	70	良好	灰白	SK3 肥前 被熱 蛇の目形高台 煤付着 青磁 見込染須朝顔	
52	磁器	皿	—	(2.4)	7.8	IK	60	良好	灰白	SK3 肥前 蛇ノ目高台 白磁 菊型押文 18C末	
53	磁器	皿	18.2	5.2	5.6	IK	95	良好	灰白	SK3 肥前 染付 梅樹文 18C末	22-4
54	磁器	鉢	(19.0)	(5.3)	—	I	30	良好	灰白	SK3 肥前 被熱 煤付着 青磁 内 (口縁) 梅花文	
55	磁器	香炉	(15.4)	(3.2)	—	K	20	良好	灰白	SK3 肥前 被熱 青磁碗 内面無軸	
56	磁器	香炉	(15.4)	(4.8)	—	K	25	良好	灰白	SK3 肥前 被熱 青磁碗	
57	磁器	香炉	—	(5.0)	—	IK	20	良好	灰白	SK3 肥前 被熱 青磁碗	
58	磁器	蓋	5.0	1.1	—	IK	100	良好	灰白	SK3 肥前 被熱 合子 紅染散 19C初	
59	陶器	碗	9.5	5.0	4.0	K	100	良好	褐灰	SK3 瀬戸美濃 せんじ 灰輪 底面 [O]	22-5
60	陶器	皿	(9.8)	(1.7)	—	IK	25	良好	黄灰	SK3 瀬戸美濃 灰輪 小皿	
61	陶器	皿	7.6	1.6	3.7	K	90	良好	灰白	SK3 瀬戸美濃 灯明皿 被熱 18C末	22-6
62	陶器	皿	10.7	1.9	5.4	K	100	良好	灰黄	SK3 瀬戸美濃 油受皿 鉄輪 18C末	22-7
63	陶器	瓶	—	(9.6)	—	IK	25	良好	灰白	SK3 瀬戸美濃 灰輪 トイロ 合半徳利	
64	陶器	丸碗	(9.5)	(3.3)	—	K	30	良好	灰白	SK3 京信 灰輪 鉄輪 草花文か	
65	陶器	碗	8.8	5.7	3.0	K	90	良好	褐灰	SK3 京信 丸碗 灰輪 19C初	22-8
66	土器	土瓶	—	(6.1)	—	HJK	100	普通	橙	SK3 津里輪 18C末	
67	陶器	瓶	(3.0)	(19.1)	—	IK	60	良好	灰	SK3 備前 徳利 取上手 鉄輪 被熱 煤	22-9
68	陶器	花生	90	17.8	8.5	I	100	良好	明褐灰	SK3 瀬戸美濃 朝顔形 灰輪鉄輪掛分け	22-10
69	陶器	羹	(35.0)	(11.3)	—	EIK	20	良好	灰	SK3 瀬戸美濃 半胴羹 柿輪 19C初	
70	土器	角火鉢	—	12.4	—	HJK	5	普通	灰白	SK3 瓦貫 被熱 軟質瓦貫角火鉢	
71	土器	焙烙	(32.8)	(5.9)	—	EIK	20	普通	褐灰	SK3 土師貫 九底 被熱	
72	土器	焙烙	(33.6)	(3.9)	—	HJK	20	普通	にぶい・赤褐	SK3 土師貫 九底 被熱	
73	土器	焙烙	(32.4)	(6.9)	—	IK	40	普通	灰黄褐	SK3 土師貫 九底 被熱 煤付着	22-11
74	壺土	—	長さ (10.4)	幅 (8.14)	—	AIK	?	普通	にぶい・橙	SK3 スサ入り 焼土化	
75	磁器	碗	7.8	3.2	2.8	IK	75	良好	灰白	SK5 肥前 染付 菊散らし文 18C末	
76	磁器	皿	—	(2.1)	(8.3)	K	70	良好	灰白	SK5 肥前 染付 内面草花文 18C末	
77	陶器	碗	(9.3)	5.4	3.1	EIK	20	良好	灰白	SK5 京信 灰輪 鉄輪 煤	
78	陶器	片口鉢	(11.2)	4.5	(5.3)	EIK	25	良好	灰白	SK5 SK3 瀬戸美濃 灰輪 被熱	
79	陶器	鍋	(19.8)	(9.3)	—	I	20	良好	灰白	SK5 産地不明 鉢輪 被熱 煤付着	
80	土器	かわらけ	5.3	1.0	3.0	AIK	100	普通	灰	SK5 不明 被熱 煤付着 左回転	22-12
81	土器	かわらけ	7.2	1.3	3.8	AIK	90	普通	にぶい・褐	SK5 不明 被熱 煤付着 左回転	

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
82	土器	かわらけ	9.0	1.6	5.0	A	95	普通	黄灰	SK5 不明 被熱 煤付着 左回転	
83	土器	かわらけ	9.1	1.8	4.7	A I K	95	普通	にぶい・褐	SK5 不明 被熱 煤付着 左回転	
84	土器	かわらけ	7.0	1.3	3.6	A C E I J K	100	普通	灰	SK5 不明 被熱 煤付着 左回転	22-13
85	土器	かわらけ	7.0	1.3	3.4	A C I	95	普通	褐灰	SK5 不明 被熱 煤付着 左回転	22-14
86	土器	かわらけ	7.4	1.2	4.0	A E I	100	普通	灰白	SK5 不明 被熱 煤付着 左回転	22-15
87	土器	かわらけ	5.7	1.1	3.1	A C K	100	普通	黄灰	SK5 不明 被熱 煤付着 左回転	23-1
88	土器	かわらけ	5.2	1.2	3.2	A I K	100	普通	褐灰	SK5 不明 被熱 煤付着 左回転	23-2
89	土器	かわらけ	5.8	1.1	3.0	I K	100	普通	黄灰	SK5 不明 被熱 煤付着 左回転	
90	土器	かわらけ	5.7	1.0	3.2	I K	100	普通	灰	SK5 不明 被熱 煤付着 左回転	
91	土器	土甌	7.8	[5.7]	—	E H I K	60	良好	にぶい・赤褐	SK5 産地不明 鉄軸 被熱	23-3
92	土器	涼卵	22.0	20.4	16.5	A H I K	80	普通	灰黄褐	SK5 産地不明 被熱 SK5・盛土・A3-I1と接合	23-4

第23表 井戸跡出土遺物観察表 (第66～68図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	磁器	碗	9.7	5.3	4.1	I K	80	良好	灰白	SE2 肥前 被熱 染付 折枝紅葉文 こん にゃく印判 18C4/4	
2	磁器	碗	(8.8)	4.9	3.2	I K	40	良好	灰白	SE2 肥前 被熱 染付 草花文 厚手 18C 末	
3	磁器	碗	10.0	5.3	4.3	K	90	良好	灰白	SE2 肥前 被熱 染付 折枝楓 18C4/4	23-5
4	磁器	碗	(9.9)	5.3	(4.2)	I K	40	普通	灰白	SE2 肥前 染付 草花文 底部墨書	
5	磁器	碗	(7.0)	5.3	(3.6)	I K	45	良好	灰白	SE2 肥前 筒形 染付 七宝繋ぎ文 18C4/4	
6	磁器	碗	(9.2)	5.2	(3.8)	I K	20	良好	灰白	SE2 肥前 染付 被熱 草花文 19C初	
7	磁器	碗	(11.8)	7.0	(4.8)	I K	35	良好	灰白	SE2 瀬戸 丸鍋蓋 染付 草文 19C前	
8	磁器	碗	—	[2.8]	4.0	I	50	良好	灰白	SE2 肥前 被熱 染付 草花文 18C末	
9	磁器	皿	(13.4)	3.2	(6.4)	I K	50	良好	灰白	SE2 肥前 被熱 染付 草花文 18C4/4	23-6
10	磁器	皿	14.0	3.7	8.6	I K	80	良好	灰白	SE2 肥前 染付 底面全体に赤 18C後	23-7
11	磁器	皿	(14.0)	2.8	(6.6)	I K	25	良好	灰白	SE2 肥前 染付 草花文 18C4/4	
12	磁器	皿	—	[2.0]	(11.0)	I K	5	良好	灰白	SE2 肥前 染付 煤付着 19C前	
13	磁器	皿	(14.0)	4.3	(8.0)	I	30	良好	灰白	SE2 肥前 輪花碗 染付 菊唐草 19C前	
14	磁器	皿	(23.0)	7.8	(13.8)	I K	5	良好	灰白	SE2 瀬戸 コバルト 端灰 広東 草花文 牡丹 菊文 煤付着 19C後	
15	磁器	坏	(7.0)	[4.2]	(3.0)	I K	30	良好	灰白	SE2 瀬戸 染付 草花文 端反 19C前	
16	磁器	皿	(12.0)	2.4	(7.0)	I	30	良好	灰白	SE2 瀬戸 寿文 皿 19C中	
17	磁器	鉢	(17.8)	5.3	8.4	I K	30	良好	灰白	SE2 肥前 染付 梅花文 山水模陶文 18C後	23-8
18	磁器	皿	19.6	4.5	10.8	I K	50	良好	灰白	SE2 肥前 染付 草花文 菊文 18C4/4	
19	陶器	碗	7.6	5.5	3.3	I K	85	良好	灰白	SE2 瀬戸美濃 鉄軸灰軸掛け分け 鉛手 19C初	23-9
20	陶器	碗	9.3	5.9	4.2	H I K	40	良好	灰白	SE2 瀬戸美濃 被熱 磨擦碗 18C後	
21	陶器	碗	—	[4.3]	4.3	H I K	45	良好	灰白	SE2 瀬戸美濃 せんじ 灰軸 18C後	
22	陶器	碗	(10.0)	[4.7]	—	K	25	良好	灰オリーブ	SE2 瀬戸美濃 せんじ 灰軸 呉須絵か	
23	陶器	碗	10.0	5.0	4.0	I K	60	良好	にぶい・黄橙	SE2 瀬戸美濃 鉄軸灰軸掛け分け 18C 末	23-10
24	陶器	碗	—	[2.7]	4.0	I K	70	良好	淡黄	SE2 瀬戸美濃 京焼風 灰軸 18C後	
25	陶器	燗徳利	—	[4.3]	(7.6)	I	15	普通	灰白	京信 底部墨書	23-11
26	陶器	皿	—	[1.1]	6.3	D H I	90	良好	灰白	SE2 瀬戸美濃 灰軸 描絵皿 19C初	
27	陶器	皿	9.8	1.7	2.0	A C	25	良好	にぶい・黄橙	SE2 瀬戸美濃 被熱 灯明皿 重ね焼き 灰	
28	陶器	皿	7.3	[1.4]	3.9	H I K	90	良好	灰白	SE2 瀬戸美濃 被熱 灯明皿 全体煤着	23-12
29	陶器	鍋	(20.0)	[3.8]	—	I	15	普通	灰白	SE2 産地不明 柿軸 19C	
30	陶器	瓶掛	(31.0)	[14.2]	—	K	40	良好	灰黄	SE2 瀬戸美濃 鉄軸灰軸掛け分け	23-13

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
31	土器	素壺	3.4	4.5	2.9	H I K	100	普通	橙	SE2 産地不明 透明釉 煤付着 剥離痕 があり 両目の可能性	23-14
32	土器	焙烙	(45.0)	5.3	(44.0)	CH I K	5	普通	灰白	SE2 瓦質 平底 全体に煤 補修痕	
33	土器	焙烙	(37.8)	4.8	(35.4)	ACH I K	25	普通	灰白	SE2 瓦質 平底 煤全体 補修痕	
34	土器	焙烙	(32.8)	(5.0)	—	ADEHI K	25	普通	橙	SE2 土師質 丸底 被熱 外面煤	
35	磁器	碗	(10.2)	5.7	(3.8)	K	30	良好	灰白	SE3 肥前 端反 小広東 染付 19C前	
36	磁器	碗	—	(2.3)	4.2	K	70	良好	灰白	SE3 肥前 染付 19C初	
37	磁器	蓋	8.6	2.7	つまみ径 3.4	K	95	良好	灰白	SE3 瀬戸 丸碗蓋 染付 草文 19C前	23-15
38	陶器	播鉢	(35.0)	(4.7)	—	H I K	10	良好	にぶい赤褐	SE3 堺町石 播目 9 染 1 単位 19C	

第24表 ガラス製品観察表 (第69図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	ガラス	瓶	1.4	5.3	2.1	—	—	—	—	側面両側接合痕 気泡多 精餾水 慶応三年 (1867) 目録	24-8
2	ガラス	かんざし	—	—	—	—	—	—	透明	ガラス (27cm 0.5cm 1.8g)	

第25表 土製品観察表 (第70図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	瓦	棒状製品	長さ 9.3	径 5.6~4.3	—	CH K	—	普通	—	SB1 B-B 瓦質 鬼瓦の一部か	24-7
2	土製品	人形	縦 3.0	横 2.5	厚 1.1	AH K	100	普通	黄橙	SB1 肥前 No.1 産地不明 天神 土 師質 銀化 無釉	24-1
3	土製品	泥面子	長軸 2.4	短軸 2.2	高 1.0	—	100	普通	橙	SB2-一括 芥子面	24-7
4	土製品	埴苗	長軸 5.1	短軸 2.5	高さ 3.7	—	95	良好	浅黄橙	SB2-一層 上面透明釉 頂部剥離	24-7
5	磁器	ミニチュア	4.4	1.6	1.5	—	100	良好	灰白	SB3 肥前 型押坏	24-7
6	土製品	転用磁具	長径 3.2	短径 2.7	厚 1.5	AH K	100	普通	灰黄	SK1 No.61 瓦質 銀化	24-7
7	磁器	ミニチュア	1.7	[6.9]	—	K	70	良好	灰白	盛土 A3-12 肥前 御神酒徳利 染 付 草花文	24-7
8	磁器	ミニチュア	1.7	[4.7]	—	IK	80	良好	灰白	K1 トレンチ 肥前 御神酒徳利 染付 草花文	24-7
9	磁器	ミニチュア	1.8	5.2	2.4	H	95	良好	灰白	盛土 A3-12 肥前 御神酒徳利 染 付 蜻蛉 19C	24-2
10	磁器	ミニチュア	0.7	3.5	1.8	K	100	良好	灰白	盛土 肥前 御神酒徳利 脚部に小 穴	24-3
11	磁器	ミニチュア	4.0	2.4	1.0	H I K	60	良好	白	K-一面 瀬戸 植木鉢 底面無釉	24-7
12	磁器	ミニチュア	2.0	0.9	0.8	H	100	良好	灰白	A3-123 面 No.199 肥前 型押菊坏 施釉	24-7
13	磁器	ミニチュア	2.2	1.0	0.8	K	100	良好	灰白	盛土表土 肥前 型押菊坏 施釉	24-7
14	磁器	人形	縦 2.7	横 2.6	—	—	100	良好	灰白	K 表土 肥前 型押小 壺、目鼻を 墨で表現 口紅	24-7
15	土製品	ミニチュア	2.7	2.4	1.9	AH I	95	普通	橙	盛土 A3-12 不明 鉢 土師質 回転 糸切	24-4
16	土製品	泥面子	縦 3.0	横 2.7	厚 0.8	ACH I	100	—	橙	盛土 A3-12 産地不明 茶子面 土 師質 天狗か	24-7
17	土製品	泥面子	縦 2.1	横 1.7	厚 0.7	H I K	100	普通	橙	K1 トレンチ 産地不明 芥子面 土師質 菊	24-7
18	土製品	碁石形	—	厚 0.7	径 20×19	HK	100	普通	橙	K3 面 産地不明 土師質 1.9g 煤 付着	24-7
19	土製品	碁石形	—	厚 0.7	径 19×19	H I K	100	普通	橙	盛土 A3-12 No.239 産地不明 煤付 着 土師質	24-7
20	土製品	ミニチュア	9.1	2.8	—	H I K	90	普通	橙	K7 トレンチ 産地不明 富士山 土師質 白土 透明釉	24-5
21	土製品	ミニチュア	縦 3.6	横 5.3	幅 5.8	H I K	95	—	淡黄	K2 トレンチ 産地不明 土師質 寺色絵付	24-6

子亀が貼付されている。

23～42・44・45は陶器である。23は常滑の大甕で、自然釉がかかる。内面には若干工具の当たりが見える。25は萬古の急須の蓋で、上面に金泥で山水文が描かれている。26は肥前、三鳥手の鉢。27～34・36～39は瀬戸美濃である。27の片口鉢の内面には赤色の付着物が見られる。31は底面回転ヘラケズリ後ナデ、33の胴部下半、34の底面はヘラケズリである。35は備前の描鉢で、蛇の目高台。重ね焼き、トチン痕が見られる。

40～42は京信楽である。40の底部は無釉で、にぶい橙色を呈する。42は小杉碗で、内面にビン痕が見られる。

45は青土瓶である。粘土は瀬戸美濃に近い。被熱で変色している。

46～60は土器である。いずれも産地は不明である。雲母や角閃石を含むものが多い。46は外面のヘラケズリが明瞭である。48は被熱により断面が赤変している。やや多孔質である。49の火鉢は瓦質で、外面はヘラ磨き状である。把手付で、剥離痕が見られる。体部中位に径4mmの穿孔が施されている。56は全体に被熱し、下半は黒変している。57はかわかけの底部を転用した土器円板である。58は焼き塩壺の蓋である。凹形で、上面に布目が付く。

第2号建物跡（第53・54図） 1～43は、第2号建物跡出土の陶磁器、土器である。1～12は肥前系磁器である。8は輪花皿で、被熱。10は角形の白磁である。やや新しいか。11は雑な作りで、畳付に紅が付く。

13～20は瀬戸系磁器である。17は外面青磁の輪花碗で、口金。内面に梅樹折枝文が施されている。19は角形の水滴で、上面に雷文、流水紅葉文が施されている。

21～36は陶器である。25は萩焼で、ピラ掛けである。26は瀬戸美濃の銭甕である。底面回転ヘラケズリ。

27～31は京信楽である。29・30は灰釉で貫入が著しい。31は蓋物の蓋である。

32は萬古の急須である。無釉で焼き締めである。注口と体部の破片で、直接接合しないか同一個体と考えられる。体部の蓋受けの部分には、格子目がレリーフ状に施されている。

33・34は青土瓶である。33は注口として径0.6cmの穿孔が3箇所認められる。

37～42は土器である。いずれも産地は不明である。雲母や角閃石を含むものが多い。37は内面が赤彩されている。外面口クロナデ。40は脚付火鉢である。内面剥離。42のかわかけは右回転である。43は紡錘車である。全体に煤付着。

第3号建物跡（第54図） 44・45は、第3号建物跡出土の瀬戸美濃系陶器皿で、鉄釉の灯明皿である。45には小さな滴みが付いている。

盛土（第55～60図） 盛土からは、陶磁器、土器、瓦、石製品、鉄製品などの大量の遺物が出土した。特にA3-I2グリッド出土の遺物が多い。

1～31は磁器である。1～3・14・21・23・27・28は肥前系、その他は瀬戸系である。肥前系磁器で掲載可能なものは、鉢と皿、坏、御神酒徳利に留まる。1・2は大ぶりの端反鉢である。双方とも焼継ぎされ、底面に1は「六七」、2は「才」の朱書きがある。2には、更に文字があるようだが、ほとんど確認できない。3・27・28は御神酒徳利で蛸唐草文施文。28は底面に、焼成後の幅5mmほどのスリットが入れられており、中に別個体の1cm前後の破片が入れられていた。14の鉢は焼継ぎが施されている。

瀬戸系磁器は、碗、皿、鉢、八角鉢、甕徳利、坏、水滴、猪口、仏飯具、合子、急須がある。碗・鉢類はいずれも端反で、高台がやや高いものである。4は柴付で「牡丹花之富貴者」の銘がある。6は酸化コバルトで雲芝文が描かれている。7・15は焼継ぎで、各々「六七三」、「□九」の朱書きがある。8は底面に「十三□□」の墨書がある。10・11は

酸化コバルトの型紙刷り。微塵唐草。環状松竹梅文。16・20・21は2個一對の揃い物の片方である。18は型押し寿文皿、19は卵殻手の坏である。22は漢詩坏で底面に「天香」の銘が入る。23は寿文坏である。26は染付で体部側面に「とらや、見込みに丸に「久」の銘が、染付として入れられている。30の合子は完形で、酸化コバルト使用。微塵唐草文。31の急須は絞軸で、酸化コバルト使用。

32～59は陶器である。32～37は瀬戸美濃である。32は輪花の刷毛目碗である。34は香炉で、底面に「□か下」「□谷」の墨書が施されている。36の底面には「安政二乙卯年七月吉日」の墨入りの刻書が施されている。43・44は萬古の急須である。被熱し、白色化。器面の傷みにより軸葉等は不明である。43の蓋は柄に細かな文様が施され、別仕立てのため回転する。44は鶴に菊のレリーフ。底面に菊花状の押圧痕。把手型押し。45・46は淡路の型押し皿である。45は黄釉、46は青釉である。49の土瓶は灰釉で、イッチンによって菊が描かれている。51の壺は鉄釉、灰釉掛け分け。軸の間がトビガンナで埋められている。底面には屋号と考えられる「山に□」の墨書が大書されているが、欠損のため文字は不明である。

60～66は土器である。いずれも産地は不明である。雲母や角閃石を含むものが多い。60は土師質の火鉢である。器内が分厚い。61はハート形の送風口を持つ。外面鹿の子模様。62は十能である。外面はほぼ無調整である。63の植木鉢は雲母を多く含む。64は焼き壇である。内外面とも赤褐色に変色している。底面回転ヘラズリ、左回転。65は施釉土器で、透明釉施釉。型押しの雲竜文が施されている。66の箱七輪は各々と接合はしないが、本体見込みに残る台輪の痕跡が一致するなど、1個体と考えられる。本体、台輪、扉、目皿のセットである。目皿は、被熱により白色化し、剥離が進む。

第60図は、墨書、印刷などの文字が書かれてい

る陶磁器である。焼継ぎのものも含めた。67は底面に「廿八」の墨書が施されている。68は底面に墨書があるが、一部のみで判読できない。69は焼継ぎ。70は底面に「クマカナ」の墨書。71は底面に「クカ」の墨書。72は染付として「□泉」の銘がある。文字は作りと、辺の一部のみしか確認できない。73は卵殻手の坏で、内面に「栗橋町稲荷屋」の印刷がある。74は内面に「安藤支店」の印刷。75は内面に「汽船」「くりはし 稲荷屋」、底面に「○」印刷。76は「み保之町」の朱書き。77は底面に墨書が認められるが、判読不能。

78～82は、盛土表土、トレンチ出土のものである。78は瀬戸美濃五合徳利。79は産地不明の壺である。口縁部鉄釉、胴部灰釉の掛け分けで、胴部中央に山に「叶△」の染付が施されている。80は萬古鉄釉徳利である。べこかん状の凹みに布袋像が貼付されている。81は淡路焼の蓮華である。82は土師質の蚊遣りで、獅子形である。

第1号土壌 (第61～63図) 1～35は、第1号土壌出土の陶磁器、土器である。そのほとんどが、被熱している。1～7・11～15・17～20は肥前系磁器である。1～4は碗で、大振りである。2は蛇の目軸刺ぎ。5～11は皿で、やはり大振りである。いずれも蛇の目軸刺ぎ。7は被熱が著しく、溶けている。8は見込みに傷が多い。10は火影れになっている。15は青磁釉。高台状の露胎部。

16・21～27・29は陶器である。いずれも瀬戸美濃である。ほとんどが被熱しており、16・23は変色している。23は釉が飛んでいる箇所がある。22は内面に礫が付着している。24は底部の中央に径2cmの穿孔があり、植木鉢に転用したと考えられる。25は朝顔形の有耳壺で、上半灰釉、下半鉄釉の掛け分け。26の有耳壺は灰釉施釉。内面は口縁部まで施釉。以下は垂れ。29の片口鉢は、見込みにトチン痕が見られる。底部無軸。

28・30～35・37・38は土器である。いずれも産地は不明である。雲母や角閃石を含むものが多い。

31は珪藻土製の七輪と考えられる。32はカマドの鐙状に突出する焚口部である。33・34は脚付火鉢である。脚部中央に穿孔。33は菊の印判が施されている。ロクロナデ。35の焙烙には、補修孔が認められる。18世紀中葉から後半。

第2号土壙（第63図） 36・39は、第2号土壙出土の肥前系磁器である。36は碗、蛇の目軸割ぎ。39は蓋である。年代は18世紀後半である。

第3号土壙（第63～65図） 40～74は、第3号土壙出土の陶磁器、土器である。40～58は肥前系磁器である。磁器は全て肥前系である。年代は18世紀前半でまとまっている。40は粗製の碗で梅樹文が施されている。41は弱い端反碗である。42は筒形碗、44は朝顔形である。51・52は蛇の目凹形高台、53は蛇の目軸割ぎである。55～57は青磁釉の香炉である。いずれも被熱している。同一個体の可能性を考えたが、接合箇所がなく、破片を推定した部位に置くと、破片同士が重なり合ってしまうため別個体とした。

59～65・67～69は陶器である。59～63・68・69は瀬戸美濃、64・65が京信楽である。67は備前の、献上徳利、胴部中央が窪む。

66・70～73は土器である。いずれも産地は不明である。雲母や角閃石を含むものが多い。66は漆黑釉が掛けられた土瓶である。70は角火鉢で、軟質。外面はへら磨き状である。

74は壁土である。スサ入りで、全体が被熱し、赤色化している。

第5号土壙（第66図） 75～92は、第5号土壙出土の陶磁器、土器である。年代は18世紀後半～末でまとまっている。75・76は肥前系磁器である。76は蛇の目高台である。

77～79は陶器である。79は断面も被熱しており、破片の状態でも被熱したと考えられる。

80～90はかわらけである。いずれも被熱し、変色し、真っ黒の状態である。81・88～90は産地は不明だが、底部の回転糸切に左右の方向があり、

2か所に亘る可能性がある。雲母や角閃石を含むものが多い。

92の涼坪は、盛土出土の破片と接合する。

第2号井戸跡（第66～68図） 第66～68図は井戸跡出土の陶磁器、土器である。1～34が第2号井戸跡、35～38が第3号井戸跡出土である。

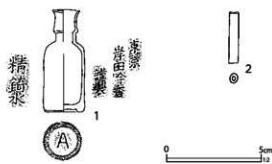
第2号井戸跡出土資料は、大部分が被熱している。1～13・17・18は肥前系磁器の碗・皿である。2は厚手で粗製。4は蛸唐草の染付碗。底面に墨書が見られるが、ごく一部で判読できない。6は底面全体が赤みがかった。9の皿は蛇の目軸割ぎで、内外面に砂が付着している。10の底面は全体に赤みがかった。11は粗製の皿で、蛇の目軸割ぎ。13は大型で輪花状になる。17・18は大振りの鉢、皿である。17は蛇の目高台、18は底面に砂が付着する。

14～16は瀬戸系磁器である。14は端反の広東皿である。酸化コバルトで、草花文が描かれている。底面全体に煤付着。16は寿文皿、木型打込。

19～30は陶器である。25は京信楽。29は産地不明。他は瀬戸美濃である。19は鉄釉、灰釉掛け分け、下半は鍛手である。23は掛け分けせんじである。25は底面に墨書が施されているが重ね書きされており、判読できない。26は刷絵皿で、見込みに刷絵が描かれている。馬か。27は見込みが黒色を呈する。漆黑釉か。28は全体に煤が付着している。30は瓶掛である。灰釉、鉄釉掛け分け。獸面把手で、輪宝、千鳥のスタンプが施されている。

31～34は土器である。いずれも産地は不明である。雲母や角閃石を含むものが多い。31の乗槌は片耳のみが遺存しているが、逆側には剥離痕があり、両耳の可能性もある。32・33は瓦質、平底の焙烙である。いずれにも補修痕があり、33は補修孔を縛った擦痕が残る。18世紀後半。

第3号井戸跡（第68図） 第68図35～38は、第3号井戸跡出土の陶磁器である。図示できた遺物の年代は19世紀初頭であり、第1号からの混入であ



第69図 ガラス製品

る。

35・36は肥前系磁器である。35は小広東の端反碗。36は高台の皿付が口紅状になっている。37は瀬戸系磁器の丸碗蓋である。

ガラス製品 (第69図) 加藤家屋敷跡からは、ガラス製品が出土している。1はガラス瓶である。ほぼ完形。口縁部は弧を描いて真直ぐ立ち上がり、端部はあまり手が増えられておらず、切り放しの感が強い。側面の両側に接合痕が認められる。気泡多。底部は上げ底で「A」の刻印が入れられている。胴部には表側に「精銚水」「東京」「岸田吟幸」「謹製」の文字が入れられている。

2はガラス製の簪の脚部である。管状で、斑に曇っている。上下端部欠損。

土製品 (第70図) 1～21は人形、ミニチュアなどの土製品である。土師質、瓦質のものと磁器製のものがあり、前者は産地不明である。後者は11が瀬戸系、その他は肥前系である。

1～5は建物跡出土資料である。1は瓦質の棒状品である。手握ねで、全体に指頭痕が多く残る。側面には指頭による縦方向のナデが見られるが部分的である。鬼瓦の部品等の可能性がある。角閃石を含む。2は土人形の天神である。土師質。型押し。3は泥面子の芥子面。菱形の押印。4は鳩笛である。頭部を欠き、全体ナデ調整。上半に透明釉が掛けられている。

5は、第3号建物跡出土のミニチュアである。瀬戸系磁器の型押菊環である。

6は、第1号土壙出土の瓦質の転用低具である。一部に銀化が見られる。外周はヘラケズリで面取り、擦痕が見られる。

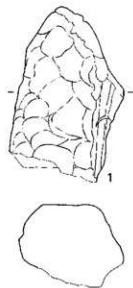
7～21は盛土出土である。7～14は肥前系磁器のミニチュアである。7～10は御神酒徳利である。10は胴部に製作時にできた小穴が開いている。染付。11は植木鉢のミニチュアとしたが、小型の風鈴である可能性も考えられる。12・13は型押菊環である。14は人形の頭部の破片で、髪、目鼻を墨書で表現。口紅が入れられている。

19は土師質の鉢である。底面回転糸切右回転。16・17は泥面子の芥子面である。16は天狗か。17は翁。18・19は碁石形土製品である。両者とも煤付着。18は指頭によるナデで、指紋が確認できる。19は指オサエ。20・21はミニチュアの箱庭道具である。20は富士山で白土掛け。透明釉施釉。21は寺院の堂の屋根である。色絵付け。下面に径25cmの取り付け孔が開けられている。

瓦 (第71～79図) 1～53は建物跡出土の瓦である。1～50は、第1b号建物跡出土資料である。同建物では、建物基礎の部材として一辺5cmほどに割られた多量の瓦片が入れられていた。そのほとんどが、一辺5～10cmに割られており、1の鬼瓦は14片に分割されていた。また、多くの瓦片が被熱している。

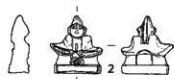
1～8は鬼瓦である。いずれも「影盛」を構成する組み合わせの部品である。1は上部の部品である。右側に鏡状の、下側に屋根に取り付け部品が組み合わせになると考えられる。2つの大きな突起の付いた台に粘土を被せ、円を意識して粘土紐が貼付され、ヘラで整える所謂「磨き」と呼ばれる手法で整形されている。体部とは直角に接合されており、やはり台に置いた状態で接合されたと考えられる。裏側の接合箇所には粘土が盛り付けられ、強く撫でつけられている。裏側には修理に用いられた漆喰が付着している。漆喰による基本的な工程は他の資料も同様である。2は「足元

SB1



SB3

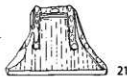
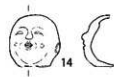
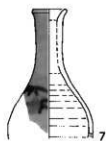
SK1



SB2



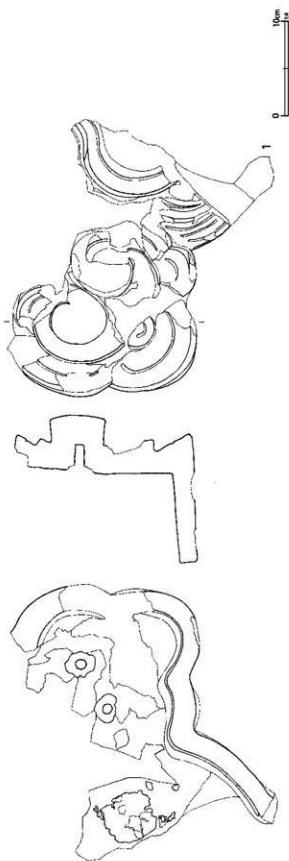
盛土



0 5cm
1 ~ 5, 7 ~ 21

0 10cm
6 13

第70図 土製品



第71図 建物跡出土瓦（1）

（鯨）」と呼ばれる屋根に取り付け部分で、体部には取り付けのための孔が開けられている。上下が逆の可能性もある。4・5も同様の屋根に取り付け部品である。6は上部に当たる部分である。3は鬼板と考えられる鏡状の部品で、中央に取り付くと考えられる。取り付け用の孔が開けられている。8は文字の一部である。鬼瓦もしくは鳥衾などに付けられていたと考えられる。

9・10は軒丸瓦である。連珠三つ巴文左巻き。11～13は丸瓦である。内面に布目と模骨痕が見られる。11は棒状工具によるナデ消し。12・13はナデが加えられている。13には分割のための沈線、朱が入れている。

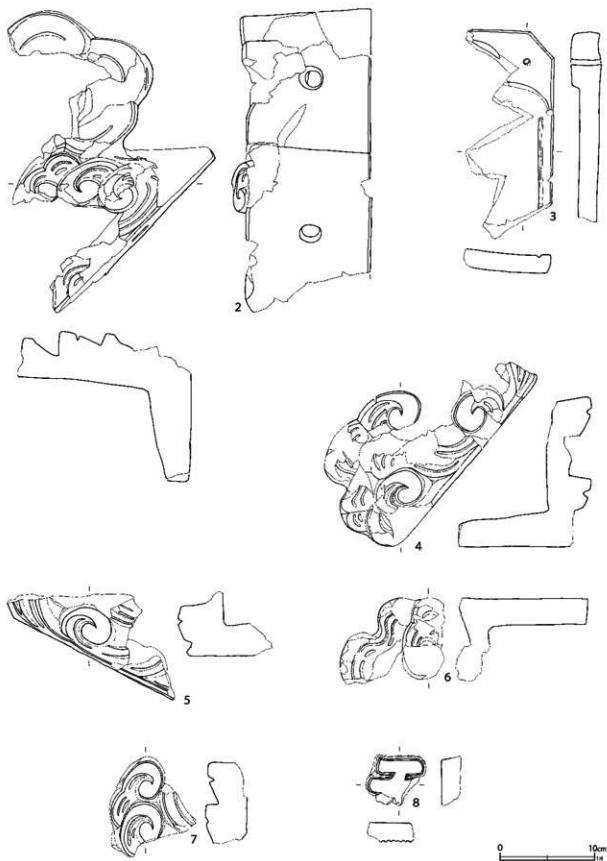
14～27は棧瓦・平瓦である。分割により両者の分類が困難なため一括した。いずれも、表面は丁寧なナデ調整。裏面はヘラケズリのままのものが多し。ほとんどの破片で表面の銀化が見られる。14・16には切り欠きが施されている。17・18には平行線状の、15・19には波状の滑り止めが施されている。19は丁寧なナデが施されている。

20～27には足立家屋敷跡出土瓦と同様の刻印が施されている。25は「田宮瓦」、27は「（」である。以下は屋号である。20・21・26は山に「三」、22は山に「石」で左右に文字が入る。右が「己」、左がひらがなの「し」であろうか。23・24は山に「吉」である。判然としないが、左が「長」、右が「阿」か。28は冠瓦と考えられる。漆喰が全体に付着し、色調は暗い。

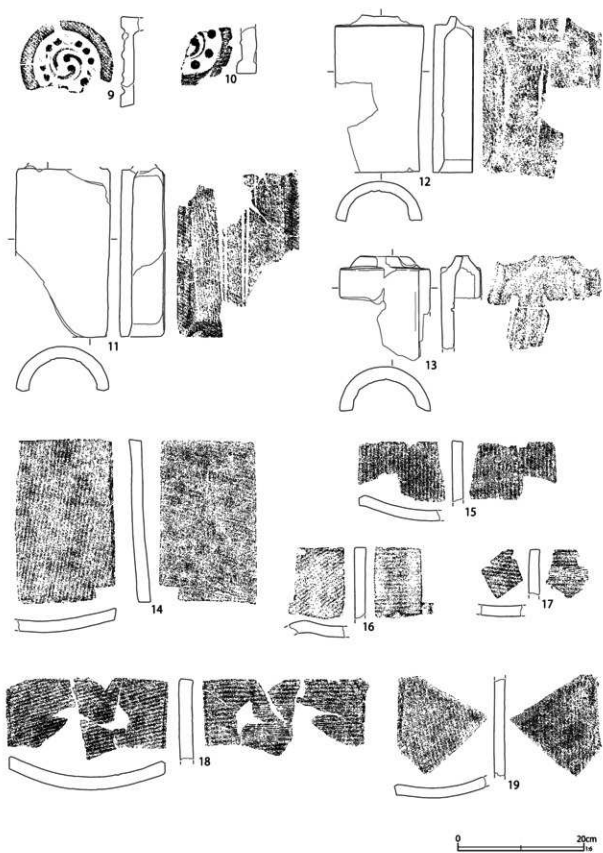
29～50は軒棧瓦である。29・32は三つ巴文右巻き。他は連珠三つ巴文である。33は連珠が大きく、三つ巴が小さい。34は巴の尾が短い。38は連珠、三つ巴とも大振りである。

42～50は垂れである。42は金子分類B種、45は江戸式、それ以外は江戸式垂種である。48・50は東海式。44・46は風化。50は色調が白っぽい。42・47・48・50は上半を欠いている。

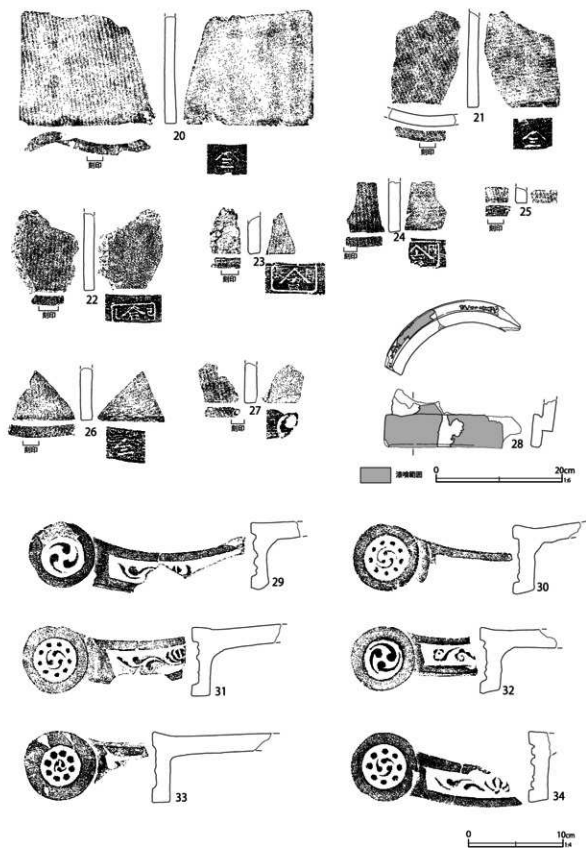
51～53は第2号建物跡出土資料である。51は棧



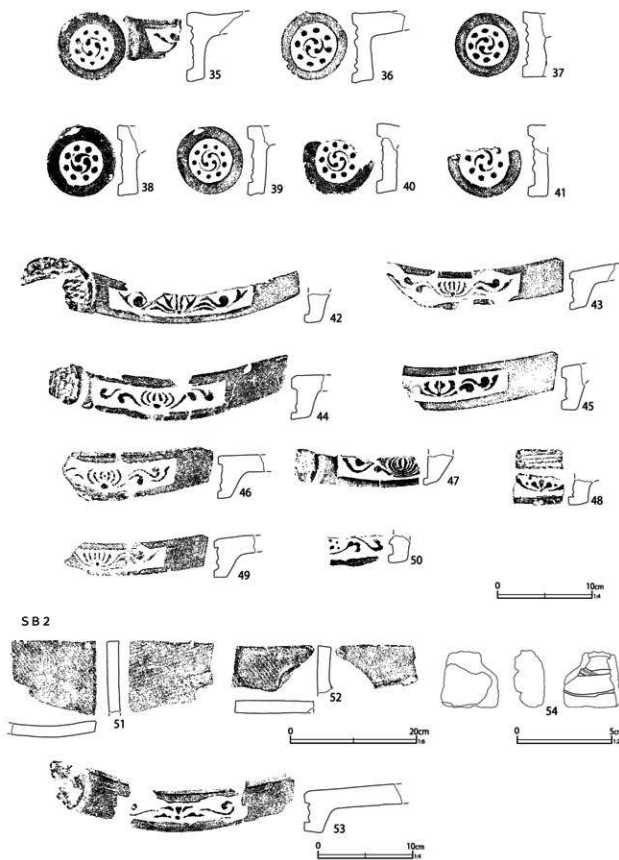
第72図 建物跡出土瓦（2）



第73図 建物跡出土瓦 (3)

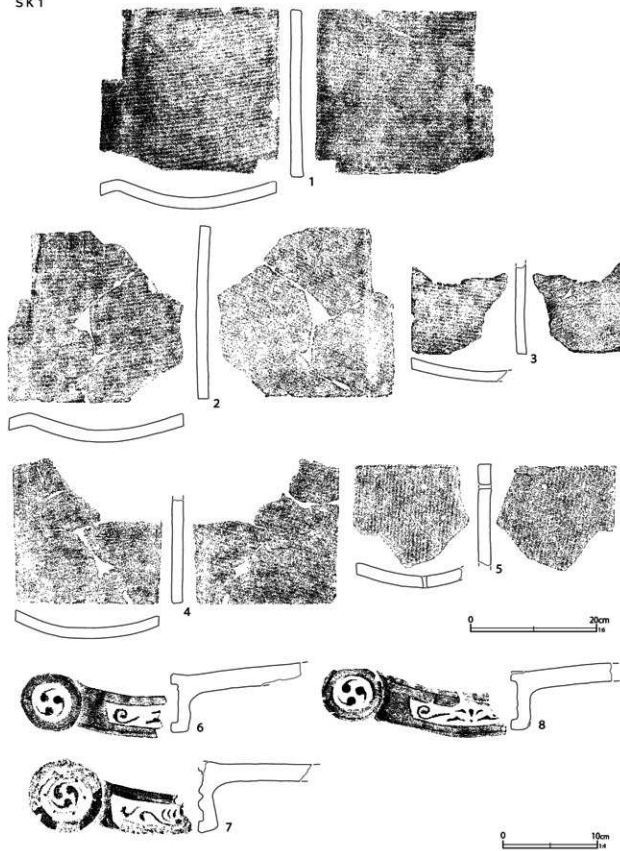


第74图 建物跡出土瓦（4）



第75图 建物跡出土瓦 (5)

SK1



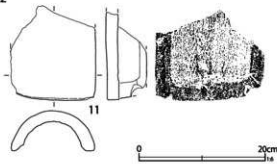
第76図 土壘出土瓦(1)

SK1



第77図 土曜出土瓦（2）

SK 2



第78図 土壇出土瓦(3)

瓦・平瓦である。52は長さ75cmの短い瓦に瓦当が付く瓦である。剥離面にカキ目が見られる。隅瓦から53の中心飾りは本道跡では唯一のものである。54は漆喰である。太い沈線状の凹みとカキ目状の痕跡が見られる。

第76・77図は第1号土壇出土の瓦である。全ての破片が破熟しており、変色、煤が付着している。

1～5は棧瓦・平瓦である。いずれも、表面は丁寧なナデ調整。裏面はヘラケズリのままのものが多く、表面の銀化が見られる。1・2には切り欠きが入れられている。5の尻部には釘孔が開けられている。

6～10は軒棧瓦である。いずれも垂れの子葉を欠いている。6・8・10は小型で垂れの幅が狭い。連珠のない三つ巴文左巻きである。7は連珠三つ巴文左巻き。連珠が少なく小さい。10は尻部に長い切り欠き。9は尻部に取付孔が2か所開けられている。尻部側の端部は、中央付近のみ幅広にヘラ切りされている。

第78図11は、第2号土壇出土の丸瓦である。裏

面布目。全体に煤付着。

第79図は第2号井戸跡出土資料である。1は軒丸瓦、連珠三つ巴文右巻き。巴が大きく圏線が認められる。2は隅軒平瓦で、三角形に成形されている。3は軒棧瓦、三つ巴右巻き。

なお、出土瓦については、調査現場で分類し、点数・重量を記録した。実測個体を除いて、廃棄を行った(第29表)。

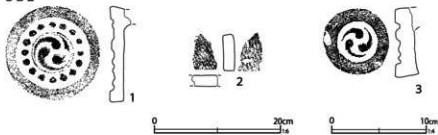
木製品(第80・81図) 加藤家屋敷跡では、第5号土壇、第2・3号井戸跡、盛土のトレンチから木製品が出土している。

第80図1・2は第5号土壇出土資料である。1は桶の底板で、傷みが進む。2は箱の部材と考えられる。両短辺に釘孔、切込みが見られる。

3～5は第2号井戸跡の井戸枠である。長さ1m、幅10cm前後の板材である。上部は地上に露出していたため、欠損している。全体に鋸痕が見られる。緩い弧を描き、下側の内面が削られ、底板の痕跡が認められることから、樽材等の転用と考えられる。内側の外面に焼印、もしくは印刷と認められる文字が確認できる。屋号、産地のようだが、腐食により部分的にしか遺存しておらず、判読できない。

第81図6～11は第3号井戸跡出土資料である。6は2m近い板材で井戸枠、7・8の角材も井戸枠、あるいは井戸枠の補強材と考えられる。いずれも鋸痕が明瞭に見られる。9は太さ3cmほどの竹材で、図示できた以外にも細かな破片が多く出土している。節が抜かれており、所謂「息抜き」の竹]

SE 2



第79図 井戸跡出土瓦

第26表 建物跡出土瓦観察表(第71~75図)

番号	種別	文様	法量(cm)			重量(g)	色調	備考	図版
			長さ 径	幅	厚さ 高さ				
1	鬼瓦		[32.8]	13.5	20~25 [26.0]	2800	灰	SB1掘り方 銀化14分割 漆喰付着	24-9
2	鬼瓦		[23.3]	13.5	25~45 [24.8]	2500	灰	SB1掘り方 14分割 銀化 被熱	24-10
3	鬼瓦		[22.0]	[9.2]	1.9	370		SB1 銀化 煤付着 釘穴	
4	鬼瓦		24.4	12.5	28~38 12.8	1300	灰	SB1掘り方 銀化 被熱	24-11
5	鬼瓦		[20.3]	[10.0]	25~29 [7.8]	600	灰	SB1 3分割 銀化	
6	鬼瓦		[13.6]	[11.0]	28~30 [9.0]	580	灰	SB1掘り方 銀化 被熱	
7	鬼瓦		[10.5]	[9.1]	4.5	240	灰	SB1掘り方 銀化	
8	鬼瓦		[5.2]	[6.9]	2.0	50	灰	SB1掘り方 文字瓦 銀化 裏面カキ目	
9	軒丸瓦	連珠三つ巴文左巻・14珠	14.5	—	2.1	340	灰	SB1掘り方 一部銀化 部分的に被熱	
10	軒丸瓦	連珠三つ巴文左巻・12珠か	[14.0]	—	3.1	200	灰	SB1掘り方 全体的に磨滅	
11	丸瓦		[27.1]	14.7	1.8	1000	灰	SB1掘り方 外面銀化 内面布目	
12	丸瓦		24.8	13.5	1.7	940	灰	SB1掘り方 銀化 内面布目後ヘラナデ	
13	丸瓦		[16.5]	14.3	2.1	500	灰	SB1掘り方 銀化 分割のための沈線・朱線 内面布目	
14	棧瓦		25.8	15.5	1.8	1320	暗灰	SB1掘り方 銀化 切欠き3.0×1.5cm	
15	棧瓦		[9.6]	[13.5]	1.7	240		SB1掘り方 銀化 7条1単位の波状の溝り止め 19と同様か 表裏丁寧なナデ	
16	棧瓦		[11.2]	[8.7]	1.6	200	灰	SB1掘り方 銀化 三寸の切欠きあり 表面荒れている	
17	平瓦		[7.1]	[7.3]	1.7	90	灰	SB1掘り方 銀化 11条直線波状 溝り止め	
18	棧瓦		[12.9]	24.7	2.0	750	灰	SB1掘り方 盛土A342 6条、10条、直線溝り 止め 被熱変色 釘穴あり	
19	棧瓦		[15.3]	[14.4]	1.6	360	黒灰	SB1掘り方 銀化 7条1単位の波状の溝り止め	
20	平瓦		[18.4]	[20.8]	1.8	880	黒灰	SB1掘り方 銀化 煤付着 刻印	
21	平瓦		[15.9]	[11.7]	1.6	380	灰	SB1掘り方 表面銀化 刻印	
22	平瓦		[12.7]	[9.6]	1.6	200	灰	SB1掘り方端面 銀化 刻印	
23	平瓦		[6.0]	[4.8]	1.9	50	灰	SB1掘り方端面 銀化 裏面被熱か 刻印	
24	平瓦		[7.9]	[6.7]	1.9	90	灰	SB1掘り方端面 銀化 刻印	
25	平瓦		[2.5]	[4.0]	1.8	20	暗灰	SB1掘り方端面 銀化 被熱 煤付着 刻印	
26	平瓦		8.1	10.2	1.7	130	暗灰	SB1掘り方端面 外面銀化 刻印	
27	平瓦		[6.6]	[6.8]	1.9	80	暗灰	SB1掘り方端面 銀化 刻印	
28	伏間瓦 (継丸瓦)		9.0	21.6	1.9	470	灰	SB1掘り方 漆喰表面全体的に付着	
29	軒棧瓦	三つ巴文右巻 江戸式Ⅱ(+)La	6.2 6.9	23.5	1.8	490	灰白	SB1掘り方 銀化	
30	軒棧瓦	連珠三つ巴文左巻・8珠	[8.1]	[17.5]	1.6	320	灰	SB1 一部銀化	
31	軒棧瓦	連珠三つ巴文左巻・9珠 江戸式Ⅱ(+)Lj	[9.9] 7.2	[17.8]	1.8	440	灰	SB1 銀化	
32	軒棧瓦	連珠三つ巴文右巻 Hh	[8.6] 6.7	[15.3]	1.7	350	灰	SB1 部分的に銀化 瓦当面深い 立体的	
33	軒棧瓦	連珠三つ巴文右巻・8珠	[13.3] 7.2	[15.2]	1.8	530	灰	SB1 銀化 煤付着 裏面ナデ	

番号	種別	文様	法量 (cm)			重量 (g)	色調	備考	図版
			長さ 径	幅	厚さ 高さ				
34	軒枕瓦	連珠三つ巴文左巻・8珠 江戸式Ⅰ・L a	7.5	[19.9]	—	310	灰	SB1 掘り方 銀化 連珠・巴彫り深い	
35	軒枕瓦	連珠三つ巴文左巻・9珠 L i	[6.2] 7.3	[14.0]	2.1	610	灰	SB1 一部銀化	
36	軒枕瓦	連珠三つ巴文右巻・8珠	7.2	—	2.2	200	暗灰	SB1 銀化	
37	軒枕瓦	連珠三つ巴文右巻・8珠	5.8	—	2.0	140	灰	SB1 銀化	
38	軒枕瓦	連珠三つ巴文左巻・8珠	7.3	—	2.1	120	灰	SB1 銀化	
39	軒枕瓦	連珠三つ巴文左巻・9珠	7.4	—	1.9	100	灰	SB1 連珠・巴小さい 銀化	
40	軒枕瓦	連珠三つ巴文左巻・9珠	[7.3]	—	2.1	80	灰	SB1 連珠・巴小さい 銀化 外面炭化物付着	
41	軒枕瓦	連珠三つ巴文右巻・8珠	(7.7)	—	2.1	80	黄灰	SB1 銀化 連珠小さく亀裂入る	
42	軒枕瓦	B種Ⅰ #	[7.6]	[29.0]	1.5	420	灰	SB1 掘り方 銀化 表面被熱か 全体に文様大	
43	軒枕瓦	江戸式Ⅱ(+)L i	[4.8]	[19.1]	1.7	230	灰	SB1 掘り方 裏面全体銀化	
44	軒枕瓦	江戸式Ⅲ L	8.8	25.2	1.7	400	灰	SB1・SB2 A3-I2No.222 中心掘り・唐草・子房不明瞭 風化	
45	軒枕瓦	江戸式Ⅲ L j	[2.4]	[16.6]	—	180	灰	SB1 掘り方 銀化	
46	軒枕瓦	江戸式Ⅱ(+)L	[5.6]	[15.9]	1.8	610	灰	SB1 掘り方 子葉剥離不明 風化	
47	軒枕瓦	江戸式Ⅱ(++)L i	[3.5]	[13.7]	—	120	灰	SB1 掘り方 銀化 文様深い 中心掘り三重	
48	軒枕瓦	C種東海式Ⅰ	2.5	[5.5]	—	30	にぶい 黄橙	SB1 唐草・子葉不明	
49	軒枕瓦	江戸式Ⅱ(+)L i	8.8	15.5	1.8	270	灰	SB1 掘り方 銀化	
50	軒枕瓦	C種東海式 H h	[2.2]	[6.4]	—	40	浅黄	SB1 一部銀化 中心掘り不明	
51	平瓦		[11.8]	[13.3]	1.8	320	灰白	SB2 A-A' 砂っぽい 色調明るい	
52	隅瓦		7.5	12.4	2.0	200	灰	SB2 A3J2No.53 表面銀化 裏面ヘラナデ 荒れている	
53	軒枕瓦	D種(多様)	[16.8]	[25.8]	2.0	940	灰	A3-J2No.24・25 A3-I1No.17 一部銀化	
54	漆喰		[3.0]	[3.0]	1.6	20		SB2 A3-I2 No.64	

第27表 土蔵出土瓦観察表 (第76~78図)

番号	種別	文様	法量 (cm)			重量 (g)	色調	備考	図版
			長さ 径	幅	厚さ 高さ				
1	枕瓦		26.5	27.9	1.8	1820	灰	SK1No.6-25-26 全体に被熱 変色 銀化 切込み 11.0×3.0cmあり(尺側)	
2	枕瓦		27.4	27.9	1.8	1720	黒灰	SK1No.10-23-31-35-58 全体に被熱 変色 煤付着 切込み10.5×3.5cm(尺側)	
3	平瓦		[14.1]	[15.1]	1.5	330	灰	SK1No.5-34-65 銀化	
4	平瓦		[23.4]	22.8	1.7	990	にぶい 黄橙	SK1No.13 SE2 被熱による変色	
5	枕瓦		17.1	18.5	1.8	670	灰	SK1No.19 銀化 釘穴あり径8mm	
6	軒枕瓦	三つ巴文左巻 江戸式か	[13.7] [6.2]	[16.0]	2.0	560	暗灰	SK1 銀化 全体に焼けている	
7	軒枕瓦	連珠三つ巴文左巻・6珠 中心Ⅱ(+)L 子葉なし	[11.7] (7.5)	[17.8]	1.8	510	灰	SK1 風化 被熱 煤付着	
8	軒枕瓦	三つ巴文左巻 多様変種Ⅰ	[10.5] [5.8]	[19.6]	1.9	480	暗灰	SK1 巴尾短い 瓦当小さい 一部銀化 全体に煤付着	
9	平瓦	江戸式か L i	33.0	[22.0]	2.1	2210	灰黄	SK1No.12-29-30-45 被熱し灰に変色 取付穴2孔あり	
10	軒枕瓦	瓦当三つ巴文左巻 江戸式Ⅱ(+)K a	[27.1] 5.9	28.7	2.0	2040	灰	SK1No.47 銀化 煤付着 一部被熱 表面ナデ 裏面ヘラナデ	
11	丸瓦		[14.2]	13.4	1.7	550	灰	SK2 銀化 全体に煤付着 裏面布目	

第28表 井戸跡出土瓦観察表 (第79図)

番号	種別	文様	法量(cm)			重量(g)	色調	備考	国産
			長さ 径	幅	厚さ 高さ				
1	軒丸瓦	連珠三つ巴文右巻・16珠	15.2	—	2.2	600	暗灰	SE2 一部銀化 大型巴に圈線尾が長い 炭化物・砂付着	
2	隅瓦		5.8	[4.0]	1.7	50	灰白	SE2 表面剥離 被熱	
3	軒棧瓦	三つ巴文右巻	7.3	—	2.3	110	暗灰	SE2 銀化 巴大きい 煤付着 瓦当面荒れている 内部二層	

第29表 瓦計測表

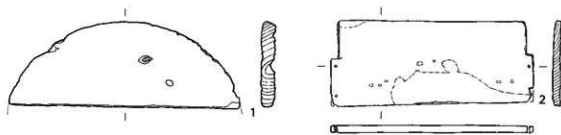
	計量数(g) 破片数(個)													
	平瓦	丸瓦	軒瓦	道具瓦	鬼瓦	羽印瓦	その他							
遺構	計量数	破片数	計量数	破片数	計量数	破片数	計量数	破片数	計量数	破片数	計量数	破片数	計量数	破片数
SB1	17,640	185	28,880	289	18,270	158	7,310	49	11,070	38	1,830	8	150	1
SE2	16,793	248	1,540	14	210	4	0	0	0	0	0	0	0	0
SK1	11,410	24	500	2	3,570	4	0	0	0	0	0	0	0	0
SK2	1,030	4	550	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
SK3	4,930	41	70	1	0	0	0	0	441	2	0	0	0	0
SK4	560	5	60	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
SK5	520	7	140	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
SE2	2,150	17	60	1	710	2	0	0	0	0	0	0	50	1
SE3	5,200	47	350	2	0	0	0	0	0	0	0	0	60	1
K1トレンチ	970	7	110	1	200	1	0	0	0	0	0	0	0	0
K2トレンチ	2,280	14	190	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
K3トレンチ	783	5	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
K4トレンチ	0	0	0	0	140	1	0	0	0	0	0	0	0	0
K6トレンチ	1,230	7	460	3	200	1	0	0	370	1	0	0	0	0
K7トレンチ	396	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
庭(南)	0	0	0	0	500	1	0	0	0	0	0	0	0	0
表探	2,400	1	230	1	2,860	1	0	0	0	0	0	0	0	0
盛土東側	370	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
1面	106	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
2面	0	0	0	0	32	2	0	0	0	0	0	0	0	0
A3-H2	676	4	0	0	8	1	0	0	0	0	0	0	0	0
A3-H3	1,250	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
A3-I1	4,109	59	0	0	0	0	0	0	0	0	50	1	0	0
A3-I2	24,929	230	930	3	500	2	0	0	0	0	0	0	0	0
A3-J1	2,615	56	330	3	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
A3-J2	6,280	69	700	9	1,810	6	0	0	0	0	0	0	0	0
A3-J3	4,180	25	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
盛土F A3-I1	0	0	0	0	320	1	0	0	0	0	0	0	0	0
盛土A3-I2	960	1	0	0	710	1	0	0	0	0	0	0	0	0
B3-B1	100	1	0	0	130	1	0	0	0	0	0	0	0	0
総合計	113,867	1,065	35,100	334	30,170	187	7,310	49	11,881	41	1,880	9	260	3

と考えられる。10・11は杭材で腐食が進む。井戸枠の補強材か。

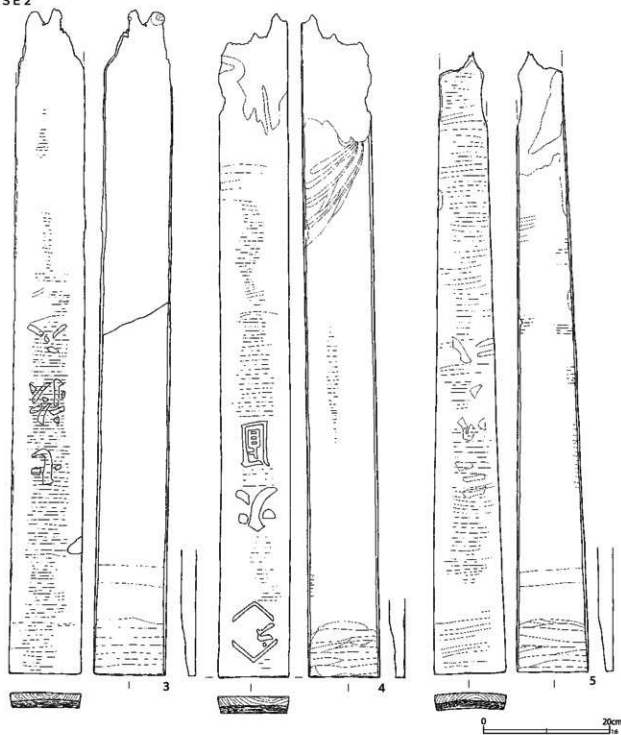
12は盛土に設定したトレンチから出土した深身の椀である。大型で、内外面とも炭化している。
金属製品 (第82～86図) 加藤家屋敷跡からは150点余りの鉄・銅製品が出土している。

出土資料の大部分は釘である。先端部を欠損しているものが多いが、49が長さ15cmを超え、特に大型である他は、8～9cm前後、6～7cm前後に大別できる。形態は49の頭部が鋸形である他は方形である。胴部の断面形は方形である。棒状製品や板状製品も多く、何らかの製品の部品と考えら

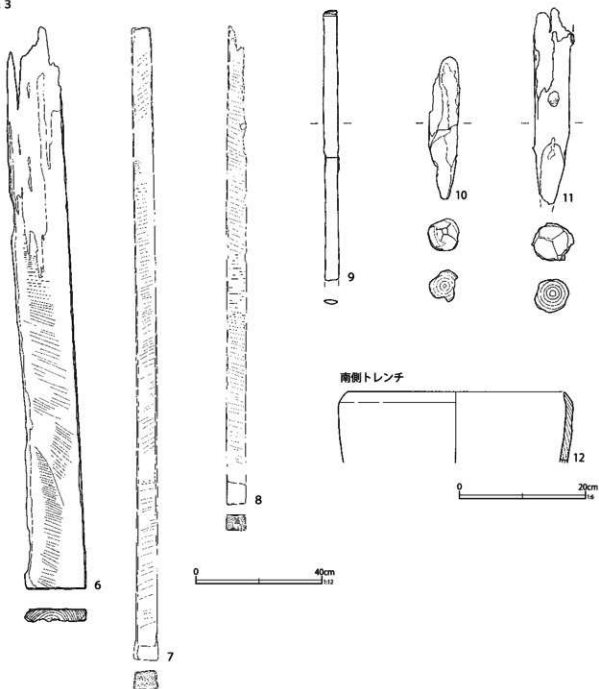
SK5



SE2



第80図 木製品(1)



第81図 木製品(2)

れるが用途は特定できない。

第1b号建物跡からは、挟み箱の部品、釘、銅線、煙管が出土している。1は挟み箱の竿通し金具である。箱に取り付く半円形の部品に、方形の竿通しが付く。13・14は銅線である。14は捻った状態で出土している。15は銅製の煙管の吸い口で、羅字が残る。

第2号建物跡からは、刃物、板状製品、乗燭、釘が出土している。16は片刃の刃物で、刃長18.3cmである。18は乗燭で、底面に孔が開いている。

第3号建物跡からは、29の銅板が出土している。湾曲した部品で、片側に小穴が開けられている。

第1号土壌出土資料(30～43)は、41が板状製品、その他は釘である。

第30表 木製品観察表（第80・81図）

番号	出土遺構	器種	法量 (cm)			木取り	備考	国産
			長さ 口径	幅 底径	厚さ 高さ			
1	SK5	底板	36.5	—	2.3	板目		
2	SK5	箱	32.5	13.8	1.3	板目	炭化有り	
3	SE2	井戸枠	[106.0]	11.4	2.3	板目	印刷あり 樽材を転用か	
4	SE2	井戸枠	[106.2]	11.3	2.7	板目	印刷あり 樽材を転用か	
5	SE2	井戸枠	[98.9]	11.4	2.4	板目	印刷あり 樽材を転用か	
6	SE3	井戸枠	[182.0]	19.6	4.0	板目		
7	SE3	角材	202.0	7.6	6.1	板目		
8	SE3	角材	[150.6]	6.0	4.9	板目		
9	SE3	井戸枠	[43.0]	2.2	0.6			
10	SE3	杭	[22.6]	4.5	5.0	芯持丸木	樹皮有り	
11	SE3	杭	[31.2]	6.6	5.8	芯持材	断面 幅5.3cm×厚さ5.2cm	
12	南側排水	不明	[34.8]	—	[11.0]	横木取り	内外面炭化	

第3号土壌からは、お玉、延べ板状の不明鉄製品、板状製品、釘、煙管が出土している。45はお玉状の製品である。径11.0cmの体部に径2.0cmの把手が取り付け付く。46は延べ板状の鉄製品である。断面方形。47は湾曲する製品の一部である。用途不明。48～61は釘である。62は煙管雁首である。先端が潰れている。

第5号土壌からは、環状鉄製品、耳かき、釘が出土している。63は環状を呈する鉄製品で、三重になっている。64は鱗状の模様が描かれている湾曲した銅製品である。65は耳かきである。さじは先端を曲げ延ばして作られている。

第2号井戸跡からは金槌、棒状品、釘が出土している。68は金槌で、口の片側が先切り状になっているが、縦向きで尖っており、一般的ではない形態である。口側は面取りされ、横は長楕円形である。

第3号井戸跡からは、環状の頭部が付いた釘が出土している。

73～89は、盛土に設定したトレンチから出土した。76・80は鏝、77は挟み箱の部品、78は鉄鎌、83は簀である。78の鉄鎌は鳥舌形鎌である。両刃で、平刃作り。逆刺はなだらかである。鍔部は断面長方形、鎌身間部は平坦である。茎の断面形は方形である。頭長は20cm、幅0.7cm、厚さ0.5cm、

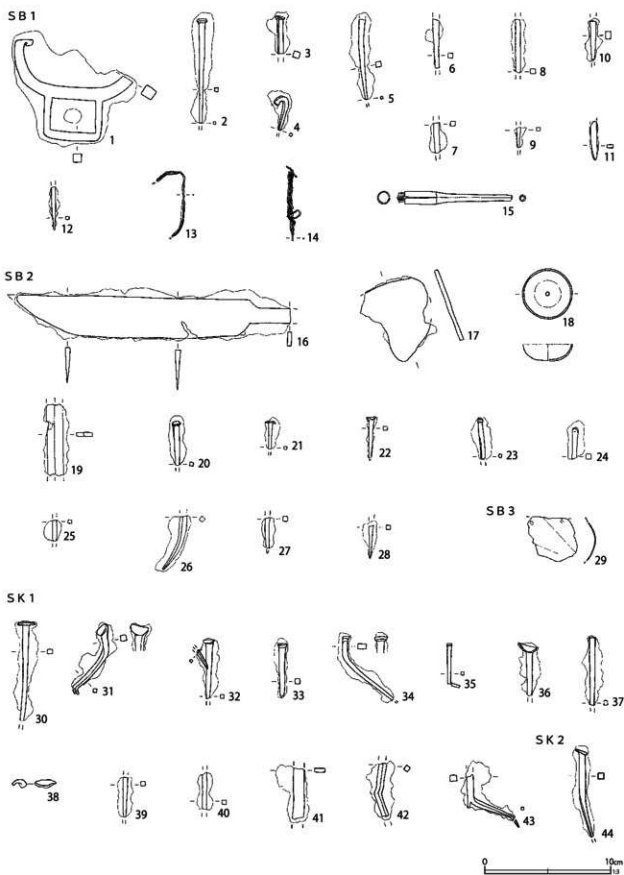
茎の幅0.2cm、厚さ0.2cmである。83の簀は全長76cmと小型で、頭部に菊のレリーフが入れられている。銅製。

73は円弧を描くスリット状の体部に直角に足が取り付け付く。ロストルカ。74は先端がへこみ、孔が開けられている。75は棒状品に板状の部品が取り付けられている。77の挟み箱の部品は1と同様である。79・81・82は何らかの製品の板状の部品である。82は両側縁があり、長三角形になる。84・85・88・89は棒状製品である。88は中位で折れている。86は厚手の円板状製品。ロストルカ。87は屈曲した板状製品で、中位に穿孔がある。

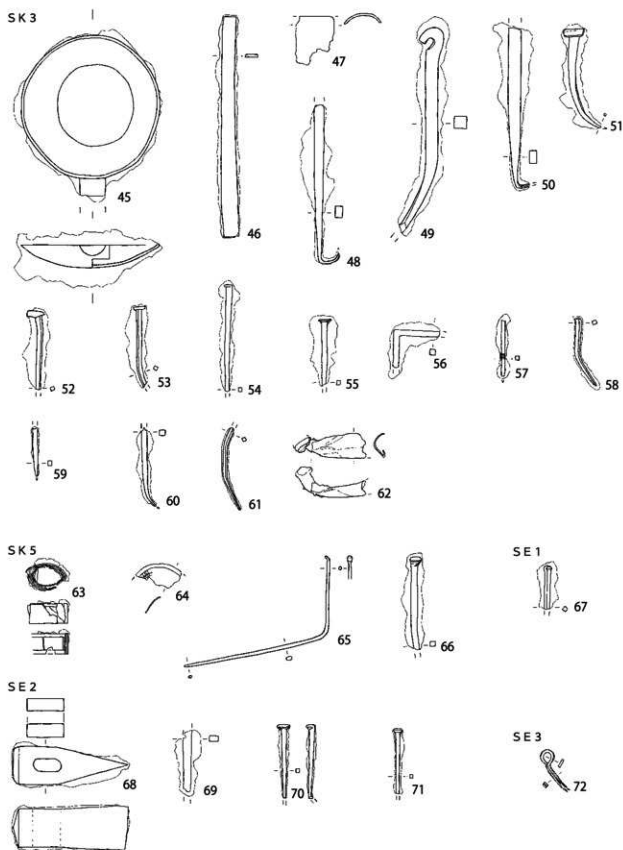
90～92は、第1面、第1a号建物跡検出面から出土したものである。90は湾曲した銅板、91は鎖である。95～103は第3面、第2号建物跡検出面からの出土である。95は簀の脚部である。96は刃物、97～103は釘である。97には針金巻き付けられている。93・94は、盛土下から出土した。93は刃物、94は棒状製品である。

104～118は、盛土出土のものである。107は鈎状の形態の刃物である。110・111は、大型の鏝である。117はごく薄い不明な銅製品である。118は銅製の簀の頭部で、透かし彫りになっている。

119は第4トレンチ出土の拳銃である。全長185cm、小型のスピンナー式拳銃である。把手が右側に

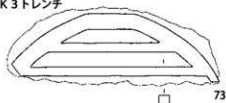


第82図 鉄製品 (1)

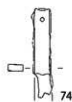


第83図 鉄製品 (2)

K3トレンチ



73



74



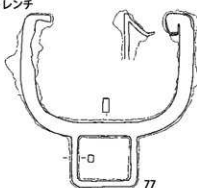
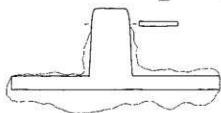
75

K6トレンチ



76

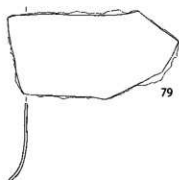
K7トレンチ



77



78



79



81



82



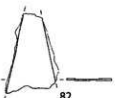
83



84



85

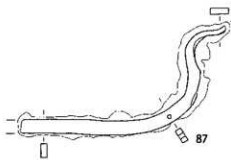


86

トレンチ不明



87



88



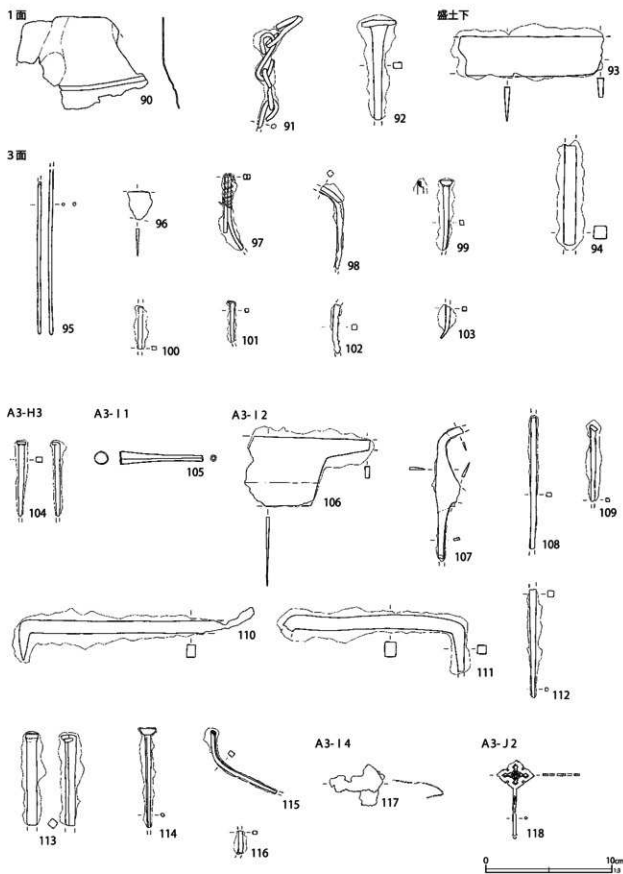
89



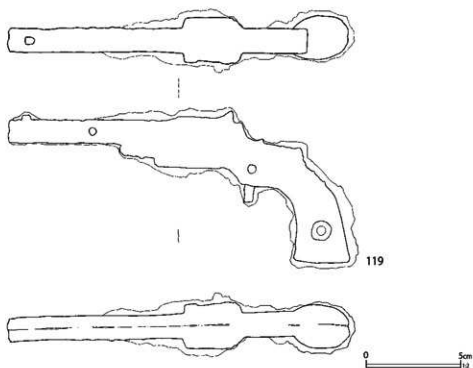
90



第84図 鉄製品 (3)



第85図 鉄製品(4)



第86図 鉄製品 (5)

第31表 鉄製品観察表 (第82~86図)

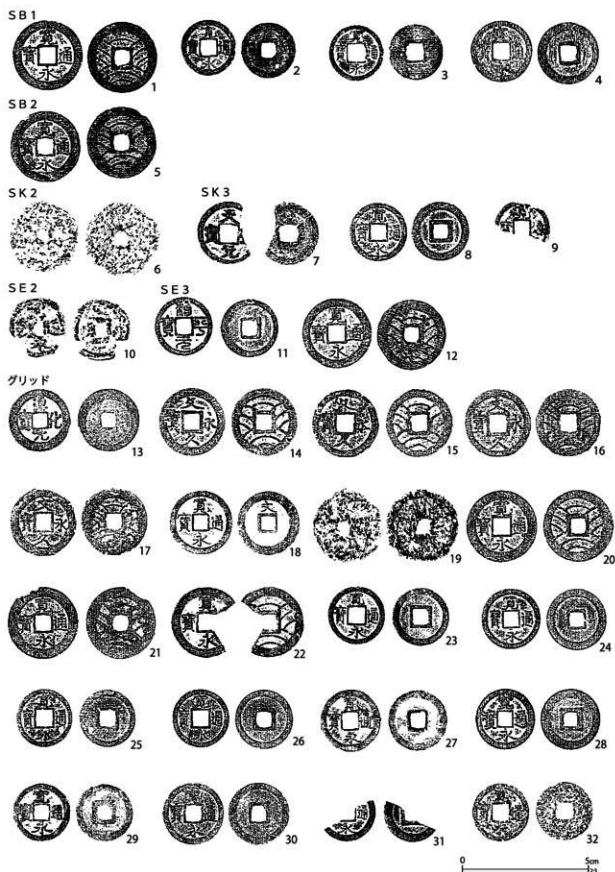
番号	出土遺構	器種	法量 (cm)			重さ (g)	備考	図版
			長さ 口径	幅 底径	高さ			
1	SB1	狭み箱	8.1	1.0	0.9	163.8	掘り方 狭み箱の竿通し金具	
2	SB1	釘	[7.7]	0.3	0.3	20.3	板P№9	
3	SB1	釘	[3.0]	0.5	0.5	5.1	板P№9	
4	SB1	釘	[2.7]	0.2	0.2	4.4	板P№10	
5	SB1	釘	[6.2]	0.4	0.4	14.8	板P№9	
6	SB1	釘	[3.9]	0.4	0.4	3.0	B-B'	
7	SB1	釘	[2.4]	0.4	0.4	3.1	板P №11-1	
8	SB1	釘	[4.3]	0.4	0.4	6.2	C-C'断面	
9	SB1	釘	[1.6]	0.3	0.3	0.6	板P№9	
10	SB1	釘	[3.4]	0.4	0.6	2.9	pit7一括	
11	SB1	不明品	[3.2]	0.5	0.4	1.8	C-C'断面	
12	SB1	釘	[3.4]	0.3	0.3	1.4	S8	
13	SB1	銅線	[5.1]	2.3	0.1	0.5	掘り方	
14	SB1	銅線	5.9	1.1	0.1	1.2	掘り方	
15	SB1	煙管	9.1	口付径0.5 小口径最大1.0		7.8	吸い口	
16	SB2	刃物	長さ[21.5]	刃長[18.3]	刃幅3.1	背幅0.4	140.0	
17	SB2	不明品	大きさ[6.2]×[5.5]		0.3	43.8		
18	SB2	乗機	3.9	1.3	0.1	15.7		
19	SB2	板状品	[5.7]	1.3	0.3	11.7		
20	SB2	釘	[3.4]	0.3	0.3	6.5		
21	SB2	釘	[2.1]	0.3	0.3	2.7		
22	SB2	釘	[3.2]	0.4	0.3	1.4		
23	SB2	釘	[3.2]	0.3	0.3	6.7		
24	SB2	釘	[2.5]	0.4	0.4	5.7		
25	SB2	釘	[1.7]	0.3	0.3	2.2		

番号	出土遺構	器種	法量 (cm)			重さ (g)	備考	図版
			長さ 口径	幅 底径	厚さ 高さ			
26	SB2	釘	[4.3]	0.4	0.4	9.5		
27	SB2	釘	[2.4]	0.4	0.4	2.8		
28	SB2	釘	[2.6]	0.4	0.4	2.4		
29	SB3	銅板	大きさ[3.6]×[3.9]		0.1	2.3		
30	SK1	釘	[7.8]	0.4	0.4	11.0	No70	
31	SK1	釘	[6.3]	0.5	0.5	9.8	一括	
32	SK1	釘	[4.7]	0.3	0.3	8.8	一括	
			1.6	0.2	0.2	—		
33	SK1	釘	[4.2]	0.4	0.4	5.5	No39	
34	SK1	釘	[6.2]	0.6	0.4	8.3	No71	
35	SK1	釘	[3.6]	0.3	0.3	1.8	一括	
36	SK1	釘	[4.1]	0.3	0.3	6.3	No40	
37	SK1	釘	[5.4]	0.3	0.4	8.0	一括	
38	SK1	釘	[1.7]	1.2	0.3	1.0	No60	
39	SK1	釘	[3.2]	0.4	0.4	3.3	No60	
40	SK1	釘	[3.0]	0.4	0.4	2.7	No60	
41	SK1	板状品	[4.1]	0.9	0.3	9.9	一括	
42	SK1	釘か	[4.3]	0.4	0.4	9.5	No42	
43	SK1	釘	[5.8]	0.5	0.5	10.5	一括	
44	SK2	釘	[6.9]	0.5	0.5	12.6		
45	SK3	お玉	[12.7]	11.0	0.2	27.23		
46	SK3	不明品	17.3	1.0	0.2	39.0	のべ板状不明品	
47	SK3	不明品	[3.8]	[3.0]	0.2	13.0		
48	K3トレンチ	釘	[12.5]	0.6	0.9	9.6		
49	K3トレンチ	釘	[16.3]	1.0	1.0	120.8		
50	K3トレンチ	釘	[12.6]	0.6	1.0	84.6		
51	SK3	釘	[8.3]	0.2	0.2	24.9		
52	SK3	釘	[6.2]	0.4	0.3	14.7		
53	SK3	釘	[6.4]	0.4	0.4	14.4		
54	SK3	釘	[8.5]	0.3	0.4	18.0		
55	SK3	釘	[5.3]	0.3	0.4	10.7		
56	SK3	釘	[3.1]	0.5	0.5	21.6		
57	SK3	釘	[4.6]	0.3	0.3	5.1	木質残る	
58	SK3	釘	[6.0]	0.3	0.4	5.8		
59	SK3	釘	[3.8]	0.3	0.4	2.8		
60	SK3	釘	[6.2]	0.5	0.5	8.8		
61	SK3	釘	[6.5]	0.3	0.3	4.1		
62	SK3	罐管	長さ[5.6] 火皿径[1.5]			14.3	雁首	
63	SK5	不明品	3.0	1.6	0.1	5.3		
64	SK5	不明品	大きさ[1.9]×[3.2]		0.1	1.6		
65	SK5	耳かき	17.6	0.3～0.5	0.2～0.3	10.9		
66	SK5	釘	[7.0]	0.4	0.4	18.9		
67	SE1	釘	[3.5]	0.3	0.3	7.6	F No17	
68	SE2	金錠	9.1	3.5	3.0	321.8	F No16	
69	SE2	棒状品	[4.9]	0.7	0.5	12.3		
70	SE2	釘	[5.7]	0.3	0.3	4.4		
71	SE2 F	釘	[5.0]	0.3	0.3	4.3		
72	SE3	環	縦[3.0]×横2.2		0.4～0.7	0.2～0.3	3.0	
73	K3トレンチ	不明品	[4.9]	15.7	0.9	475.5		25-1

番号	出土遺構	器種	法量 (cm)			重さ (g)	備考	図版
			長さ 口径	幅 底径	高さ			
74	K3トレンチ	不明品	[7.0]	1.2	0.5	17.7		25-1
75	K3トレンチ	不明品	[4.7]~[6.7]	0.4~0.5	0.4~0.5	15.3		25-1
76	K6トレンチ	鏡	7.3	0.5	1.1	36.7		25-1
77	K7トレンチ	挟み箱	縦[13.9]×横[13.8] 幅0.5~1.1 厚さ0.5~0.6			129.6	挟み箱の竿通し金具	25-1
78	K7トレンチ	鉄鏝	全長[14.0] 鏝長[4.0]×幅0.7×厚さ0.2			重さ24.5		25-1
79	K7トレンチ	不明品	[13.5]	[6.2]	0.2	135.7		25-1
80	K7トレンチ	鏡	11.7	0.7	0.5	43.8		25-1
81	K7トレンチ	不明品	[5.0]	[3.5]	0.2	4.5	全て欠けている	25-1
82	K7トレンチ	不明品	[6.3]	3.6	0.1	12.5		25-1
83	K7トレンチ	簪	7.6	1.9	0.1~0.2	4.8	銅製	25-1
84	K7トレンチ	棒状品	[9.4]	0.3	0.4	14.9		25-1
85	K7トレンチ	棒状品	[15.7]	0.4	0.4	27.2		25-1
86	トレンチ	不明品	大きさ[7.4]×[7.5]			12		25-1
87	トレンチ	不明品	[16.1]	1.1	0.5	95.8		25-1
88	トレンチ	棒状品	[31.0]	0.6	—	34.3		25-1
89	トレンチ	棒状品	[17.4]	0.6	—	45.7		25-1
90	盛土A3-12一面	銅板	大きさ[7.2]×[10.4]			0.1		25-2
91	1面	鎖	[8.9]	0.4	0.4	29.1		25-2
92	1面	釘	[7.9]	0.7	0.5	35.5		25-2
93	盛土下	刃物	長さ[11.2] 刃幅3.2 背幅0.5			109.6	A3-11 包丁か	25-2
94	盛土下	棒状品	[7.9]	1.0	1.0	51.0		25-2
95	3面	簪	[13.1]	0.3	0.3	8.7	右47g 左40g	25-2
96	3面	刃物	長さ[1.8] 刃幅2.2 背幅0.2			2.4	No48 A3-J2	25-2
97	3面	釘	[6.0]	0.5	0.4	11.3	No104 A3-J2	25-2
98	3面	釘	[6.8]	0.4	0.5	5.8	No43 A3-J2	25-2
99	3面	釘	[5.5]	0.4	0.4	8.7	No77 A3-J1	25-2
100	3面	釘	[3.3]	0.4	0.3	3.5	No43 A3-J2	25-2
101	3面	釘	[3.2]	0.3	0.3	1.8	No18 A3-J1	25-2
102	3面	釘	[3.9]	0.4	0.4	3.6	No12A3-J1	25-2
103	3面	釘	[2.6]	0.4	0.4	3.6	No12A3-J1	25-2
104	A3-H3	釘	[5.9]	0.5	0.4	6.2	下層	25-2
105	A3-I1	煙管	6.7	口付径0.6 小口径1.0		5.1	No1 吸い口	25-2
106	盛土	包丁	長さ[9.9] 刃部長[6.5] 背幅0.3 刃幅5.5			90.0	A3-J2	25-2
107	盛土	刃物	長さ[10.7] 刃幅0.5~1.4 背幅0.2 厚さ0.2			16.0	A3-J2	25-2
108	盛土	棒状品	[10.4]	0.5	0.3	7.4	A3-J2	25-2
109	盛土	釘	[6.0]	0.3	0.3	8.6	A3-J2	25-2
110	盛土	楔	[18.6]	1.0	0.7	113.3	A3-J2	25-2
111	盛土	鏡	[14.3]	0.9	1.1	114.1	A3-J2	25-2
112	盛土	釘	[8.6]	0.5	0.5	13.8	A3-J2	25-2
113	盛土	釘	[7.2]	0.6	0.6	28.5	A3-J2一面	25-2
114	盛土	釘	[7.8]	0.3	0.3	10.4	A3-J2	25-2
115	盛土	釘	[7.7]	0.5	0.4	7.7	A3-J2	25-2
116	盛土	釘か	[1.8]	0.4	0.3	1.5	A3-J2	25-2
117	A3-I4	不明品	大きさ[3.3]×[4.4]			0.1		25-2
118	A3-J2	簪	[6.0]	2.9	0.2	2.7	No1	25-2
119	盛土	拳銃	全長18.0 高さ8.0 幅2.4 径1.2~1.3			249.4	トレンチ4	26-1

曲がっており、銃身は一体ではなく、下面で溶接されている。

古銭（第87図） 加藤家屋敷跡からは多量の古銭が出土している。第1・2号建物跡、第2・3号



第87図 古銭

第32表 遺物古銭観察表（第87図）

番号	部種	出土位置	縦/mm	横/mm	厚さ/mm	重さ/g	備考	図版
1	寛永通寶	SB1	28.12	28.28	1.17	4.7	板PNa1 背文11波	
2	寛永通寶	SB1	22.05	22.13	1.18	2.3	B-B	
3	寛永通寶	SB1	21.94	21.97	1.07	2.0		
4	寛永通寶	SB1	24.61	24.60	1.18	3.2		
5	寛永通寶	SE2	28.19	28.18	1.02	4.1	焼土層 背文11波	
6	不明	SK2	(27.69)	(26.63)	(1.80)	5.6		
7	天聖元寶	SK3	(20.40)	(20.40)	(1.09)	1.0	1023年初鋳 北宋銭	
8	寛永通寶	SK3	23.32	23.28	1.00	2.2		
9	寛永通寶	SK3	(20.10)	(20.10)	(1.33)	0.5		
10	寛永通寶	SE2	(20.30)	(20.30)	(2.33)	1.8		
11	治平元寶	SE3	23.00	23.19	1.11	2.2	1064年初鋳 北宋銭	
12	寛永通寶	SE3	28.21	28.11	1.24	5.5	背文11波	
13	淳化元寶	A3-J2	24.92	25.07	1.21	3.6	3面（北宋990年頃） №67	
14	文久水寶	盛土	26.68	26.63	1.07	3.2	表土 草文 背文11波	
15	文久水寶	北斜面	26.86	27.00	1.39	3.6	草文 背文11波	
16	文久水寶	排水溝一括	26.47	26.09	0.95	2.4	真文 背文11波	
17	文久水寶	盛土	26.75	27.15	1.26	2.8	真文 背文11波	
18	寛永通寶	盛土	24.85	25.21	1.16	2.1	砂層下層 文銭	
19	不明	3面	(26.40)	(25.57)	(2.78)	5.8	鉄銭	
20	寛永通寶	B2-A9	28.24	28.28	1.19	4.1	№1 背文11波	
21	寛永通寶	K1トレンチ	28.44	28.20	1.10	4.6	IV層一括 背文11波	
22	寛永通寶	A3-H3	28.18	(27.50)	0.98	3.0	背文11波	
23	寛永通寶	砂層下層	23.01	22.98	1.09	1.8		
24	寛永通寶	盛土	24.33	24.31	1.25	3.0		
25	寛永通寶	盛土	22.69	22.61	1.00	1.2	A3-I2	
26	寛永通寶	東側一括	23.21	23.16	1.23	2.9		
27	寛永通寶	東側一括	24.15	24.06	1.11	2.6		
28	寛永通寶	表採	23.99	23.88	1.26	4.0		
29	寛永通寶	A3-H3	22.91	23.24	1.04	1.9	銭一括	
30	寛永通寶	不明	24.40	24.52	0.79	2.0		
31	寛永通寶	3面	(20.20)	(20.20)	0.96	0.9	南東部銭一括	
32	寛永通寶	不明	22.95	23.07	0.99	2.1		

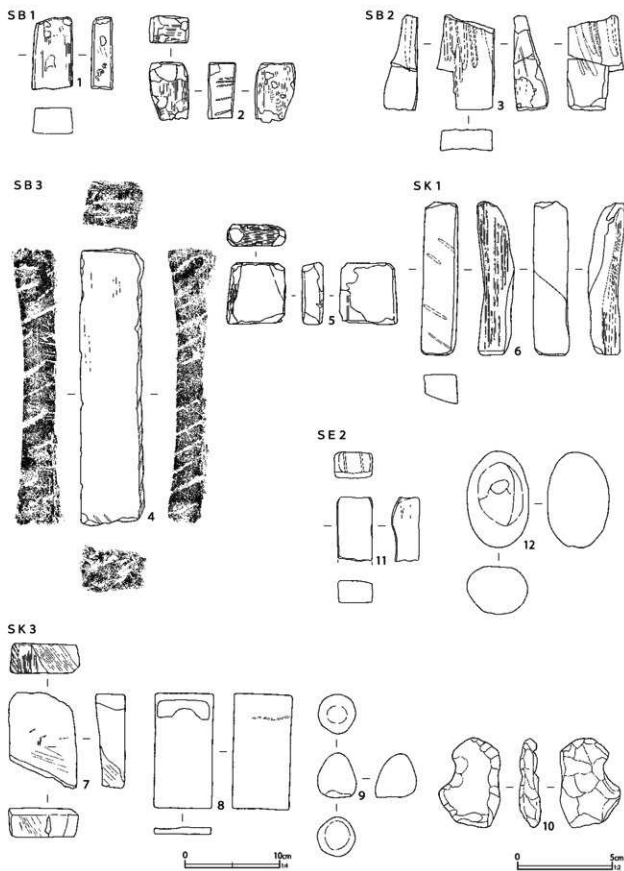
土層、第2・3号井戸跡、盛土の各遺構、グリッドからの出土である。大部分が寛永通宝である。16・17が古寛永である他は新寛永である。背文があるものは、いずれも11波である。18は文銭である。6・19は鉄銭である。寛永通宝の他に北宋銭の治平元寶（篆書体）、淳化元寶（真書体）、明銭の天聖元寶などの中国銭、幕末に鋳造された文久永宝（真文、草文）がある。

石製品（第88～91図） 加藤家屋敷跡からは多量の石製品が出土している。第1～3号建物跡、第1・3号土層、第2号井戸跡、盛土の各遺構、グ

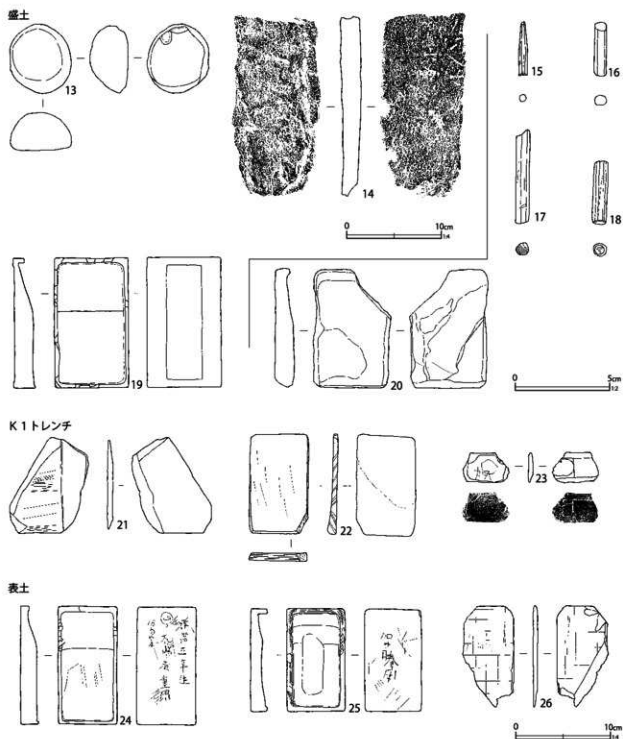
リッド、表採からの出土である。砥石、硯が大部分で、その他に軽石、石筆、火打石、石臼がある。

砥石に見られる成形痕はほぼ同一で、櫛目状のタガネ痕、大きな単位の平ノミ痕が見られる。この成形痕を磨り消す形で使用痕が認められる。石材は、戸沢石、流紋岩、凝灰岩、砂岩、ホルンフェルスである。4は長さ29.4cmで特大である。

硯（8・19・20・24・25・27～29）は、ほぼ同一の規格で、側縁部が剥離しているものが多い。ほとんどが粘板岩性である。8は海の部分のみが一部残存するのみで、全体が剥離している。25は



第88図 石製品(1)

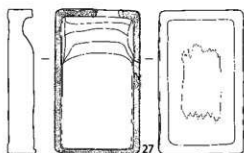


第89図 石製品 (2)

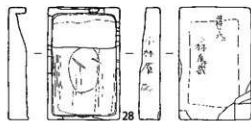
縁に格子と草をあしらった線刻による装飾が見られる。27は大型で、縁に幾何学的な装飾が施されている。石材は赤間石である。25・28は陸の部分の摩耗が著しい。20は光沢のある白色で、全体が

剥離している。小型の石灰岩製。24・25・28・29には釘書きによる刻書が施されている。24には「尋常三年生 丸山清重用 まるやま」、25には「加藤用」、28には「尋六 小林庫蔵」、29には「村庄

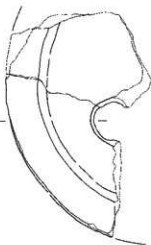
表探



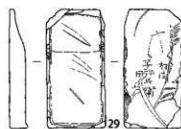
27



28



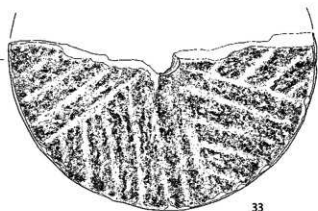
32



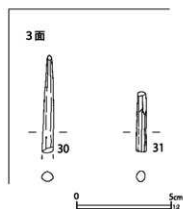
29



盛土



33



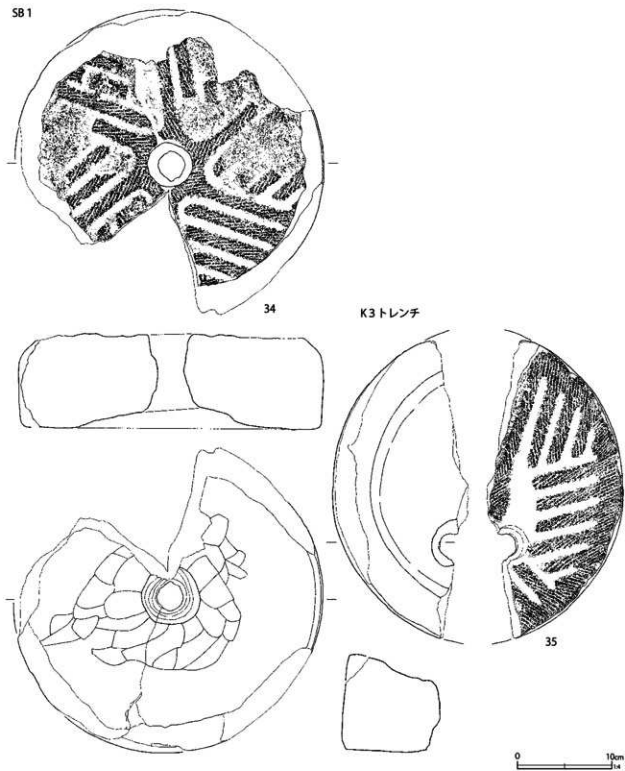
3面

30

31

0 5cm 10cm

第90図 石製品 (3)



第91図 石製品(4)

字弥兵衛 田上」と書かれており、使用者の名字やその住所が記されている。

軽石(9・12・13)は多孔質の角閃石安山岩製

である。13にはほとんど使用痕が見られない。

火打石(10)は、玉髓製で全面剥離している。

板碑(14)が1枚のみ出土しているが、長方形

第33表 石製品観察表 (第88～91図)

番号	種別	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	備考	図版
1	石製品	砥石	(7.7)	4.2	2.7	180.5	SB1 掘り方 凝灰岩 (緑色) 磨面状タガネ痕	
2	石製品	砥石	6.1	4.2	2.9	124.3	SB1 P7 礎石一括 流紋岩 平ノミ痕 刷毛目状のタガネ痕	
3	石製品	砥石	[10.0]	6.9	2.3	225.0	SB2 C'C' 砂岩 刀の痕跡か	
4	石製品	砥石	29.4	6.7	4.5	1378.4	SB3 砂岩 使用面上のみ 上下左右平ノミ痕	
5	石製品	砥石	[6.5]	6.1	2.2	—	SB3 A3-1-3 Na.5 砥沢石	
6	石製品	砥石	16.1	3.6	3.0	315.5	SK1一括 流紋岩 平ノミ痕顯著	
7	石製品	砥石	10.0	7.0	3.1	334.7	SK3 ホルンフェルス 磨面状タガネ痕	
8	石製品	硯	12.0	6.1	[0.7]	103.4	SK3 粘板岩 全面剥離 海のみ一部残存	
9	石製品	軽石	2.3	2.0	2.0	5.0	SK3 角閃石安山岩 (多孔質)	
10	石製品	火打石	4.8	3.3	1.0	18.0	玉髓 全体に削られている	
11	石製品	砥石	(6.7)	4.3	2.3	132.9	SE2 流紋岩 磨面状タガネ痕 平ノミ痕	
12	石製品	軽石	10.0	6.5	5.5	169.5	SE2 角閃石安山岩 (多孔質)	
13	石製品	軽石	7.3	6.5	4.0	95.4	盛土A3-1-2 角閃石安山岩 (多孔質)	
14	石製品	板碑	(19.5)	(9.5)	2.0	786.7	盛土A3-1-2 緑泥片岩 傷文「六日」表面押印痕	
15	石製品	石筆	(2.8)	0.4	—	1.0	盛土A3-1-2 滑石 細丸	
16	石製品	石筆	(2.8)	0.5-0.6	—	1.7	盛土A3-1-2 滑石 細丸	
17	石製品	石筆	(5.0)	0.7	—	4.9	盛土A3-1-2 滑石 細丸 工具痕	
18	石製品	石筆	(3.2)	0.7	—	3.8	盛土A3-1-2 滑石 細丸	
19	石製品	硯	13.7	7.8	2.3	464.6	盛土A3-1-2 粘板岩 ガジリか	
20	石製品	硯	6.2	4.1	1.0	38.2	盛土表土 石灰岩 全体に剥離	
21	石製品	石板	10.2	8.5	0.5-0.7	58.6	K1 トレンチ 粘板岩 石板の未製品	
22	石製品	石板	10.5	6.2	0.5-0.7	85.3	K1 トレンチ 粘板岩 砥沢石か 内外面被熱 平ノミ痕	
23	石製品	石板	(3.2)	(4.9)	0.4	7.4	K1 トレンチ 粘板岩「加」「〇」刻書	
24	石製品	硯	12.5	6.3	1.8	321.5	盛土表土 粘板岩 刻書あり	
25	石製品	硯	10.8	6.1	1.7	227.0	盛土表土 粘板岩 刻書あり	
26	石製品	石板	(10.7)	(5.4)	0.5	43.5	盛土表土 粘板岩 表面格子状線刻 擦過痕あり	
27	石製品	硯	15.0	9.0	3.0	903.9	表探 粘板岩 赤間か	
28	石製品	硯	11.8	7.5	2.1	422.1	表探 粘板岩 刻書あり 海中央凹み	
29	石製品	硯	12.5	6.0	1.7	296.0	表探 粘板岩 刻書あり	
30	石製品	石筆	(5.1)	0.5-0.6	—	—	3面 滑石	
31	石製品	石筆	(3.1)	0.5	—	—	3面 滑石 八角形	
32	石製品	石臼	長さ[23.8] 幅[15.4] 推定径35.4 高さ6.7 重さ28kg	一面表探 上白 安山礫				
33	石製品	石臼	径(22.5) 芯棒孔の径(2.1) 幅18.8 高さ6.5 重さ6.2kg	盛土A3-1-2 下白 安山礫				
34	石製品	石臼	径(22.0) 芯棒孔の径2.7 高さ10.1 重さ14.2kg	SB1 S30・S31 下白 安山礫				
35	石製品	石臼	長さ[31.5] 幅[14.4] 推定径34.0 高さ10.0 重さ6.4kg	K3 トレンチ 上白 安山礫				

に整えられており、何らかの用途に転用されたと考えられる。左側の隅のみが判読でき、「六日」の日付が確認できる。裏面押印痕。

石筆 (15-18・30・31) は、所謂細丸形で、滑石製である。断面形は多角形になっている。

石板 (21-23・26) は粘板岩製である。21は分割線と考えられる太い溝が掘られ、無数の擦痕、鋸痕が見られることから、未製品と考えられる。23には「加」「〇」の刻書が見られる。26の石板

には格子状に線刻が施されている。

石臼 (32-35) は、安山岩製である。上白、下白が出土しているが、組み合わせではない。32・33の挽面は6区画6溝・7溝である。32は側面に製作時の痕跡と考えられる削り痕が見られる。34・35の挽面は全く異なっている。細かな摺目が入れた後に、大きく溝状の刻みが入れている。

V 調査のまとめ

1. 調査の成果

栗橋関所番土屋敷跡の調査では、足立家、葛田家、加藤家の各屋敷跡に当たる箇所から、建物跡6棟、盛土3基、石垣1基、井戸跡3基、土壇5基、焼土遺構10基が検出された。遺構の時期は江戸時代中期末から明治時代初頭にかけて、年代としては18世紀前半から19世紀後半に当たる。

足立家屋敷跡からは、建物跡2棟、盛土1基、石垣1基、焼土遺構10基が検出された。

足立家屋敷跡の盛土上から検出された第1号建物跡は、『足立家文書』の明治17年(1884)の図面とはほぼ同様の間取りである。この直下から、ほぼ同一構造の第2号建物跡が検出された。盛土の下からは、性格不明の焼土遺構10基が検出された。

葛田家屋敷跡からは、盛土のみが検出された。

加藤家屋敷跡は4棟の建物跡が検出された。盛土上面から第1a号、中位から第1b号、盛土下位から第2号が検出された。第2号建物跡は、寛政12年(1900)の火災直後のものである。その直下の土壇からは被熱した陶磁器、瓦、木製品が多く出土している。更に1m下からは、第3号建物跡が検出された。

また、調査区の東端からは、土壇2基、井戸跡3基を検出した。井戸跡は井戸枠の内側がコンクリート製で、近代までの利用が考えられる。

2. 出土遺物の変遷

本遺跡からは、江戸時代中期から明治時代前期、18世紀から19世紀に至る大量の遺物が出土している。埼玉県北東部における江戸時代を中心とする遺跡の調査は初めてである。そのため、栗橋関係の整理では出土遺物の様相を把握するために、継続的な調査と出土遺物の整理が行われてきた東京大学構内遺跡群の分類(東京大学埋蔵文化財調査室1999、以下「東大分類」)との比較を行った。この分類を下敷きにした栗橋分類、編年は現在進

行中の整理の大きな課題である。

ここでは所謂東大編年における陶磁器の位置づけをもとに、大きく7段階に区分した。

1期 加藤家屋敷跡第3号建物跡が該当する。具体的な出土遺物からではなく、層位論的な関係により認定した。18世紀前半に遡る可能性がある。

2期 加藤家屋敷跡第1・2号土壇、第2・3号井戸跡が該当する。18世紀中葉から後半。

第1号土壇は、瀬戸美濃産花生などの17世紀後半代と考えられる陶磁器が認められるが、肥前系磁器の梅花繁き文、梅樹文の大振りの碗・皿が多く、筒形碗や蛇の目高台の皿を含まない点などから東大編年Ⅴa期(18世紀前半)に相当する遺物が主体と考えられる。一方で、Ⅵ期以降に見られる瀬戸美濃灯明皿も見られる。総合すると、18世紀前半から中葉の遺物を含み、18世紀中葉から後半に埋没した遺構とできよう。全体に被熱しており、火事の後に片づけられたものと考えられる。

このように一つの遺構における伝世品的なものと廃絶段階のものの混在は、江戸時代の遺構出土遺物に多く見られる様相である。このため、江戸遺跡では遺物の総体的な組成を捉えるために、出土状況表を作成している。第34表には、時期区分の軸とした加藤家屋敷跡について示した。

第2・3号井戸跡も、第1号土壇と同様の振りの碗・皿が多いが、蛇の目高台の中皿が認められるなどやや後出的である。第1・2号土壇の中間的な様相と言えようか。2期の後半とする。

3期 加藤家屋敷跡第3～5号土壇が該当する。肥前系磁器の厚手筒形碗、朝顔形碗が多く、初期の端反碗、広東碗の蓋、小丸碗、蛇の目軸剥ぎの皿が見られる。瀬戸美濃系磁器は含まない。東大編年Ⅵb～Ⅶ期に相当する。18世紀後半から19世紀初頭。

全体的に被熱し、変色や煤が付着するものが多

い。特に第5号土壇のかわりけは溶けて発泡、変形している。第2・3号土壇からは焼土化した壁土が出土している。寛政12年（1800）の足立家文書に見られる火災によって被災し、片付けられた生活用具と考えられ、年代の一つの定点となる。

4期 火災直後の加藤家屋敷跡第2号建物跡、足立家屋敷跡焼土遺構が該当する。肥前系磁器が主体だが、両者とも瀬戸美濃系磁器を組成に含み、広東碗との共伴は判然としなが、端反碗が見られる。東大編年Ⅷa期に相当する19世紀第1四半期頃と考えておきたい。碗・皿類は3期に比して、やや小型となり、全体に高台が高めである。陶器碗類も小ぶりで器高が低くなる。脚付火鉢は本期から認められる。5期に当たる萬古焼や萩焼を含むが、盛土中の上下のため、混入と考えられる。

5期 加藤家屋敷跡第1b号建物跡とその盛土が該当し、島田家屋敷跡盛土の中心となる時期である。肥前系磁器の組成や特徴は4期と明瞭な差はないが、瀬戸美濃系磁器の量比が大きくなる。肥前系磁器では、高台が高い端反碗、蛇の目高台の皿、輪花の一枚絵の大皿が組成に加わるが、湯呑碗、彌徳利は認められない。瀬戸美濃系磁器は高台が高い端反碗が多く、蓋が目立つ。水滴が多い。脚付火鉢など火鉢類も多い。東大編年Ⅷb～c期に相当、19世紀前半と考えられる。

6期 足立家屋敷跡第2号建物跡とその盛土、加藤家屋敷跡第1a号建物跡とその盛土が該当する。肥前系磁器は小丸碗、端反碗、広東碗、水滴、瀬戸美濃系磁器は端反碗、湯呑碗が認められる。陶器、土器の植木鉢、土瓶が見られる。東大編年Ⅷc～d期に相当し、19世紀中葉としておきたい。

7期 足立家屋敷跡第1号建物跡とそれに伴う盛土が該当する。明治17年の絵図面と合致するため、それを上限とする。各屋敷跡の盛土出土資料も、本期あるいはそれ以降のものが多く。

第1号建物跡からは、小片ながら型紙摺り、あるいは酸化コバルト使用の瀬戸美濃系磁器端反碗

や皿が出土している。東大編年Ⅷ期に相当し、19世紀後葉としておきたい。

盛土中からは、幕末から明治頃に見られる笠間焼蛇の目高台鉢や、明治9年（1876）以降の生産である大堀相馬窯産の相馬駒焼「田代法橋」銘印が見られ、年代の目安になると考えられる。

本調査での出土資料で最も多いのが本期以降のものである。特に加藤家屋敷跡盛土からが多い。

瀬戸美濃系磁器、瀬戸美濃産陶器が主体だが、大堀相馬、笠間、萬古、淡路の地方窯産の陶器も認められる。最も多いのは産地不明の土瓶、鍋、急須である。特に7期以降に急速に量比が増える。

瓦については完形品が少なく、いくつかの点の指摘に留めたい。加藤家屋敷跡から出土した鬼瓦は、所謂「影盛」と呼ばれるタイプで、本陣跡などとは異なる。軒丸瓦の瓦当文は、連珠三つ巴文が基本である。傾向に留まるが、足立家屋敷跡は右巻き、加藤家屋敷跡は左巻きが多く、島田家屋敷跡は双方が認められる。

垂れの部分は所謂江戸式だが金子分類Ⅱ式そのものではなく、中心飾りの花弁が江戸式より重多い。Ⅱ式の亜種と考えられ、生産、供給も江戸とは異なると推定される。関連して注目されるのが垂れに押された刻印である。屋号と考えられる「山に吉」、「山に石」、「山に三」の左右に文字が入るものと、「幸栄」「田宮瓦」などがある。この内「田宮」は幸手の中世からの呼称であり、現在も字名がある。現在瓦作りは行われていないが、角四石や雲母を含む胎土などから、利根川流域の生産地が発見される可能性がある。

加藤家屋敷跡からは東海系（第75図48・50）、B種（第75図42）、D種（第75図53・第76図8）が出土しており、複数の供給系統が窺われる。

金属製品はほとんどが鉄釘で、他に建築材、調理用具、武具、服飾品等がある。中でも、風鈴（第27図3）は朝鮮系梵鐘の模倣で、細密な文様が施されている。また加藤家屋敷跡の古拳銃は、県内

請の記録は残されておらず、どのような基準に基づき4家の建物跡の建て替えや盛土の構築がなされていたのかが、今後問題になる。

こうした基礎の構造は、瓦と石の差はあるが、嘉永元年(1846)に建設された川越市本丸御殿(天野・岡田2006)、幕末の武家屋敷と推定されている水川神社遺跡(瀧澤2013)でも認められる。江戸時代後期から明治時代初期の大型瓦葺き建物の地形工法であった可能性が高い。

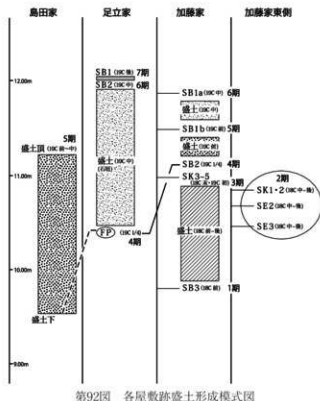
公的施設である身舎のほかは、足立家屋敷跡の付属する建物可知れるのみである。以下では、この部分を付属建物と呼称する。この部分が番士家族の実際の生活空間と考えられる。近接する前後の時期と考えられる1・2号でも、絵図では北東側隅とされているカマド部屋が、2号建物跡では異なる間取りの中央から検出され、相違している。身舎の高い規格性、継続性に対して、付属建物はかなりの頻度で改築されていたと考えられる。足立家文書には異なる間取り図が複数見られるが、付属建物の改変を反映していると推定される。

各屋敷跡の盛土は、現段階では足立家屋敷跡が、焼土遺構⇒第2号建物跡⇒第1号建物跡の2段階、島田家屋敷跡が1段階、加藤家屋敷跡が第3号建物跡⇒第2号建物跡⇒第1b号建物跡⇒第1a号建物跡の3段階行われたと考えられる。この内、加藤家屋敷跡3号建物跡と2号建物跡の間の盛土については直接の連続性を確認できなかったが、2号建物跡の下位に盛土が連続する様相が確認されているため、その存在を推定した。

埼玉、北埼玉地域では、主に江戸時代後期から明治時代初期に、水害の避難施設である所謂「水塚」が造られ、栗橋地区だけで118例が認められる(東部地区文化財担当者会2013)。番士屋敷跡の各盛土も、こうした水塚の一種と考えられる。

盛土は山を1箇所造り、周辺に土を入れる。あるいは版築状に整えられた工事が明らかになった。

県内ではこれまで、水塚の構造や構築課程につ



第92図 各屋敷跡盛土形成模式図

いて明らかにされている例はなく、他県の例も含めた構造や地域性の検討が今後の課題である。

足立家文書には、「拝領屋敷」としての各屋敷跡の規模を示す記述が元禄16年(1703)、天保10年(1839)に見られる。そこでは長軸の規模が38~47mとされているが、盛土基底面の規模とは合致せず、各屋敷跡の敷地全体を指すと考えられる。

本調査における各番士屋敷跡の変遷と年代は、第92図のようにまとめることができる。

4. 古拳銃について

加藤家屋敷跡からは、古拳銃が盛土東側に設定した第4トレンチ内から陶磁器とともに出土した。陶磁器類は、肥前系磁器筒形碗、皿、瀬戸美濃系磁器端反碗、広東碗、湯呑碗、型押皿、瀬戸美濃系陶器片口鉢、水指、地方窯産土瓶、鍋などで、型紙刷りの磁器を含まないため、6期、19世紀中葉に相当する。拳銃も同時期のものと考えられる。

残念ながら現時点では、その産地や型式、年代の詳細については不明である。以下では、古拳銃の概要と、現時点での認識をまとめておく(註1)。

口径・規格・用途 全長18.5cm、22口径（約5.5mm）で6連発。護身用で、威嚇に使われる場合が多い。

形態的特徴 銃身が溶接されている。上部にリム（補強骨）がなく、銃身が折れるタイプである。銃止め2か所。引き金はスパー型。把手上位の台座部分に角があり、下部はスクエアカットである。

年代 1873年頃にリムが付くようになるため、それ以前。明治3・4年（1870・1871）頃市販のタイプとは異なるため、文久・慶應年間（1861～1866年）と考えられる。伴出遺物の年代と矛盾しない。

生産地 地金が良質のためアメリカ製か。引き金スパー型で、台座部分に角があるため、コルトやS&W製ではない。南北戦争時（1861～1865年）の、町工場等での大量生産品か。

課題 本来銃は銃身の一体性が重視されるが、本例は銃身が溶接されている。この最大の特徴が今

後、生産地や型式を解明の手掛かりと考えられる。入手や廃棄の経緯も、合わせて問題になるだろう。

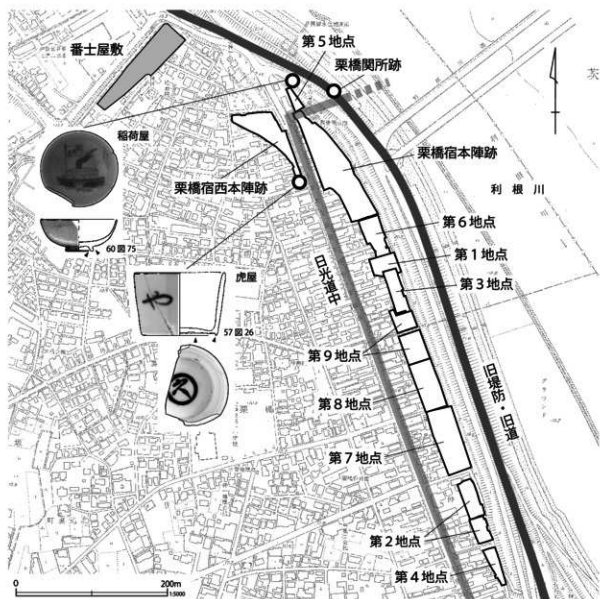
5. 栗橋宿と番士屋敷跡

本事業団では平成24年度から、栗橋宿本陣跡、栗橋宿跡の調査を継続して実施している。現在も第9・10地点の調査を継続中である（第35表）。夥しい遺構が検出され、平成28年度までに総面積32,000㎡、遺物はコンテナ300箱に上る。

番士屋敷跡の調査では、明治35年（1902）の営業便覧にみられる舟波町の稲荷屋、西本陣の調査区に当たる脇本陣の虎屋等の銘の入った磁器が出土しており、宿跡が番士の生活空間であったことが明らかになった（第93図）。図中に迅速図に見られる宿裏手の堤防上の古道を示したが、番士屋敷跡、稲荷屋、関所がその古道に並んだ形で検出されている点は興味深い。

第35表 栗橋宿関連調査一覧

地点	次数	調査年度	面	調査遺構
本陣跡	1次	25年度	第1面	建物跡23棟、土壇242基、井戸跡6基、埋植85基、焼土遺構3基、杭列15条、溝跡6条、ビット53基
	2次	25年度	第1面	建物跡15棟、土壇84基、井戸跡5基、埋植38基、杭列2条、溝跡2条
	3次	26年度	第1面	建物跡9棟、土壇90基、井戸跡11基、埋植21基、杭列7条、溝跡3条
		26年度	第2面	建物跡4棟、土壇261基、井戸跡10基、埋植18基、杭列1条、溝跡6条
	4次	27年度	第2面	建物跡1棟、土壇53基、井戸跡2基、杭列1条
西本陣跡	1次	27年度	第1面	建物跡11棟、土壇46基、植跡31基、杭列2条
	2次	28年度	第1面A区	建物跡14棟、土壇52基、埋植19基、井戸跡3基、溝跡3条、杭列9条、池跡2基、沼跡1箇所
		28年度	第1面B区	建物跡1棟、土壇10基、埋植9基、道路跡2面、杭列1条、木樋4条、埋筋遺構2基
		28年度	第2面A区	建物跡1棟、土壇40基、埋植5基、埋壁2基、井戸跡1基、溝跡2条、杭列9条
		28年度	第2面B区	建物跡10棟、土壇111基、埋植7基、井戸跡2基、杭列9条、木樋2条
第1	1次	24年度	第1面	水塚跡1基、石垣1基、井戸跡1基、土壇25基、焼土遺構9基
第2	1・2次	24・25年度	第1面	土壇15基、溝跡1条、池跡1基、杭列1条
	2次	25年度	第2面	壁穴状遺構2基、土壇24基、溝跡3条、ビット2基、性格不明遺構3基
第3	1・2次	25年度	第1面	土壇129基、埋植2基、溝跡3条、杭列5条、ビット12基、性格不明遺構4基、石敷遺構1基
	2次	26年度	第2面	土壇117基、埋植3基、埋籠1基、ビット8基
第4	1次	25年度	第1面	土壇21基、溝跡1条、木樋5条、杭列4条、性格不明遺構3基
第5	1次	26年度	第1面	建物跡1棟、土壇18基、溝跡3条、ビット4基、木樋1条
		26年度	第2面	土壇26基、溝跡3条、ビット4基
第6	1次	26年度	第1面	水塚跡1基、建物跡20棟、土壇39基、埋植12基、溝跡7条、焼土土壇5基
	2次	27年度	第1面	建物跡4棟、土壇14基、埋植18基、井戸跡1基、溝跡3条、杭列1条
		27年度	第2面	土壇172基、埋植4基、井戸跡3基、溝跡5条、杭列3条
第7	1次	26年度	第1面	建物跡4棟、土壇80基、埋植4基、杭列5条、溝跡3条、ビット9基
	2次	26年度	第2面	土壇65基、埋植11基、井戸跡1基、溝跡4条、ビット3基
第8	1次	28年度	第1面	建物跡3棟、土壇283基、埋植15基、杭列6条、溝跡12条、ビット18基、木樋1条
		28年度	第2面	土壇99基、埋植2基、井戸跡2基、溝跡3条、ビット4基



第93図 栗橋宿跡・番士屋敷跡関係図

しかし、整理の結果からは武家屋敷であるためか、番士屋敷跡と宿跡はそれほど密接な関係は見出し難い。鬼瓦などは本陣や宿跡のものとは全く異なる形式である。階層的な区別が感じられる。

日光道中、利根川、関所、本陣、宿は、旅人や住民にとっては一つの栗橋であったはずである。調査地点各々の性格を明らかにするとともに、今後相互の関係性についても検討を進めたい。

註1、古拳銃については、小西雅徳、峯田元治両氏に御教示頂いた。

引用・参考文献

- 天ヶ島岳・岡田賢治 2006 『川越城跡第2次発掘調査報告書』川越市立博物館
 大成可乃 2011 『東京大学構内遺跡出土陶磁器・土器の分類（2）』東京大学構内遺跡調査研究年報7
 金子 智 1994 『尾張藩越町邸跡出土瓦類の検討』『尾張藩越町邸跡』紀尾井町6-18遺跡調査会
 久喜市教育委員会 2015 『久喜市栗橋町史』第一巻 通史編上
 東京大学埋蔵文化財調査室 1999 『東京大学構内遺跡出土陶磁器・土器の分類（1）』東京大学構内遺跡調査研究年報別冊2